

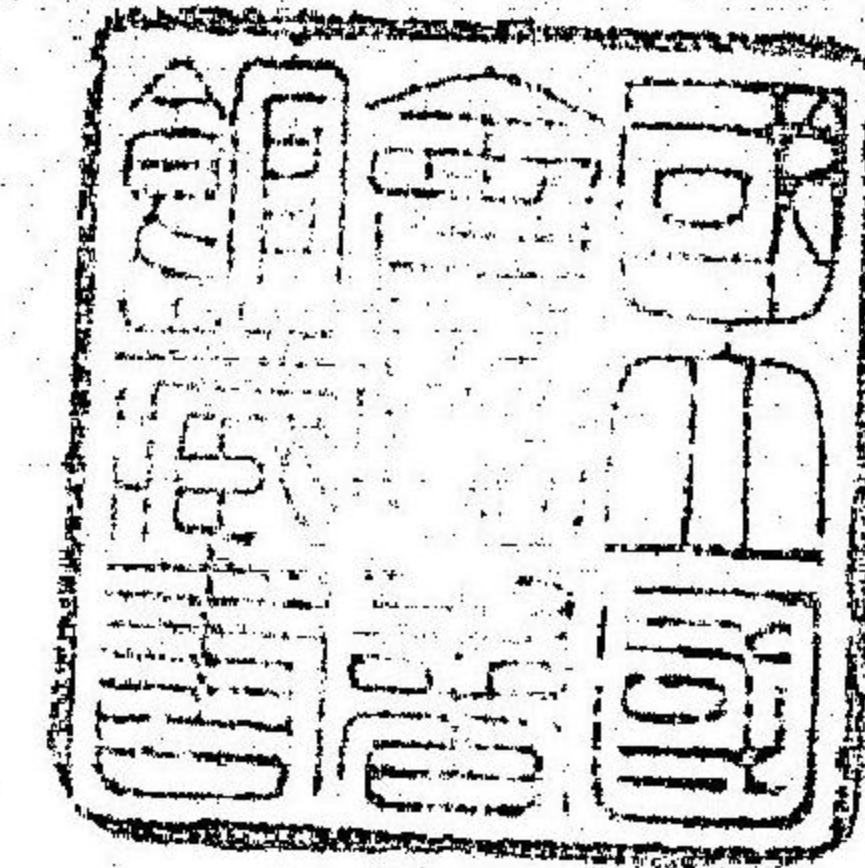
工B-60

文學博士外山正一述

山存稿

前編

東京丸善株式會社



049.1  
T0587t



300966



慶應二年十一月一日英國留學の爲め出發の途中上海にて時に十九歳。

後列向つて右より

(一) 外山捨八(正二)

(二) 林桃三郎(董)

(三) 福澤英之助

(四) 杉徳三郎

(五) 億川一郎

(六) 安井眞八郎

(六) 岩佐源二

最前列

箕作大六(菊池大麓)

前列向つて右より

(一) 市川盛三郎

(二) 箕作奎吾

(三) 成瀬錠五郎

(四) 中村敬輔(正直)

(五) レベレンド、ウイリヤム、ロイド

(六) 川路太郎(寛堂)

(七) 伊東昌之助(岡保義)



英國留學中

上の右 一八六七年、慶應三年、(ッ)、ロンドンにて。時に二十歳(？)。

下 一八六七年、慶應三年六月五日、ロンドンにて。時に二十歳。  
上の左 英國留學中、時日詳ならず。



明治初年歸朝中及米國留學中

- 中 明治三年、大儀見元一郎(中) 木村熊二(右) 二氏と共に。時に二十三歳。  
上 一八七一年、明治四年、米國ミシガン州アンアアホルにて。時に二十四歳。  
下 一八七六年、明治九年、米國より歸朝の前、桑港にて、時に二十九歳。





歸朝後

上の右 明治十年、三十歳。

上の左 三十だい、時日詳ならず。

下の右 明治二十年、四十歳。

下の左 明治二十四年六月十三日、四十四歳。



明治三十年、五十歳。



明治三十一年、五十一歳。

### 山存稿叙

抑も人生の目的何れにありや近來の學説は吾人に教へて曰く人生の目的は自己の擴張を計るにあり而して自己の擴張は過去現在及未來に亘りて之を爲すを得べしと此見解に従へば眼を古今の書籍に曝し思を東西の學理に潜め歴史文學の跡を辿り美術工藝の奥を窺ふは是れ古今東西に亘りて自己を擴張するもの縦横の策を弄しては蘇張の辯を演壇講臺に振ひ諤々の説を立て、は韓柳の筆を新聞雜誌に走らすは是れ現代に亘りて自己を擴張するものに外ならず以て事

業を後代に残し思想を後人に傳ふるを得るに至りては誰か其自己を後世に擴張し知己を千載の下に得るの道なるを拒まんや

然りと雖も洋の東西を問はず過去に溯りて自己を擴張するは其人自ら爲す可くして他人代りて爲すを得ず只現在と未來とに亘りて自己を擴張するに至りては其人自ら之を爲すを得べく他人も亦代りて之を爲すを得べし故人の事蹟を記し其遺稿を公にするの類は蓋し後者に屬す人生の目的にして自己の擴張に在りとすれば其人を現在并に未來に擴張せんが爲め子孫知友の力を此に盡すは寧ろ當然の事にして其人の

行爲言論が世を益する効果の大小如何の如きは抑も末のみ

先人中道にして歿し自己の擴張一旦止む若し此際先人の爲めに新なる生命を喚び起し先人をして現代并に未來の人と更に相交通せしめんと欲せば傳紀を作り遺稿を集めて是を世に公にするの外他に方法を求む可らず而も生等が敢て自ら進んで是を爲さざりしものは何ぞや一介の書生身學窓にありて未だ容易に此大事を爲し難きを以てなり

先般三上參次建部遜吾の二氏自ら奮つて先人の遺稿編纂の業に當らんことを申出でらる蓋し三上氏は多

年先人と共に職を文科大學に奉ぜし人建部氏は現に  
 先人の講座の後繼者たるの人二氏教を先人に受くる  
 の日淺かりしに拘らず師弟の義を重んぜらるゝこと  
 深く繁忙の身を以て貴重の時間を割き進んで事に従  
 はれんとす厚情何を以てか報いん即ち喜んで二氏に  
 託するに遺稿編纂の事を以てす是に於てか二氏先人  
 の知友濱尾新先生の助力の下に着々業を創め三上氏  
 は専ら先人の事蹟を尋ねて傳紀を記され建部氏は専  
 ら遺稿を集めて是を類別せられ三星霜を閲して今や  
 茲に存稿成る存稿の成る全く上記三氏の力の致す所  
 生等の深く感謝する所なり

夫れ此の如く本書發行の目的は主として先人の擴張  
 を計るにあり殊に先人生前其所信を公にせんが爲め  
 に書籍を著したることありと雖も未だ嘗て一たびも  
 利益を目的として之を發行したる例なし故に其遺稿  
 の値を市賈に問ふが如きは固より其遺志にあらず若  
 し之を一讀せんと欲する篤志家あらば之に一本を贈  
 呈すること最も可なる可し然れども家に餘財少なく  
 俄かに之を實行し難し乃ち單に實費を以て之を世に  
 頒たんとす小柳津要人氏は數十年の昔嘗て先人と奇  
 遇ありし人此企を賛し勉めて廉價に發行の勞を取ら  
 んことを諾せらる先人遺志の幾分を達するを得るは



全く小柳津氏の方によるもの茲に之を鳴謝す六  
先人の平素愛誦せし「ロングフーロー」の詩に曰く

“Lives of great men all remind us

We can make our lives sublime,

And, departing, leave behind us

Footprints on the sands of time.”—A Psalm of Life.

何ぞ其調の高くして其意の深き殊にそが先人の愛誦せし所のものなるを思へば其肺肝に徹する所のもの豈啻に一遍の詩趣のみならんや今や「ロングフーロー」の所謂「砂上の足跡」は集めて此一巻にあり此足跡の由來を語るものは三上氏此足跡を集め列ねたるものは建部氏共に師弟の因あり此足跡に序する

ものは其子是を導くものは生前の知己濱尾先生なり而して是が發行の勞を取るものは小柳津氏舊知たり斯の如き人々の間に本書の成る實に先人の本懐なるべし是を普通の言辭に依りて表さば「斯の如くなれば先人亦以て地下に瞑す可し」と云ふべきも先人嘗て其著「我信界」中に曰く「人には永存するの道が二様あるなり、若し子孫があらば肉體に於ても能く繼續して生存し得るなり、一任、子孫なく、肉體上の繼續なきも、精神上に於て能く永存するを得るなり、或は功績の結果として或は主義の結果として子々孫々まで永く其の勢力の影響を及ぼす事は肉體の存否には依らざるなり」と

因て生等は將に云はんとす曰く斯の如くなれば先人亦以て紙上に躍如たるべしと  
生等の不肖を省みず茲に自ら本書に序する所以のものは適々以て先人が嘗て一たびも他人の書に序せざりし素志を貫かんとするに外ならず

明治四十一年九月一日

男 岑 作 共識  
男 高 一

凡 例

- 一 此書輯録する所は主として先人が世に問ひ若くは問はんと擬せし所に係り日記散筆書翰抄録の如きは悉く闕略に隨へり宜く輯録すべき所にして而も散逸して編者の手に入らざりしもの思ふに尙尠からざるならん先人に知交を賜へる大方諸彦の幸に注意を寄せられんことを切望す
- 一 大學に於ける講義案には「社會學案」英文三種邦文一種主としてプラトール、ホップス、モンテスキウ、コムト、キッド、グムプロキッツを叙述顯現せる「社會學史案」英文及邦文六種「心理學案」英文一種「心理生理學案」英文一種「心理學資料」英文一種及「論理學案」英文一種あり其他また「歴史雜纂」英文一種あり此書に是等を輯録せざるは其頗る浩瀚なるを其英文若くは混文にて叙述せらるゝこと及び此書編纂の趣旨が序文に記せる所の如きに在るとの爲なり他日好機を得ば此類を一括して別個の編纂を試るを可とすべし
- 一 「日本知識道德史」の續稿として「皇位繼承論」數百枚あり論じて治承壽永の交に至る今考ふる所ありて暫く之を輯録せず
- 一 文藝詞藻に屬するものは頗る洗鍊を缺くものと雖も其作られたる又は其公に

凡 例

一

せられたる時代に對して一種文學史的關係ありしと想はるゝものは敢て之を輯録せり

一英文及英語演説の草稿は百方之を索めたれども遂に多く之を獲る能はざりき今神田乃武氏の校定を乞ひて卷末僅に二篇を加へたるは尙已むに優らんを思へばなり

一本書題して存稿といふ必ずしも字句の洗練に取るにあらず唯子孫及門の情棄つるに忍びざるものあり採録の範圍尋常に倍する所以なり而も之を稱して全集といはざるは乃ち如上の理由に本づく

一輯録の次第は大抵題目の近似せるものを一群に纏めんと期しその餘題意の相關涉せざるものは大抵年代の順序に隨ふ

一用字送り假名等は速記者又は植字者の疎漏に出づと認むべきものゝ外は一切原稿の儘を存し敢て妄に之を改訂せず唯原稿の片假名を用ゐたるものをすべて平假名に改めたるのみ贅頭の如きも一切原態を存し故らに添削を加へて全篇を整一するを爲さず

一先人在世中に公刊となれるものは篇末に「公刊」の二字を加へ稿未だ完成せざる

ものは「未定稿」の三字を加へ唯書おろしのままにして未だ何等の推敲をも經ざるものには「草稿」の二字を加へたり未定稿若くは草稿をも今公刊に附するは亦唯一層判明に先人の面目を存せんとする編者の微意に外ならず

一本書の編纂について濱尾新先生は深厚なる同情と周到なる助力とを賜はれり卷首及卷表の題字は先生の特に揮毫を賜へる所に係る三上參次建部遯吾の兩氏は編輯に關する一切の事務に關して厚き助力を與へられ小柳津要人は印刷發行の事を擔當せられたり加藤弘之、菊池大麓、神田乃武、三宅雄二郎、目賀田種太郎、中島力造、箕作佳吉、箕作元八、穂積陳重、山川健次郎、松井直吉、井上哲次郎、坪井九馬三、櫻井錠二、元良勇次郎、澤村政太郎、田中館愛橘、富井政章、長岡半太郎、上田萬年、清水彦五郎、緒方正規、藤澤利喜太郎の諸氏は先人の逸事及遺稿を寄せて直接間接に此業を補助せらるる卷頭所掲の寫眞數葉は菊池氏及小柳津氏の特に寄せられたる所其説明は菊池氏に負ふ所たり神田氏は先人が米國留學中の師友に書を寄せて其所見を徴するの勞を取られ乙骨太郎乙、川路寛堂、林董の諸氏は皆先人と舊交あり各當時の性行逸事について材料を給せらる而して先人の傳記は實に三上氏の筆に成りて濱尾、菊池、加藤、三宅、建部の諸氏并に編者の閱を經た

、山存稿

四

るものたり以上の諸氏は皆特に先人との知交を回憶して進みて如上の幹旋勞  
勛に就かれたるなり是れ編者が茲に明記して感佩の至情を表する所而して又  
先人の生涯一面の表示たるべきを信する所なり

明治四十一年十月一日

編者識

、山存稿總目

前編上

研究及批評

前編下

教育論策

後編上

社會評論

議會演說

後編下

、山存稿總目

、山存稿

藝文

英詞藻觀

編首

寫真六枚

、山存稿叙

凡例

、山存稿總目

傳

# 、山存稿 前編 目次

上

## 研究及批評

日本知識道徳史

神代の女性

井上博士に答ふ

再び井上博士に答ふ

神代の婚姻及び家族制度

神代に於ける政治思想及び制度

養子論

民権辨惑

ペンサム氏の普通選舉論者なることを證明して毎日記者の蒙  
を解く

、山存稿前編目次

三頁

二五〇

二七五

二八三

二九一

三三四

三六〇

三九八

四三四

、山存稿

政府職權の範圍

人權新説の著者に質し併せて新聞記者の無學を賀す

再び人權新説の著者に質し併せてスベンセル氏の爲に冤を解く

人種移轉の説

天變地異について

注意の論

普通總念の説

心像

人生の目的に關する我信界

下

### 教育論策

日本の教育

東京女學館第一回卒業式に於ける演説

女子教育の方針如何

二

四四五

四八四

四九五

五一二

五三二

五三九

五五三

五六九

六〇一

三頁

三五

四七

日本教育會を起さずんばあるべからざる理由

市町村立小學校授業料に就て

高知縣に高等中學を設立すべきの意見

高等中學校存廢に關する意見

高等中學改正案

大學新設の得失に關する意見

修史及び史料事業に關する意見

外國語教員養成に關する意見

英語教授法

地方商業學校長會議に於ける演説

本會を祝し併せて希望を述べ

大隈内閣と教育

文部事業の行政整理を難す

教育行政上高等教育會議の利益を論ず

過去一年間に於ける教育事業の大頓挫

、山存稿前編目次

三

六四

八五

一〇七

一一一

一二六

二四四

二五一

二五五

一五八

二一〇

二二一

二三二

二七五

三八六

二九八

教育の必要及効能

京都の教育に就て

明治の教育

明治の教育と長野縣

新潟縣と高等教育

明治の教育者に要する注意

教育振起の必要

静岡縣人の教育熱如何

教育上の所感

教育制度論

三〇六

三二九

三四七

三七五

四二一

四七一

五〇二

五六七

六一一

六三九

一〇三

八

六四

# 外山正一先生小傳

## 第一章 祖先……先生の幼年時代

小石川の傳通院前より柳町の新開地へ渡らうとする途中に、一つの小さな流れがある。これに一つの小橋が架けてあつて、裏柳橋と名けられて居る。其近傍に跡見女學校がある。この邊一面の新開地は、舊幕時代には旗下士家人の邸地であつたが、所謂瓦解の時に、それ等の邸宅は皆退轉して、それより後暫くの間は、或は田となり、或は畑となつて、參次が東京へ出て來た時代にも、五月の頃その邊りを通行すれば、蛙の聲の喧しかつたことを今でも記憶して居る。その後追々と再び開けて、町家が櫛の齒の如く建連なり、今日見るが如き熱鬧の巷となつたのである。幕末より今日に至るまで、世上の變化の劇しいことは、有史以來始めての事であるが、この柳町邊りの變化も實に滄桑の感に堪へないのである。嘉永年間の版なる江戸切繪圖を開いて見れば、この小橋の西北の袂、即ち今は小石川區柳町二十番地二十一番地に當れる場所に、外山小作と云ふ名が載せられてある。これが即ち、外山先生の祖先のお名であつて、外山先生は實にこの所に於て、呱呱の聲を擧げられたのである。外山家の

先代は久しく四谷の大番町に住はれて居つたが、天保八年に至つてこの柳町へ移られたらうである。

外山家の出自は藤原氏である。その祖先に、室町幕府に仕へた人で、後に三州額田郡の住人となられた人がある。そののち彼の松平記なる元龜三年十二月二十二日の三方原合戦の條に、先陣酒井左衛門尉忠次、石川伯耆守數正等の備へのうち、石川が手にては外山小作と云ふ者、一番槍を合せて功名すと記載してあるのも、即ち先生の祖先の一人である。この小作君は正重と名乗られた人で、早く徳川家康公に仕へて、永祿十一年濱松合戦の折にも功を樹て、殊にこの三方原の合戦には、上の松平記にもあるごとく、石川數正の手に屬して、小山田、山縣等の率ゐたる甲州勢に對して先蒐けをして、黒絲絨の鎧武者と一番に槍を合せて、功名を博せられたのである。然るに、此合戦には家康勢全く敗れて濱松城へ退却することとなり、正重君もまた、二十九歳にして君の御馬前に於て討死せられた。外山先生の祖先に、かくの如き三河武士、しかも忠勤を抽んでたる人を見るのは、特に注意すべきことで、所謂家風と云ふものは、其祖先の人物によることが少からぬのである。正重君の子正勝君もまた家康公に仕へ、のち、二代將軍秀忠公に隨ひて、大阪の冬夏兩度の陣に参加せ

られたことがある。孫の正吉君に至つて、天主番の頭となり、祿は二百二十石を食んで居られた。それより後、代々の中に、或は具足奉行となり、或は、藏奉行となられた方もあるが、多くは大番の士となつて、幕府に仕へて居られた。先生の祖父小作正周君の如きは、大番士となり、大阪城若くは二條城の在番として、上方に上らるゝこと、八度の多きに及んだと云ふことである。この正周君は、繼嗣のなかつたが爲に、大番の士大石四郎左衛門義寛君の次男忠兵衛正義君を養うて子とせられた。是れ即ち外山先生の父君である。

忠兵衛正義君は、若きより文武の志の篤き方であつた。まだ幼かつた時、殿中に於ての素讀吟味に召出され、その成績の優秀であつたに依つて、拜領物を仰付けられ、面目を施されたことがある。後年幕府の書籍編輯方御手傳といふ命を受けられたことのあるも、蓋しかく文事の素養があつた故である。また武藝の方にあつては、天保五年三月に、時の世子内大臣家慶公が、高田の馬場に於て半的上覽のあつた節に、忠兵衛君もその技を試みて、縮緬、天鷲絨等を拜領せられた。同じき十年四月、吹上の御庭に於て、將軍家齊公の丸物上覽の節にも、忠兵衛君また之を奉仕して、同じく天鷲絨、龍紋等を拜領せられたことがある。かくの如き手腕があつたに依つて、遂に將軍



の上聞に達し、その十三年三月に、尙部屋住の身分ながら、藝術出精といふ麻で召出されて、大番の士を命ぜられた。幕府に於ては、恰も水野越前守忠邦朝臣が局に當つて、銳意治を圖り、人才を抜擢して、所謂天保の改革をせられた時であつたからではあるが、忠兵衛君のこの出身の如きは、蓋し破格と云ふべきである。その後、忠兵衛君は歩兵指圖役に進まれたが、最も職務に忠實であつて、二十餘年の間、一日の缺勤も無かつたと云ふほどである。されば精勤家の名は將軍家(家定公)の御耳にも立つて、嘗て如何なる折なりしか、忠兵衛君の姿が見えなるときに、將軍家は、外山は如何いたしたかと御尋ねがあつたと云ふことである。これもまた忠兵衛君の爲に、一大なる名譽である。この恪勤と云ふことは、忠兵衛君に最も特異なる點であつたが、外山先生に於ても、最もよく受け繼がれたる性質であると思ふ。忠兵衛君また頗る親に孝を盡されて、その逸事も少くないやうである。これもまた、外山先生がよく受け繼がれたる性質であつた。先生が、或る場合に於て、やゝ性急なる人であつたかのやうに思はるゝのも、また父君によく似て居らるゝのである。忠兵衛君は、維新以後には、節翁と號し、花木の手入れ、軍談の寄席通ひなどを好まれ、悠々自適して八十六歳の長壽を享け、明治三十年九月六日に歿せられたのである。

忠兵衛君の先配は、養父小作君の養女であつたが、その歿せられて後、小普請士岡田三右衛門克諧君の女麻子を娶つて、妻とせられた。その間に、嘉永元年九月二十七日を以て、一男子を上云へる小石川柳町の邸に擧げられた。是れ即ち外山正一先生である。先生生れて頗る穎悟にして、人を驚かされた。されども、是より先き、父忠兵衛君二子を擧げられたが、皆夭死せられたから、先生の生れらるゝに當つても、外祖父岡田三右衛門君は、特に先生の生育如何を氣遣はれて、當時易占を以て高名であつたところの石龍子と云ふ者を訪ねて、先生の身の上を占はしめられた。その時石龍子の答は、何に基いたものか、この兒は、八分通りは捨てたものと覺悟せよと云ふことであつた。そこで、先生は幼名を捨八と命ぜられた。然るに、幸にしてこの豫言は適中せずして、先生の追々丈夫に成人せられ、立身をせられたのは、外山一家の爲のみならず、實に我邦の文化の爲に大なる幸福であつたのである。先生には、兄弟姉妹が、すべて八人あるけれども、其五人は皆夭死せられ、先生と姉君一人、妹君一人、合せて三人がやうく生育せられたのである。

當時外山家の食祿は、二百二十俵であつた。昔は知行持で二百二十石であつたが、正延君の代に至り、享保八年に、請に依つて、廩米に改められ、二百二十俵となつたので

ある。旗下士で二百俵内外の祿では、尋常にては、とても餘裕ある生計を營むことは出来ない。況んや外山家では、忠兵衛君が養子として入家せられた後、養母は歿せられ、次いで迎へられたる繼母に小供も出来て、家族の多くなつたが、爲め家計の裕かでないかつた上に、養父正周君は借財を遺して死去せられた故に、忠兵衛君の代となつては、頗る不如意な暮し向きであつた。されば召使も、養婦一人、中間一人だけで、歩兵指圖役として神田の講武所に通勤せらるゝにも、もとより一僕をも従へられない。雜囊を提げたる忠兵衛君が、一人で毎日通勤せらるゝことは、沿道の人々の注目するところとなつたそうである。かく裕かならざる家計ではあるけれども、忠兵衛君は多くの旗下士人が、平然として怪まざるところの借財といふことは、極めて之を嫌はれた。勤儉の二字は、最も適切にこの忠兵衛君の性行を表はしたる言葉である。配岡田氏もまた、頗る婦徳に秀でられた人で、謹嚴にして規律正しく、よく家事を經營せられた。婦人としては、寧ろ雄々しき性質で、所謂勝氣の方であつたけれども、しかしながら、克くその性質を抑制して、意を内助に用ひられた。母君の是等の性質もまた、外山先生が受け継がれたように思はれる。加ふるに、岡田氏は、學問をせられたと云ふではないけれども、先生の尙幼少なりし間、父忠兵衛君が、之に大學論語な

どを授けらるゝこと、餘りに嚴なるを視るに忍びず、傍にあつて聴きながら、之を書き取つて先生に教へられたそうである。そも、幕末の旗下士家人と云へば、中にはもとより多くの除外例もあらうけれども、概して之を言ふときは、氣節に乏しくして、驕飾に富み、狡猾なる點もまた少くはない。然るに外山先生は、かゝる中に成長しながらも、所謂一般の幕末人士とは、頗る選を異にしたる人物であつた。是れ、その天賦の性質にも因ることであらうけれども、また、家庭の訓育に由ること少くはないと思ふ。

## 第二章 開成所及び海外留學の時代

先生は、父君に、大學論語の素讀を教へられ給ひし頃よりして、一方には言ふにも及ばず、武藝の練習に精を入られたのである。先生は、幼少の時は所謂「いたづら」兒で、父君の實家なる大石氏を始として、行く先々親戚で、梔白者の名が頗る轟いて居つた。その代りに、武藝の上達は頗る著しくして、水泳の術などは最も進歩が早かつた。萬延元年の某月、將軍家茂公の武藝上覽のあつた時には、先生まだ十三歳の幼少ながら、またその技に與かることが出来た。されば、當時の尋常一様の士人として、即ち武藝を以て世に立つこととなつても、先生の將來は頗る多望であつた。然るに、父忠兵衛君は、武弁の一木強淡たるに止まらずして、宇内の形勢を遠觀するにまでには行かずとも、さすがに學問の心掛も淺からぬ人であつたによつて、幾分か天下の事情も分つて居つたものと見えて、斷乎たる處置を先生の上に行はれた。即ちその翌文久元年を以て、當時十四歳の先生をして、斷然武藝の練習を抛ち、蕃書調所に入學せしめられたのである。是れ實に先生の生涯に於ての大岐路である。是より先き、幕府は時勢の必要に應じて、早く文化八年に翻譯局を設けたが、後に之

を蕃書調所と改め、また洋書調所などと改めて、旗下士及び諸藩士に洋書を授くる所とした。先生の入學せられた頃は、其校舎は九段坂に在つたが、文久二年に至つて護持院ヶ原、則ち一ツ橋外に移り、翌三年には、改めて開成所とせられた。先生は此處にて英學を修め、午後の三時頃となつて退出がけに、更に湯島天神下なる故箕作貞一郎君(後詳)の塾に通はれた。この塾の教授法たるや、彼の「クラス」制度ではなく、塾生順番を以て、英書の講讀を授けらるゝことであるによつて、その順番を待つ間には、先生始め多勢の仲間、さすがに少年のこととて、獨樂を廻し、紙菴を飛ばし、或は鏢劍などもやつて居つたのである。この頃先生はまた、大岡芳之助と云ふ人を自宅に招いて、英學の復習をせられたのである。大岡氏は屢々先生に語つて、君は須く僕を凌駕せらるべし、僕はまた箕作先生を凌駕せんことを期すと云つて、先生を勵ました。さなくとも、英學は、生來先生の好まるゝところであつたと見えるが、その上に大岡氏の激勵もあることとて、その上達は最も目覺しかつた。されば、入學の翌年、文久二年六月二十六日に、句讀教授出役といふを命せられ、同じき三年九月二十六日には、教授手傳並出役を命せられた。是等は、生徒中の雋秀なる者を拔擢するので、今日の大學で言へば、助手と助教授との中間位の地位であつて、先生は、生徒に英書の素

讀を教へられたのである。この任命は、たしかに先生の聰敏なることを證明するものであつて、果して間もなく、この年の内に開成所の教授方に進まれた。この進路は、曠て海外留學の命を受けらるゝところの段階であつた。教授手傳並出役とならるゝや、幾分かの手當を受けられた。それは、それだけの月日に對してであるか、よくは分らないが、銀十四枚と云ふことである。先生の家は前にも述べた通り、家道が裕かでなかつた爲に、速に身を立てゝ、一日も早く、父母をしてその心を安んせしめんと、の心掛は、大に先生を奮發せしめたのである。故に教授方となつて、多少の收入あるに至つては、努めて之を家計に宛てゝ、自ら奉ずることは最も儉薄であつた。是より先き、先生の十歳の頃、母君の産後の惱みの爲に、先生は、しばらく大石家へ預けられ給ひしことがある。其折母君は、壹分の金を先生に與へられた。先生は小供心に大に喜ばれて、何を買ひても、買ひ盡されぬほどの大金を貰うたやうに感じた。後々にも常に話されたことである。この報恩の念と、儉薄の行とは、先生の性行の一側面をなしたものである。

世の中の形勢は、勤王と唱へ、佐幕といひ、攘夷と叫び、開港と主張し、或は公武合體の必要を論ずるなど、それ／＼議論するところあつて、鼎の沸くが如くであるが、海外

の新知識を輸入すると云ふことの必要は、随分多くの方面に於て是認せらるゝこととなつて、開成所の出來たのも畢竟これが爲めだが、幕府では、文久二年に、教授手傳津田眞一郎君(後道)、西周助君(周)等を和蘭に留學せしめ、文久三年には、また數名の生徒に、露西亞留學を命じ、この外にも、或は外國士官招聘のため、或は開港延期の談判等の爲め、海外に人を派遣した。尋いで慶應二年となつて、八月の八日に、幕府は十四名の俊才を選抜して、之を英國に留學せしめた。その十四名と云ふのは、川路太郎(今の寛堂)、中村敬輔(後の正直)、成瀬錠五郎、箕作奎吾、林桃三郎(今の伯爵董)、伊東昌之助(後の岡保義)、億川一郎、福澤英之助、箕作大六(今の男爵菊池大麓)、市川森三郎(後の平岡盛三郎)、杉徳二郎、岩佐源二、安井貞八郎の諸君と、我が外山先生とである。その中、中村、川路の兩君は、生徒取締の任務を帯びて居らるゝのであつた。そも／＼、この英國留學生發遣の舉は、頗る意味の深いことである。當時佛國公使レオン、ロッシュは、頗る幕府に結び、幕府もまたロッシュに信頼して、諸種の計畫をなして居る。されば、英國公使バークスも之を坐視せず、百方幕府に對つて、英學の必要を説き、留學生を英國に發遣せよと、切に勧誘せるに基くのである。即ち少からざる政略上の意義を含んで居るのである。時に、英國軍艦に乘組みたる一の「チャブレン」の暇を得て、その本國に歸る

者があつたが、この人が英國公使に對ひ、留學生を英國に送るならば、余は之と同行して、種々世話をしやうと言ひ出した。そこで、幕府はパークスの勸誘を容れて、右の留學生を出發せしむるに決したのである。この「チャブレン」は、ロイドと云ふ名の人である。

中村敬輔君を除く外は、多くは十歳臺の少年であるが、中にも箕作大六君の如きは漸く十二歳で、最も年少者であつた。外山先生はこの年既に二十歳であつた。御一新以前に、是等の諸君は、萬里の波濤を蹴つて英國へ赴くのであるから、風俗習慣、其外事々物々の上に於て、種々珍奇なる出來事の多かつたのは勿論であらうが、一行が上海に於て撮影したる寫眞を見ても、その様子がよく想像せられる。

初め留學の内命あるや、人々皆喜ばれた中に、ひとり先生は、同時に大に心を痛められた事がある。蓋し、父君は歩兵指圖役として、京都へ上られて不在なり、母君は折しも病に臥して居られた故に、洋行の事を打明ける譯にも行かず。さりとして、空しく此好機を逸し去るも口惜しき限りなれば、先生は大に苦心せられたのである。恰も好し、姉の錦子の君が、雄々しくも家を引き受くべしとのことで、相談纏まり、母君には暫く横濱へ赴くと告げ、出發せられたのである。この際并に先生の留學中に於ける

姉君の功は、最も少からぬのである。先生始め一行の人々は、この年、即ち慶應二年十月二十日に江戸を出立し、横濱より英國の飛脚船「ニポール」號に乘組み、同二十五日の午後三時に出帆せられた。この留學生一行の外には、松井源水、柳川一蝶齋などの藝人も、數人この船に乘組んで居つたことである。それより上海に上陸しては、一同寫眞を撮つたが、その結果甚だ宜しからずして、明日また之を撮り直した。この書に挿入してあるものが、即ちそれである。ついで香港に上陸しては、英華書院に到り、その活版の術を觀て、その技の巧妙なるに驚き、また埠頭の繁華なるに驚いた。この事である。一行はこの香港に於て、船を「エルロラ」號に乘換へた。それより新嘉坡、卑南を経て錫蘭に到り、こゝにてまた船を乘換へ、尋で亞丁を経て蘇士にかゝつた。當時蘇士の掘割未だ成らざりしが故に、一行は此處から流車の便により、「カイロ」を経由して「アレキサンドリヤ」に出で、それより再び船に搭して「マルタ」「ジブラルタル」を経、十二月二十八日といふに、英國「サウサンプトン」に安着し、即夜鐵道によつて倫敦に到着したのである。

倫敦にては「ケンシントン」の近くなる「ランカスター・ゲート」の十六番に、やゝ宏壯なる一家を賃借して、一同これに寓することとなり、先づ第一に「モルトベ」云ふ英

國人を聘して英語の練習に着手した。この時既に語學の素養のあつたのは先生及び箕作兄弟、林桃三郎、伊東昌之助の諸君であつて、先生はその後間もなく、倫敦の「ユニバーシティ・コレージュ・スクール」へ入學せらるゝこととなつた。然るに、こゝに一の難問題が、この一行の中に起つた。云ふのは、外國語を學ぶに當つて、かくの如く本邦人の多數が、相共に住居して居つては、甚だ不利益である。如何にしても分離散宿せざるべからずと云ふ議論であつて、外山先生などはその最も熱心なる主唱者であつた。されども、川路中村の兩君は、留學生の監督者として、早速にこの説を採用することが出来ない。されば、先生及び林君などの面々は事の趣を英國の外務省へ建白せられたが、一行の世話人なる彼の「チャブレン」ロイド氏は、之を以て當初の契約に違背するものとして、固く執つて分離説を承知せず。一方には外山先生の如きは最も激烈に兩監督に迫り、或は之を攻撃せられたので、兩監督は板挟みとなり、甚しく困難を感せられたことである。やがて兩監督は辛うじてロイド氏を説得し、散宿の結果として留學費用の頗る増加するにも拘はらず、一旦分離を斷行して、一行は皆それ〴〵、然るべき英人の家族内に同居することとなつた。これは慶應三年の事であるが、丁度この年には佛國巴里で大博覽會が開かれるので、幕府では徳川民部

大輔昭武君を使節として佛國に遣ひ、併せて各國を歴訪せしむる事となつた。英國に於ては、女帝ビクトリヤ陛下に、在英國留學生の懇切に待遇せらるゝ事を謝する使命をも帯びて居られたが、一同は使節一行の注意もあつて、また合宿する事となつた。然るに、やがて本國に於ては、國勢一變、王政維新となり、一同の學資は送附せられず、進退維れ谷まるといふ場合となつたが、民部大輔君の一行中には、今の男爵澁澤榮一君も居られて、それ等の周旋により、一行は明治元年の四月に、倫敦の客舎を引拂ひ、巴里を經由し、馬耳塞より佛國の郵船に乗込み、同年六月下旬に横濱へ歸着したのである。この歸航の時の如き、若し民部大輔君一行の助力が無かつたならば、一同は荷爲替同様なる境遇にて、送還せらるゝより外無かつたであらうとの話である。

一行の留學は、かくの如く短年月で、且つ憫れな始末であつたけれども、外山先生始め一行の人々が、學問の外に、觀光察俗の利益を得られたことは、非常なものであつた。明治年間の最も効果多き著書の一として數へらるゝかの西國立志編も、中村敬輔君がこの留學より歸られて後の産物なることを思へば、他を類推することが出来やうと思ふ。

## 第三章 静岡時代

先生始め一行は横濱へ上陸して見れば、本國情態の變化は、途すがら想像して居たよりも甚しく、皆大に驚かれたことである。先生等の横濱に上陸せられたのは、六月二十七日であつた。この時徳川家にては、疾く恭順の事に決し、彰義隊の一件も、既に前月に済んで仕舞つた。しかしながら所謂瓦解の際であつて、萬事瓦解の二文字の表はして居る通りの有様であるから、一行の人々の驚かれたのも、尤な次第である。徳川家は、今の公爵家達君が、田安家より入つて後を承けられ、尋で駿河の府中に封せられて、駿河及び遠江等の内に於て七十萬石を賜はり、静岡藩と稱せらるることとなつて、八月の初に、家達君は府中へ行かれたのである。されば外山先生もまた、それより間もなく駿河へ行かれた。この時は、先生單身で行かれたのである。蓋し母君なる岡田氏は、先生の英國留學前より心地勝れず、尙病床に在られて、遠隔の地へ轉せらるゝ譯に行かなかつたからである。されば、御両親はその他の家族一同と共に、小石川柳町より大塚辻町なる或る邸宅に移られて、其處に住つて居られた。翌年九月、母君は終に歿せられたので、その折に、先生は一旦江戸へ歸られた。既に前にも述

べた如く、最も孝養の志に富み、如何にもして、早く両親を悦ばせたと、切に念じて居られたる先生に取つては、かく早く母君と別れられたことは、如何ばかりの悲痛哀悼であつたであらうか、今よりも想ひ遣らるゝことである。送葬等の事も済み、懸て先生は、父君を奉じ一家を纏めて、駿河に移住せられ、府中の草深と云ふ所に住はれたのである。

是より先き、先生は、最初、府中へ行かるゝと間もなく、静岡學問所の教授の任を受けられた。草深の宅と云ふも、言はゞ官舎の如きものであつた。そも、この學問所と云ふのは、静岡藩に於て、新たに沼津の兵學校などと共に設置せられた學校で、身分の高下に拘はらず、志望の者に、國學、漢學、洋學を授くる所であつた。校長には、故林昇君、故向山黃村君、その次に故男爵津田眞道君などが任せられ、また顧問には、故西周君なども居られた。外山先生は、最初に學問所の三等教授に任せられ、一年ばかりの間、累進して一等教授となり、洋學部長を兼ねらるゝこととなつた。巽に共に英國へ留學せられた人々の中で、杉徳二郎君、岩佐源二君なども、この教授に任命せられた。かの中村敬輔君も、同じくこの教授で、漢學部長を兼ねて居られたのである。この學校に於て、先生の洋學の教授を受けた人の中には、知名の士の少からぬこと

であるが、男爵目賀田種太郎君の如きもその一人である。目賀田君の話によれば、先生の學問所に於ての教授の巧なることと、その熱心と、その親切とは、實に一同の感服した所である。殊に、先生は非常な勉強家であつて、夜間と雖も、碌々臥床に就くことはせられない。睡たくなれば、その儘机にもたれて眠り、目が覺むれば直ちに眼を書物に曝すのが常であつたと云ふ評判で、我輩とても、かくの如くしなければならぬと云ふので、非常に勉強したものである。先生が、果して右の噂の通りであつたか、どうであるかはよく知らぬけれども、兎に角、さる評判のあつたことは事實で、現に我輩も、一時はこれを真似たのである。故にその當時讀書は出来たけれども、幾分か健康を損じたかのやうに思ふのである。要するに、先生の勉強と熱心と親切とは、生徒の深く感じたことである。云々、又、目賀田君の話に、洋行歸りといへども、外山先生は、更に邊幅を修むる事をせられない。今日の所謂「ハイカラ」流にあらず。頭は毬栗頭にして、身には黄八丈の着物を纏ひ、これに黒八丈の羽織を着て、さうしてその時分の流行として、刀を一本差して居られた。極めて真率な様子であつたとのことである。

#### 第四章 亞米利加留學時代

先生の静岡に居らるゝこと二年と少し餘にして、明治三年十月二十五日といふに、外務省の辨務少記に任せられて、米國へ赴任せらるゝこととなつた。これは、先生が英國留學中に、屢々故子爵森有禮君に面會し、森君にその人物を識られた結果である。この時、森君は辨務使となつて、華盛頓府に赴任せらるゝこととなつたにより、先生を抜擢して辨務少記となし、共に俱にせられたのである。故に、理學博士矢田部良吉君もまた、この時に森君に従つて行かれたのである。されば、先生と矢田部君と、終始交友の情の濃かであつたは、申すにも及ばぬことである。先生が明治三十二年に文部大臣の冠を掛けられた後、香川縣教育會の總會に招かれ、演説に赴かれた先きで、矢田部君鎌倉にて溺死との電報に接せられたときの驚きと悲みとは、如何ばかりであつたらうかと思はれる。さてその翌年、即ち四年の八月には、先生は外務權大録に進まれた。若しこの儘に、この途に進んで行かれたならば、先生は外交官として榮進をせられたことであらう。番に外交官としてののみならず、一般の政治家としてもまた、顯著なる發展をせられたことであらう。然るに先生は、學問の根底未だ固からず、素



養尙淺きに、濫に官吏となつて、甘んじて居る譯には行かぬといふ考で、森君にもその意を打明け、森君も之を諒として、翌明治五年の二月に、願に依つてその本官を免せられて、學生の身分に復歸せられたのである。政治家として進まれたならば、先生が如何なる経路を取られたであらうか、もとより推測も出来兼ねるが、この第二の岐路に臨み、先生が逡巡せず躊躇せず、學者側の方角へ進まれて、おひくゞ世に盡されたことは、我輩の喜ぶところである。

一留學生となられた先生は、種々考案の末に、ミシガン州なる「アンナパー」高等學校へ入學せられた。是より先き、辨務少記として米國に來らるゝや、二人の留學生を同伴はれて居つて、自分の俸給の幾分を割いて之を扶助せられて居つたものらしい。されば、今度自分もまた、一留學生となられたに就いては、華盛頓や紐育よりは、生活費の低廉なる所を選ばなければならぬので、遂に「アンナパー」と決せられた譯である。先生はこの高等學校に於て、約一年半の間は、専ら普通學を修められ、尋いで六年の九月となつて、進んで「ミシガン」大學に入り、三年間こゝに學籍を置かれたのである。「ミシガン」大學には、日本人の入學した者も少くないが、その最初の人は即ち外山先生である。先生は最初こゝへ、選科生として入學せられたのであつて、通常の學生

の如くに、學位を得んが爲めの、成規の學科課程は履まれなかつた。唯己が好む所の科目を選択し、その講義を聴かれたのみである。しかしながら、在學未だ久しからずして、その明敏なることゝ、その勤勉なることゝは、直ちに衆人の注意を惹くやうになつて、親友も出來、教師も之を愛し、それらの人々の中には、何故外山は、成規の學科を履修せざるかと且つ怪み、且つ惜んだものがあるやうである。されば、後にこの大學より「マスター」オブ「アーツ」の名譽學位を、先生に贈つたのである。また「ミシガン」在學中には、屢々大學總長なる「ジームス」ビー「アンゲル」氏の家に、客となられたこともあつたが、「アンゲル」氏も、先生の人となりを賞讃し、その後、先生がおひくゞに立身して、大學總長となり、文部大臣に任せらるゝを見て、非常に喜ばれたことである。在學中には、また時々「紐育」インデペンデント」を始めとして、この國の新聞紙に寄稿せらるゝことがあつた。毅然として不羈獨立の思想を有し、決して之を妨げられなかつたと云ふことは、留學中にも、既によく分つたことであつて、この性質は、後々に至るまで、終始先生の思想言論を一貫して居るやうである。さて「ミシガン」大學に於て、如何なる科目を選択せられたかは、今詳かには知られぬけれども、理科、哲學の兩方面に亘つて、廣く諸學科を修められ、中にも理科の方を好まれ、遂に化學科で卒業せら

れたのである。されば、その研究も、勿論殆んど全く實驗的であつて、殊に「スペンサー」  
チンダール、ハックスレー」などの著書を耽讀し、就中「スペンサー」の學説は、最も之を尊尙  
して之を紹述せられたやうに見える。

この學風が、先生の歸朝後、如何に、我邦の學界に影響を及ぼしたかと云ふことは、後  
に至つて明かになるであらう。

## 第五章 大學教授時代………その一

先生は、「ミシガン」大學に學ぶこと三年にして、明治九年五月の初め、無事に歸朝せられ、取敢へず牛込横寺町なる乙骨太郎乙氏の宅に寓居せられた間もなく、その月の十六日に、東京開成學校五等教授の任を囑託せられて、月俸百三十圓を給せられ、ついでその年十月の二日に、四等教授に進み、月俸百五十圓を受けられた。時に先生は年正に二十九歳。これより、先生は、我が帝國大學と、最も親密なる、最も縁故の深い一人となられたのである。この深い縁故を結ばるゝに至つた事情は、頗る興味のある話と思はれる。即ち次の通りである。

その頃は、今の東京帝國大學も、まだ東京開成學校と云はれて居つたので、故島山義成君が、文部省の少督學から校長を兼務して居られたのである。然るに、先生歸朝の頃には、恰も「フィラデルフィヤ」の博覽會の開かれた際であつて、島山君は、文部大輔田中不二麿君に隨行として、その博覽會に出張せられ、留守には、今の總長男爵濱尾新君が、校長補を以て、校長代理を勤めて居られたのである。當時この學校の教師には、教授と云ふ教授は、大抵外國人であつて、日本人の教授としては、この學校に附屬せ

る製作教場と云ふ速成科に、たゞ一人曩に先生等と共に英國に留學したところの、市川森三郎君が奉職して居られただけである。されども、海外に留學せる我が俊才は少からぬによつて、是等の俊才の歸朝したる曉には、追々教授に任命せざるべからずと云ふ議論は、既に起つて居つた。さうして、亞米利加では外山先生、英吉利では菊池大麓君などは、夙くその名が聞えて居つたので、今や、その外山君が歸朝せられたと云ふことであるから、濱尾校長代理は、直ちに先生をその寓居に訪ねて、開成學校出仕の事を勧誘せられた。先生はもとより、政治家として身を立つるよりは、寧ろ教育の事を以て國に盡さうとの考があつたらしいけれども、何分にも、久しく海外に在つて、我邦の様子を承知せられない故に、濱尾君より詳細に學校の事情を説明せられ、また現に多數の外國人が、總べての學科を擔任して居る中に、日本人としては我れ一人、頭を突込むといふことであるによつて、先生も考へられたであらうけれども、遂に濱尾君の勧誘に應じて、教授となられたのである。その最初の受持は、かの製作教場の生徒に、有機化學を授けられたのである。尋いで開成學校本部の豫科學科のために、無機化學を講せられ、それより漸次に英語、英文、論理學、心理學等の諸學科をも、擔當せらるゝやうになつた。先生が、有機化學や無機化學を講せられたこ

とは、當時外國人との關係や、學科分擔上の事情の、已むを得ざるに出でたと云ふ譯ではない。米國留學中にこれを學んで居られたから、喜んで之を教授せられたのである。

さて、初て教授となられてより間もなく、先生は、一時半込の若宮町に寓居せられたが、翌明治十年の六月、神田北神保町に住宅を購うて、之に移られ、翌月四日この宅で、舊幕臣河村歸元君の女房子の君と、めでたく結婚の式を挙げられた。それより十二年七月に、半込築土前町へ移轉せらるゝに至る迄は、ここに住はれたのである。

東京開成學校は年々歳々に發達して、十年の四月、文部省は、本校と東京醫學學校則ち一時大學東校と云はれたものを合併して、始めて東京大學と稱することゝし、舊開成學校の跡には、その法理文三學部を置かれた。かの製作教場と云ふものは、先生就職後一年とも過ぎぬうちに廢せられ、従うて、先生の化學の講義は、本部豫科の分と共に罷められ、是より後先生は、英語、英文、論理學、心理學、西洋歴史などを受持られたのである。

明治十二三年頃の東京大學の情況を見るに、法學部には、日本人にして教授たるものは一人もない。是より先き、外山先生就職の頃よりして、井上良一君が法學部の教

授であつたが、この時には既にあらず。文學部には、ホートン氏が首席にあつて、英文を擔任し、フェノロサ氏は政治理財を、クーバル氏は哲學、史學等を受持つて居らる。その間に、先生は唯一人の日本人教授として介立し、心理學及び英語を教へて居らる。故中村正直、故横山由清、故黒川真頼、故島田重禮、三島毅、信夫榮等の諸君は、講師として和漢文學を講じて居らる。理學部には、さすがに日本人の教授が多く、外國人十人に對して、菊地、矢田部、山川、今井巖の四教授が居らる。されば、是等所謂洋行歸りの日本人教授の名聲高く、一言一行人々の注目する所となり、評判する所となつたは申すに及ばぬことである。

是より後七八年の間に、先生が大學文學部に於て、その英語、英文若くは哲學に關する學科を如何に講せられて居つたかを、簡單に述べて見やう。是れ、當に先生の小休中の一節を値するのみならず、同時にまた、我邦の學問の進歩に於ける、一の重要な時期の状態を示すものである。先生は法理文三學部の第一年生には、毎週二時間づつ、英語英文を授けらるることであるが、その教科書としては、マコーレーの「ミルトン」同じく「ハラムス、コンスタチチーショナル、ヒストリト、デクインシー」の「チャールス、ラム」スベンサーの「フィロソフィー、オブ、スタイル」同じく「レプレゼンタチーブ、ガバ

ーメント」チンダルの「ベルファスト、アドレス」同じく「ゼ、コンスタチチーション、オブ、ネーチャー」などを主として用ひられ、學生をして、一頁若くは二頁づつ輪講せしめ、質問せしめ、また先生より質問を發せらるることもあり、成るべく學生をして、自ら考へて、文意を了解するに至らしめんことを目的とせられた。教場内にての言語は、専ら英語を用ひて、學生にも已むを得ざる場合の外は日本語を許されなかつたのである。明治十三年四年の交に、先生が總理に報告せられて居ることがある。その中に曰く「予は、明治九年以來英語を教へて居る。然るに近年の學生の英語の力は、數年前の學生の力に及ばざること遠し。數年前に在つては、第一年生中にもよく文意を解釋する者半ばに居りしに、近年に至つては、その數大に減じた。その中優等なる者は最初所謂變則を以て入門せる者か、但しは、多年の間正則にて修學せる者である。たとひ正則であつても、僅々兩三年位學んだ者は、短文を綴り、或は話し、或は解すること能くすれども、少しく複雑なるものは解し難し。是れ全く、生出來の正則學生多きの致す所である。その國に行かすしてその國の語を學ぶには、最初は變則にて進み、十分解釋力を養成し、さて上達するに従うて、正則に轉ずるを得策とする。英人の佛語を學び、佛人の英語を學ぶも、最初はこの法に依る。我邦もまた之に鑑みるべし」と

云はれて居るようなこともある。この説に就いては、之に賛成せざる人も多くあらう。しかし、學生の外國語學難は、今日に至るも、矢張り、三十年前の先生のこの歎息と同一であつて、一の進境を見ず、否却つて退歩したとの評判もある。この難問は何時解決せらるゝやら、待遠しいことである。

その頃文學部なる哲學科及び理學部の二年生にも、毎週三時間英語を授けられて居るが、その目的及び教授法は、第一年生と同じであつて、用書としてはシキスビヤ一の「シーザー」「ハムレット」の類、エマーソンの文集中なる「カルチア」「ビヘビヤ」「シビリゼーション」「アート」「エロクエンス」「ブックス」等の諸篇、マコーレーの「フレデリック、ゼ、グレート」等を用ゐられた。ホートン氏等が、ミルトン、シキスビヤ等の、寧ろ高雅なるものを主として紹介せられたるに對し、我邦に於て是等マコーレー、エマーソン、デクインシー若くはカーライル等を紹介せられたのは、實に先生の力によることが多いのである。また三學部の第一年生には、論理學、心理學、第二年生には心理學、哲學科の第四年生には高等心理學、また文學部の第二年生には、西洋歴史をも講授せられて居る。論理、心理等に關する教科書としては、バイン、カーペンター、スペンサー三氏の諸種の著書が、最も主なるものであつて、また廣く、ベンザム、ミル、ダーウキン、

ラボック等諸氏の諸種の書が、参考に供せられたことである。ルイス氏の哲學史なども用ゐられた事がある。文學部の第二年生に心理學を授けらるゝに當つては、教科書、口授及び研究の三法を併用せられて居る。即ち教場に於ては講義をなし、或は參考書を與へて之を讀まじめ、また時々問題を提供して、その參考書を指示し、以て論文を綴らしめ、學生をして、衆學生の前にて朗讀せしむることである。是等は先生獨得の教授法で、頗る有益なる方法の一と考へる。また文學部の第二年生に、西洋歴史を授けられたのは、實に後年先生が、社會學の講座を擔任せらるゝに至るの階梯である。蓋し歴史を學ぶ者は、社會學の原理を知らなければならぬこの見地に基いて、先生は、先づスペンサー氏の社會學原理によつて、簡單に社會學を講じ、次に英國の憲法史を講せられたのである。前述の如く、最初は化學を受持たれ、尋で英語、英文、歴史なども授けられたけれども、先生本來の目的のある所と、一般に學問界の次第に進歩した結果とは、遂に先生をして、教授として、單に社會學の講座を擔任せしむるまでに至つたのである。

明治十八九年より二十四五年頃までは、先生は、いよゝ／＼スペンサー氏の書物を多く用ゐられた。即ち、フォルスト、プリンシプルをはじめとして、倫理學、生物學、社會學等

に於ても、皆スベンサー氏の著書を教科書とせられた。しかし先生の講義は、是等の書物より、その要領を抜萃して、英語で口授せらるゝことが多いのであつて、その「トブック」の可なりは古色を帯びたる様子は、随分學生の目に止まつたものである。但しまた、廣く他の新刊の書物、又は雑誌などを教場に持つて來て、その概要を口授せられたことも、少くないのである。かくの如く、先生の學派は、實驗的英國風のものであるが故に、雇外國教師の或る者とは、その説の合はなかつたこともあるのである。是より先き、モールズ氏が米國より來て居つた。この人は生物學者であつて、外山先生とは話が合ふ。然るに、このモールズ氏の紹介に依つて、フエノロサ氏が、また米國から來るに及んでは、初めは主として、政治、理財等の諸學科を擔任して居つたけれども、おひ／＼と哲學に關する學科をも講述したところが、この人は、デカルト、カント、ヘーゲル等の哲學を祖述して、主として、理論的獨逸派を鼓吹したのである。かく理論的學派と、實驗的學派とが、兩々相並んで、大學に於て講述せられたことは、頗る注意すべき現象であつた。しかしこのフエノロサ氏が、外山先生と争ふたことは、餘り聞かないけれども、他の外國教師殊に多少とも宗教臭味を帯びたる人の中には、先生の所説を嫌つた者もあると云ふことである。

先生が大學教授として、講壇に於ての仕事の大略は右の如きものである。是より先生の官歴と、大學の發展とのことに就いて、一言せねばならぬ。前にも述べた通り、初め明治十年の四月に、東京開成學校は東京醫學校と合併して、こゝに始めて東京大學が成立することとなつた。その前年に、醫學校は既に本郷元富士町に移轉したが、法理文三學部は、なほ舊の通り、神田一ツ橋外なる護持院ヶ原に在つたのである。先生は、この年四月十四日に、文學部の四等教授となり、尋いでその八月二十七日に、東京大學教授となられた。その後十四年の六月十五日に至つて、東京大學は大に職制を改め、東京大學總理を置いて、法理醫文の四學部及び大學豫備門を統轄せしむることとなり、これまで三學部の總理であつた加藤弘之君が、新たに東京大學總理に任せられ、これと同時に、外山先生は東京大學教授兼文學部長に任命せられて、年俸二千四百圓を給すと云ふ辭令を受けられた。この時、菊池大麓君は理學部長、三宅秀君は醫學部長となられ、法學部長は、服部一三君が、豫備門長と兩方を兼ねて居られたが、翌十五年に至り、穂積陳重君が、文部省御用掛より、大學教授兼法學部長となられたのである。是等の各部長が、加藤渡邊濱尾等、歴代の總理若くは總長を輔けて、東京大學の發展に、著しい功績を遺されて居るのである。十七年の八月九日に至つて

法文兩學部も、一ッ橋外より、本郷元富士町の新築の建物に移つた。森川町正門の正面なる「ゴシック」風の建物が即ちそれである。本郷の赤門が昔の御守殿門である外に、一種の意義深き名目として、世人が注意するやうになつたのは、この頃からの事で、外山先生の赤門天狗と云ふ綽名も、漸く人が耳にするやうになつたのである。その後、大學は、元司法省の所轄であつた東京法學校、工部省の所轄であつた工部大學校等を合せて、益々發展することとなり、十九年三月一日に至つて、かの帝國大學令がいよいよ發布せられた。先生はこの日を以て、文科大學教授に任じ、文科大學長に補するの辭令を受けられた。この前、是年の一月、加藤總理その職を辭せられたがために、先生は一月十一日附を以て、總理事務取扱を仰付けられ、帝國大學令發布の後も、少じの間は、總長事務取扱となつて、以て、三月九日故渡邊洪基君が總長に任せらるゝまでの連絡をつけられた。二十六年に、講座の制度が成立するに及んで、先生の専門はいよいよ「社會學」と定つて、その講座を擔當せらるゝこととなり、例の如く壇上に立ち、滔々たる辯説を以て、學生をしてその講義に傾聽せしめられた。そこで前々からの講義に引續いて、社會學は勿論、哲學思想、特に進化説の普及及び後進の誘掖等に就いて、顯著なる功のあつたことは、申すにも及ばぬことである。しかし、講

座の擔任者としては、或は、他に之に代はるべき人の、絶えて無いでもなかつたであらう。先生の「スペイン」を祖述せらるゝや、學生中には之に満足せず、先生が、普く諸家の説を咀嚼して、一新機軸を出されんことを希望する者もあり、或は先生を以て、スペイン「サー」輪讀の番人視するが如き者もあつて、直接に先生に向つて、講義の註文をする者の如きさへあつた。けれども先生は一向に是等を顧みず、平然として信する所によつて、或は讀ませ、或は講じ、諄々として倦まれなかつたのであるが、當時先生の講義に不平を懷いた學生も、後年に至り、却つて先生の講義の方法は、實際に適切であつたものらしいと感悟し、敬服するのである。しかし、學長としての先生の功勞の方が實に教授としてよりも、尙遙に高いものであつたのであらう。

明治三十年に至り、帝國大學は東京帝國大學と改稱せられ、またその官制に於ても時々多少の變革はあるが、先生は後に總長とならるゝまで、嘗て一日も文科大學を離れられたことは無い。先生は嘗て、勤勉健康、及び公平の三者は、余他人に耻ぢせず云はれた。如何にも先生は體軀は偉大、且つ最も強健で、私事を以て公事を害せずと云ふ心がけの篤い方であるから、先生一流の廣濶なる「ズボン」を穿ち、黒き古袍を抱へて、教室若くは文科大學長室に出入せらるゝを見なかつた日は、休日の外は、一年

中殆んど無いのである。二十九年の夏頃であつたが、一時流行性感冒に罹られた時のみは、数日の間缺勤せられたけれども、その他には、先生の影を、大學の何處かで見なかつたことは無いので、人皆その健康と勤勉とに感服して居つたのである。更めて言ふには及ばざることながら、その頃は我が文科大學も、まだ成形時代であつた。初め東京大學文學部には、哲學、和漢文、政治經濟の三科が鼎立して居つたのであるが、政治、經濟は、やがて之を法學部に譲り、その後哲學、國文、漢文、國史、史學、博言、英文、佛文、獨文等の九學科を設置することとなつたのである。その他に、或は古典講習科が設けられ、或は内閣修史館の事業を引受けて、今の史料編纂掛を置かるゝと云ふ類の出來事は、少くないのである。而して、その事業は段々舉がり、卒業生を出すことも年々に増加して、所謂多士濟々と云ふ様子である。外山先生は常に學士が多く大學を出で、社會の各方面に立つて活動するを見て、衷心から喜ばれ、之を誇りとして居られた。學士の大學を離れた後まで、種々の注意を興へ、同情を表せられた深切は、今の委員として盡力せられたのも、その一端である。

學科の發展、學生の増加は右の如くであるが、教師の方面の情況は如何と云ふに、文

科大學のその當時ほど、統率に困難であつたものは、他に比類が少いであらうと思ふ。時代によつて人數の相違はあるが、一面を見れば、漢學には既に故人となられたところの中村正直、川田剛、阿松辰、島田重禮、内藤耻、根本通明等の諸君、今も壯健で居らるゝところの重野安釋、三島毅、竹添進一郎、南摩綱紀、信夫榮等の方々が居らる。國學の方を顧みれば、故人となられた横山由清、小中村清矩、栗田寛、黒川真頼、飯田武郷、久米幹文、大澤清臣等の諸君、また今の木村正辭、本居豐穎、物集高見等の方々も居られ、佛敎の側には、原坦山、吉谷覺壽と云ふやうな方が、教鞭を執つて居られた。孰れも、耆老宿儒、高僧大人と云はるゝ方々で、實に一代の人物である。是等の老先生の外に、他の一面を見れば、大學出身の若手の教授、助教、講師などが、勿論追々と増加するのである。是等の各方面各種類の人々の調和統一を圖つて、文科大學を發展せしむることは、随分の難事である。况んや、文科大學に於ては、語學及び文學上の必要からして、雇外國教師の數が多く、その中には、英米人あり、獨佛人あり、伊太利人あり、支那人もあれば、朝鮮人もあるといふ様で、文科大學教師の總會の時などは、恰も、一種品のよき人種博覽會の如き觀があつて、神儒佛道の代表者とも見るべき人々を、始めとして、銘々、思想感情を異にして居るが上に、中には其専門とするところの學



問により、或はその個人としての性格によりて、猜介不屈の人もあり、また時としては甚しく豪放卓犖の人もある、學長として之を統率し、各自に相應な満足を與へ、その長所を發揮せしめた外山先生の手腕は、實に敬服すべく、之によりて文科大學を發達せしめたる先生の功勞は、まことに大なるものである。先生の功績の中で最も顯著なるものは、即ちこれであらう。實に先生の如く、思慮が極めて公平周密であり、そして虚心坦懐にして、善く人を容れ、加ふるに深切にして、溫顔を以て人に接すると云ふ特長があり、なほその上に、學問と事務と、孰れに行くことも可ならざる無しと云ふべき人にして、始めて、右の如き成功を望み得らるゝのである。文科大學の創始時代に、先生の居られしは、實に好運といふべきである。但し、加藤弘之君の總理の時代、和漢學老大家の後繼者を養成するの必要を認められ、明治十五年に、文學部附屬として、かの古典講習科を置かれた時には、外山先生は頗る之と意見を異にせられたこともあるやに聞いて居る。古典講習科の出身者の中には、間先生に慊らざるやうに見ゆる人のあるのは、さてはかゝる事情のあるに由るのもあらう。當時先生が、古典研究反對の意見を陳べられたのは、先生の思想が、未だ一轉化を來たさざる

時代の一現象である。尙、後の第八章を參看せられたい。

## 第六章 大學教授時代……その二

明治九年の五月東京開成學校の教授となりてより三十年十一月十二日に、帝國大學總長とならるゝまで、二十餘年の間、先生は、實に前に述べた如く、文科大學の爲めに盡されたのである。この外に、大學若くは文部省に於ては、大學評議員、大學圖書館規則取調委員、學藝志林編輯委員、師範學校中學校高等女學校教員學力檢定委員、若くはその委員長、英文讀本編纂委員、第一高等學校商議員、音樂學校商議員、圖書館新築設計委員長、尋常中學教科細目調査委員長等の任に當つて、各その成績を挙げられた。加之、先生は體質の強健と精力の旺盛多方面に亘つての學識趣味及び涌くが如き批評的才智を兼ね備へて、大學の講義又は大學や文部省の命令による仕事以外に、演說著書等に於て、注意すべき社會的の一人物となられたのである。

先づ政治的方面に就いて一言しやうと思ふ。先生は、さすがに、一時は政治界に居られた人でもあり、またその専門として、社會學を擇ばれた人でもあるが故に、政治上、社會上の出來事には、常に注意を怠らなかつたのである。さて世上にても、先生が開成學校に教授となられし頃より、政治上の議論が盛んに起り、就中、今の伯爵板垣

退助君の牛耳を執つて居られた、土佐派の自由民權論は、最も一世を風靡したことであつて、明治十三年に至つては、諸方より國會開設の請願をすると云ふ一條で、特に騒じかつたのである。されば、外山先生は、早く明治十一年であつたか、大學講義室……記憶すべき一ツ橋外の大學講義室……の開室演說に於て、民選議院尙早論を駁する主意の演說を試みられ、又屢々、江木高遠、菊池大麓の諸君と、政治的公開演說に出席して、痛快なる演說をせられた。此頃はまた、菊池モールス、フエノロサの諸君と、井生村樓、中村樓、厚生館等に於て、熱烈なる學術演說をせられた事もある。さて十三年に至り、民權辨惑の一小冊子を著はされたのである。蓋し、民間に於ては、頻りに民權を主張して、その中には、躁暴危激なる言論を逞うする者も少くない。されば政府に於てもまた、之に應じて新聞條例を發布し、集會條例を制定して、これが鎮壓に務め、兩々敵味方の態度にて、相睥睨する有様であるからして、先生は、かの冷靜なる論理的の頭腦を以て、之を批評し、政府にして、無暗に民權を壓服せんと務むるならば、民權は却つて發達するのである。また民間の人も政府の壓制を減せんとして、無暗に之に反抗すること今日の如くならば、却つて益々壓制の度を増加するのみであつて、双方共に反對の結果を見るであらう。官民共に愚劣な遣り方をするのだ

と云ふ精神を公にせられた。この著書は、最も早く、先生の政論の批評的態度であることを表はした一つである。

かく、自由民権論の頗る高潮となり來れるところへ、明治十四年となつて、かの開拓使官有物品拂下と云ふ名高い事件が起つた。薩長出身の人々が相聯合して、國民の福を顧みず、私利を營むものであると云ふので、この時の輿論の喧囂は、まことに鼎の沸くが如く、實に目覺ましい勢であつた。されば、政府も遂に十月の十二日を以て、右官有物拂下の命令を取消し、引續いて、明治二十三年を期して、國會を開設すと云ふ有難い勅諭が下つた事である。外山先生はこの消息を評して、輿論の功を奏したることは、實に我邦開關以來の事件で、畏くもこの勅諭は、妙案の上々なるものである。演説家、新聞記者、民権論者、國會願望者などは皆大に鼻をあかされたる姿である。開拓使官有物拂下などと云ふ政府の大失策も、この大勅諭を以て、十分償ふことを得たと言つて居らるゝ。この際、今の伯爵大隈重信君は、内閣に在つて右拂下一件に反對し、また國會開設論に賛成して、同僚と相容れず、遂に爲めに野に下られたのであるが、當時大隈伯の世上の評判は、非常なものであつた。然るに、外山先生はまた之を評して、政府部内に在りながら、報知新聞を使喚し、又その屬僚を煽動し、その勢を

借りて他を壓倒せんとし、且つ世人をして、政府部内に民権を唱へ、國會開設を主張する者は、己れ一人であるが如く思惟せしめんと企てたる痕が見え透く如くである。就中、内閣に居つてその機密を漏泄するとは、實に不都合である。その辭職も、蓋し已むを得ぬことであると評して居らるゝ。世間でもまた大隈伯の言動に就ては、兎角の非難があつたのである。先生のこの評の當否は、しばらく別問題として、たとふには、先生が如何に熱心に、意を政治に注ぎ、之をその日記の中にも、批評して居らるゝかといふことを、示すに止めて置かうと思ふ。さてその翌年のことであつたが、先生は當路の某顯官より招かれて、立憲帝政黨の設立せらるゝに就いては、之に盡力せよと云ふ意味の内諭を受けられたことがある。蓋し民間には、既に自由黨と云ふものがあり、改進黨がまた組織せられて、大隈伯が之に總理となられたからして、かの福地源一郎、丸山作樂、水野寅次郎等の諸氏が、立憲帝政黨なるものを組織して、以て政府黨となり、之に對抗せんとしたからの事である。この時に、右の内諭を受けられた外山先生の評して言はるゝには、伊藤博文君等にして、驟然政府を去り、自から政黨を民間に樹てるならば、稍々望を屬すべきでもあらうが、他の人々では、逆も六つかしいと言つて居られる。大隈、板垣の兩伯には、早くより、冷刻なる批評的態度

を以て之に對せられて居るにも拘はらず、伊藤公に對しては、批評的ながらも、夙に景慕の意を表せられて居る。後日遂に伊藤内閣に入らるゝやうになつたのも、蓋し偶然といへば偶然、また偶然にあらずと云へば、偶然にあらずと云ふことも出来やうと思はれる。

三黨既に鼎立し、政論益々盛んになつて、一時かの主權論などが、大に世を騒がしたことであつた。即ち立憲帝政黨は、我が國體上よりして、主權は君主の御手に在りしと論じ、自由黨にては主權は國民にありしと主張し、改進黨は、主權は君民の間、即ち國會にありしと議するやうなことで、其間には、今日から見れば、随分切り切つた事をも、各々躍起となつて、筆に口に、盛んに議論を闘はせて、世間は賑かであつた。加藤弘之君が、人權新説を公にせられたのも、またこの頃の事である。是より先き加藤君は、新政大意、國體新論等を著されて居つたが、之を絶版して更にこの人權新説を公にせられたのである。やがて外山先生は、その批評を東洋學藝雜誌に掲げられた。その標題は、人權新説の著者に質し、併せて新聞記者の無學を賀す」と云ふ奇なるもので、天賦人權説の誤りなることは早く、バルク、ベンザム、ウルジー、レウイス、エモス等の人が、論破し盡して居る。しかるに加藤君は、之を前人未發の議論かの如くに自惚れて

居らるゝと冷笑し、又之に感服せる新聞記者も、記者であると罵倒せられたのである。されば加藤君は之を反駁してベンザム等の論破せるはルーソー派、若くは佛國革命派等の急激なる天賦人權説を駁したのであつて、予は、近世の温和なる天賦人權説をも排斥するのである。故に新説と云ふに妨げなしと言はれしかば、外山先生は更に之を駁して、「負惜みの強き人權新説著者に質し、併せてスペンセル氏の爲に冤を雪ぐ」と題して、加藤君を牽強附會と云ひ、温和なる天賦人權説を駁せる者も、既に古人に多しと言つて居らるゝ。この時、故沼間守一君の統率せる京濱毎日新聞に於ても、また外山先生に向つて反駁を加へた。それは、予輩は加藤君の説の當否をこそ論じたれ、その説の斬新なると陳腐なるとは、論じたること無しと辨じた。外山先生は毎日記者が其辨のうちに、「ベンザム氏は普通選舉論者にあらずと云へるを反駁して、一文を綴り、之を東京日々新聞に寄せ、日々新聞記者は之に賛成を表した。されば毎日新聞は更に筆陣を張り、ベンザムは普通選舉論者にあらず」と題して盛んに争うた。公平に觀れば、雙方とも、稍々強辯の嫌が無いでもないが、とにかく賑はしいことであつた。加藤君とは毎々議論があつた。加藤君が曾て、廢娼妓と廢藝妓とは孰れか急務なる」と云へる題に就いて述べられたのに對して、外山先生は、寧ろ廢娼

を急務とすに辨じ、また廢娼存娼兩論者を排して、賣姪は有害のことなれども、已むを得ざるものなれば、務めて之を隠蔽し秘密に附すべしと論せられたが、これは二十三年のことである。また加藤君が「東洋の一大問題」と題して、支那も日本も同じく西洋の文明に接觸しながら、支那は兎角滯滞勝ちなるに反し、日本は迅速に舊慣を棄て、西洋風に化す。即ち前者は遅々たるに過ぎ、後者は早急に過ぐ。故にその中府を取り、大なる禍害を免れたしと論せられたことがある。外山先生は之を駁して、支那人は因循固陋なる遺傳性を繼承して居る。然るに日本人は、改善進歩に適したる應化的遺傳性に富む。故に日本人は、決して加藤君の如くに躊躇せず、進歩主義を執るべしと言はれた。この類の議論は毎々雑誌若くは新聞紙の上にあらはれて、思想界を賑したとである。或る時には、當路の顯官が書を先生に寄せて、討論の中止を勸告せられたことなどもあつた。しかし議論の異同のために、毫も交情を害せらるゝ事のないのは、衆人の均しく敬服する處である。明治十二三年の頃先生の出された英文解釋の題に、是等の問題は、もと大問題なるが故に、異論のあるは當然なり。されども、説の合はざるがために、感情を悪しくするが如き、君と僕との間柄に非すと云ふ意のものを與へて居らるゝが、先生の態度は實にこの文句の通りであつた。

## 第七章 大學教授時代……その三

同じく政治の方面ではあるが、貴族院に入られてより後の事は、少しく後廻しとして、こゝには、先生の文藝に關して一言するのを便宜と思ふ。それは、人權新説に就いての議論の折、加藤君は外山先生に對して、「牛込の天狗の鼻はひじげたり、外山のこまりいかにあるらんと戯れられしかば、外山先生は屈せずして、牛込の天狗の鼻は堅うして、加藤の齒には合はぬしろもの」と射返された。また同じ折毎日新聞記者が先生に對して、「中存一心運用妙、多讀迂於不讀迂」と冷評したからして、先生は「迂ならずと自慢顔する記者ごのは、鶴の眞似をする鴉なりけり」と、一段と手厳しい冷語を浴せかけられて居る。丁度この頃は、故田口卯吉君などと、狂歌の贈答が最も頻繁であつて、或る月などは、殆んど連日、狂歌をはがきを書いて、應酬論難せられたこともある。その多い中には、頗る面白く、狂歌の上乗と思はるゝものも少くはないが、大抵一氣呵成に出來たので、洗練を経たものでなく、辛苦經營の痕は少しも見えないのである。先生と田口君との贈答の狂歌は實に數百首に上つて居つて、互にこれに根氣競べをして、先生は遂に之に勝られたかの如くに思はれる。この頃には、故矢田部

良吉君、今の兵庫縣知事服部一三君なども、またこの狂歌仲間に加はられて、狂歌を詠んで居られ、今日の堂々たる學者紳士の中にも、間々この狂歌の題目に、捕へられて居らるゝ方がある。先生は、實に筆舌の上にも、機智頓才に富んで居られる。一時平賀源内を好まれたことのあるも、その譯であらう。外山流の洒落とて、往々論理的の嘲諷を以て、躍起となれる對手を、巧に翻弄し去らるゝことのあるも、これに基くのである。

序を以て新體詩に關する先生の事蹟を、こゝに述べるのが、適當と思ふ。先生も、科學を修められた人であるけれども、早くより文學技藝の趣味にも乏しからぬので、一寸旅行をしても、旅宿に馬の嘶くを聞いては、直ちに「ビューグル」の響を聯想し、山川草木を見ても、周密なる科學的の觀察と相並んで、詩想が涌いて來るのである。英文學を教場に講じ、英詩などは最も深く愛好せられたとであるから、之を翻譯して、我が邦にもまた、この類の歌を興じて見やうと云ふ考が、夙にあつたらしい。思想と感情とに於て、多く先生と相似て居つたところの、先生の親友故矢田部良吉君も、また同じような考であつた。さればこそ、殆んど同時に、先生も矢田部君も、かのシェクスピアの「ハムレット」の「ツ、ビー、オアー、ノット、ツ、ビー」の一段を翻譯せられた。これは

明治十四年の事である。これよりキングスレーの悲歌、輕騎隊進發の歌、抜刀隊の歌など、翻譯若くは創作が續々とあらはれた。折柄、大學には編輯所と云ふものがあつて、其處には、故小中村清矩、故久米幹文、井上哲次郎、宮崎道三郎、田中稻城等の諸君が居られたのであるが、先生の所謂新體詩は、小中村、久米、田中諸君に文字を訂正してもらつて、東洋學藝雜誌に載せられたのである。やがて井上哲次郎君も、其中に加はり、十五年の五月に至つて、之を蒐めて新體詩抄と名けて、丸善書店より出版せられた。その書の巻頭にある、唐の横町の毛唐人曰く云々と書出されたる疎放洒落なる序文は、この頃の外山先生の一面を窺ふに足るべきもので、風來山人の六々部集を學ばれたやうな文章である。先生が平賀源内を好まれたとは前にも述べたが、先生は、一時その文章をも模せられたと見える。この時外山先生は、はじめて、山仙士と云ふ號を用ゐて居らるゝが、これは井上哲次郎君が、外山の外の字の旁點だけを取つて、これでは如何と言はれたに對して、先生は、何でも宜しいと言つて、そのまゝ號させられたのだらうな。この時矢田部君も、尙今居士と云つて居らるゝが、外山先生の如き思想の人が、何故に、雅號などを必用と感せられたかは、少しく不思議に思はれる。この所謂新體詩の起りに就いては、或は子爵末松謙澄君がグレイ氏の「エレ

ジー、オン、ゼ、カンツリー、チャーチ、ヤード」の一篇を譯せられたによつて、先生も矢田部君も、之に倣はれたのであらうと云ふ説もあるけれども、その眞否を知らない。この頃、英詩でも好むといふ人々の間には誰にでも、多少かくの如き考へが起つたものらしく、たゞ幾分か、着手の前後があること云ふ相違であらうと思ふ。さて世間では、この新體詩を以て、詩にもあらず、歌にもあらず、飛んだ鶴が明治の聖代にあらはれたものであるとして、嘲笑を以て迎へる者もあつたけれども、新體詩抄は、とにかく大分賣れた。その検印料は、之を丸屋銀行に預けて置かれて、先生もある時人に向つて、我輩と雖も、銀行に預金をして居ると誇られたと云ふ話がある。然るに、その後その銀行は破産して、検印料の預金は全く損失となつたと云ふことである。

さて、この新體詩抄中の抜刀隊の歌は、先生がかの佛蘭西の「マルセリーズ」や、普魯西の「ワハト、アム、ライン」などに倣うて作られたもので、調も佳く、文字も割合に綺麗であるが上に、その文句の中には、「天のゆるさぬ叛逆を、起しよ者は昔より榮えしためしあらざるぞ」と云ひ、「大和魂ある者の、死すべき時は今なるぞ。人に後れて耻かくな」と云ひ、「死地に入るのも君がため」と云ひ、「忠義の爲に死する身の、死して甲斐あるものならば死ぬるも更に怨なし」と云ひ、「武士と生れた甲斐もなく云々」と云ふが如き

は、いづれも、世道人心に裨益ある文字であるがために、大に歓迎せられたことである。されば世間にも漸く之を模する者が多く、軍歌と云ふものがおひ／＼にあらはれた。殊に、日清戦役の際に及び、多くの軍歌があらはれて、盛んに國民の士氣を鼓舞したのを見て、先生大得意で居られたといふのは、尤もなことと思ふ。士氣を鼓舞するといへば、直ちにまた、かの萬歳の聲が聯想せらるゝ。明治二十二年憲法の發布せられんとする時、我が大學にてはこの曠古の大典を祝すべき、適當なる方法を協議したのである。その時先生は、萬歳を三唱することを提言せられ、教官の集會に於て、之を練習せられた事がある。やがて發布の當日となり、祝賀式の席上で、法文科大学の立關の階段の上に立つて、「萬歳、萬歳、萬々歳」と三唱することの音頭を取られたのである。この萬歳といふ文字は、もとより古いけれども、今日一般に用ひらるゝ如き意味と場合とに於て、この活潑にして嚴肅、壯快にして沈痛なる賀頌の辭の、汎く用ひらるゝやうになつた始めは、恐らくは我が外山先生であらうと思ふ。

その後、新體詩の創作がおひ／＼に出來て、二十八年に至つて、上田萬年、阪正臣、中村秋香などの諸君の作をも合せて、更に新體詩歌集一冊を出版せられた。この中で、先生の作として知られて居る「わすれがたみ」は「われば喇叭手なり」可兒大尉「畫題」中詞等

は公會の席に於て、先生自身朗讀せられたことのあるものである。この朗讀と云ふこと、また先生の翹められたことであつて、人或は之を冷評して、外山氏の狼讀などと云ふ者もあつたが、一種興味のある、將來必ず發達すべきものであらうと思ふ。中にも、わすれがたみの一篇は、東京音樂學校の卒業式場に於て、朗讀せられたものである。これは、この小傳の始めに述べたところの、かの安政の大地震に、先生自身が、幼沖に遭遇せられたときの事情を本として作られ、文句もよほど念を入れて、雕琢せられたものである。されば、今でも中等教育の國語讀本には、引用せられて居るほどである。また今も可憐なる兒女が、まゝ千島のはてより沖繩までも、開闢この方異國の敵に、一度も今まで汚されざりし、貴き海岸護れや護れ、敵の軍艦幾百あるも、千尋の底へと沈めてしまへ云々と、聲張り揚げて歌へるを聞くが、是れ即ち先生の作なる「我が海軍」と題する一篇の歌である。是等の歌が如何に遍く少國民に愛唱せられ、之を聞ける我が國民が、如何に鼓舞興奮せらるゝかは、更めて申すにも及ばぬことであらう。先生の薨後五年にして、日露戦役が起り、敵國の大艦隊は海を壓して來たのであるが、先生早く薨じて、かの日本海大海戦の結果が、如何にも先生の歌の通りになつたことを見られなかつたのは、我々の極めて遺憾に思ふことである。かく列

舉し來れば新體詩の翹始と云ふことは、また先生の成功の、著しきものゝ一つとして數へることに、誰も異論はあるまいと思ふ。

管に新體詩を作らるゝのみならず、之を諷唱することに就いても、工夫を凝らされたので、朗讀は即ち其一方法として、實行を試みられたのである。されば學校に於て、唱歌のはじまつた頃には、先生自身も或る音樂家に就いて、唱歌を學ばれたことがある。又明治十五年の末より十六年の初めに亘つては、同志の人々と共に、五十會と云ふものを組織して、梅若某氏に就いて、謠曲の稽古を始められた。毎月一回、神田の玉川堂に會せられたので、其連中には、故矢田部良吉君子、金子堅太郎君、男爵松尾臣善君、及び古市公威君、松井直吉君、木下廣次君等の諸博士が居られる。先生の聲の分量を以てしては、謠曲も上達せられさうに想像せらるゝが、如何なる事情であつたか、この會は、僅に兩三回より外開かれず、先生の謠曲の稽古も、永くは續かなかつたやうである。要するに、先生はこの類のことに就いては、餘ほど深い興味を有つて居られた。西洋の「ドラマ」「オペラ」などのことを考へて、これと我邦の淨瑠璃演劇なごとの比較及び調和と云ふやうなことを考へられたらしい。されば、菊池大麓、松井直吉、箕作佳吉等の諸親友と共に、無名會といふをはじめ、折々、淨瑠璃落語講談な



ごとを聴かれ、又は歌舞伎座に赴かるゝことのあつたも、單に一時の娛樂に止まるの  
 ではなからうと思ふのである。二十九年の頃には、先生は俳句をも試みられたと見  
 える。その二三を擧ぐれば、年始にも子の手を引くや新やもめ「初雪や不意な飢饉で  
 雀鳴く」などの同情を表はしたものがあり、また「見し夢が夢か浮世が夢なるか」咲く  
 花も散る花もある世のならひ「見る人の心をうつす落葉かな等の頗る悟道的のも  
 のもある。こゝには、たゞその二三を録して、先生が文藝の一側面に於ても、如何に多  
 方面であつたかを示して置く。

## 第八章 大學教授時代……その四

世人は、先生はまた漢字廢止を絶叫せられたる、最初の一人であることを忘れては  
 ならぬ。明治十七年の四月頃に、漢字を廢するに就いての意見書やうのものを綴つ  
 て居られるが、それは、この年一月二十七日の「かなの會」の總寄合に於ての、漢字を廢  
 すべしといふ先生の演説と、同じ趣意のものである。そも、先生は早くより、文字  
 は、羅馬字を以て最上のものとせられて居つたが、その實行は、なか／＼容易な業で  
 ないので、その實行せらるゝまでは、かなの會に賛成せられて居つたのであらうと  
 思ふ。されども、或は、先生も、當初は假名を探るか、羅馬字を探るかに就いては未定見  
 であつたとの説もある。要は漢字を打破するを以て急務とせらるゝので、之に就い  
 ては公會の演説に、新聞雜誌の上に、頗る猛烈なる議論をして居らるゝやがて、矢田  
 部良吉君が躍起となつて羅馬字採用を主張せらるゝに及んで、之に賛成せられ、是  
 に於て、明治十八年に至つて、羅馬字會が組織せられたのである。その主旨は、即ち、有  
 害無益なる漢字を廢して、その代りに、横文字を用ゐ、以て日本の文化をして、西洋文  
 化の域に進ましめんとするのであつた。先生自ら率先して、これに少からざる基金

を寄附せられ、矢田部、山川、穂積、松井、箕作、巖谷、櫻井、高松、木下、高嶺、寺尾、鳩山、小島、後藤、和田垣、その他の諸君も、いづれもそれ／＼基金を寄附せられたる熱心家である。賛成者の中には、故内藤耻叟君の如き一異彩もある。矢田部、神田の兩君がその幹事となられて、會は一時は頗る盛んで、大に望を屬せられて居つたのである。しかし、最も國家の重大問題であるによつて、當時、さまで著しい發展を見ることが出来なかつた。同じ羅馬字の熱心家のうちにも、その綴り方に關して、意見の異なるがため、田中館君等は、分離して別々に雑誌を發行するといふやうな紛糾もあつたが、とにかくこの會が、何時の間にか幽霊となつたのは、不思議なことである。先生はまた普通教育にも、外國語、就中、英語を、或る制限の下に課することの必要を感せられて、之を諸方で述べられたことがある。埼玉縣教育會の需により、英文を以て、教訓の數語を額面に書いて與へられたのも、多分この頃の事であらう。その額面は、今は文科大學社會學研究室に懸けられてある。また十九年には、女子の教育を論じ、併せて耶蘇教擴張の方法を説くを題して、本邦に在留せる宣教師が、一致協力して女學校を設け、我邦上流社會の女子教育を、引受けられたことの希望を述べ、是れ先づ以て婦人を捉へ、次に男子に及ぼすものであつて、耶蘇教宣布の上から考へても、得策であ

ると云ふ論をせられて居る。また東京婦人教育談話會に臨んでは、我邦の女子も、男子に劣れる譯は無い、然るに、その劣れるが如く見ゆるは、是れ畢竟、教育が足らぬからである。と喝破して、急進主義を執れる巾幗社會の奮勵を促され、また十九年には「耶蘇教擴張の新法」と題して、女子教育を宣教師の手にて扱ふこと、及び大學の卒業生は、社會各方面の有力なる要素であるからして、之を感化して、耶蘇信徒となすは、耶蘇教擴張の急務であると論じ、その手段として、耶蘇教社會にて二三の大學豫備校を設け、以て、大學入學志望者を收容すべしと説かれて居る。加藤弘之君が、日本の變化の早きに過ぐると言はれたのを、駁撃せられたのも、恰もこの頃のことである。かく社會萬般の事に亘りて、先生は大抵進歩主義を執り、改進を絶叫せられたのであるが、其抑制せられざる自由思想と、其言論の文字方法が、毎々奇抜であるなどのために、大に世の耳目を聳動せられたことが、少からぬのである。そも／＼、當時社會の情態を見れば、盛んに西洋崇拜の風が吹きすさんで居て、中には、極端なる歐化主義までが行はれて居つた。殊に、明治十八年の伊藤内閣は、井上馨侯を外務大臣とし、かの條約改正の難問題を解決する一方法として、制度、文物、風俗を歐化せんと務めた。是に於て、外國語の必要は愈々唱へられ、耶蘇教師の經營に係れる學校は得意と

なり、婦人の洋装、舞踏、さては假裝舞踏まで流行した譯で、所謂鹿鳴館時代と云ふ言葉が、今にも記憶せられて居るのである。この風は、大學の内にも吹き及ぼし、學生教師の間に、英語會と云ふものが組織せられて、十八年の六月十五日に、その特別會が小石川なる植物園で開かれた時の如きは、盛んな有様であつた。即ち英語に堪能なる教授は、學生の或る者と共に「シキスビヤ」の「シーザ」を演じ、招きに應じて來會したる九十餘人の半ばは、貴婦人であつて、しかもその貴婦人の半數は、洋装であつたと云ふことである。かゝる現象は今日に於ては、とても見られないことであらう。然るに、條約改正に就いての歐化政略は、先づ失敗に歸し、尋いで、國粹主義の風の吹起るに及んで、教育には、德育と云ふことが大に唱道せらるゝやうになり、やがて、二十二年憲法發布の大典の晨には、文部大臣子爵森有禮君が、刺殺さるゝと云ふ奇變が起つた。大學の英語會も、何時の間にか、その姿が見えなくなつたと云ふやうな世態となつた。されば、外山先生も、従來自由思想を以て、盛んに政治及び社會の事を議論せられ、中には、随分急激なる意見を發表せられたこともあるが、その先生もまた議論上に、やゝ變化を來たされたやうである。先生は、屢々、森子爵が、動もすればその心術に反して、人に誤解せられて居ることを話されたが、矯激と見らるゝ言動

より思はぬ災禍を招くことのあるを感せられ、就中先生の早い時代の一知己、また常に先輩として敬意を表して居られた森子爵の慘事の如きは、先生に於て、特に多少の感なくてはならぬと思はれる。昔の言葉に聖人はよく世と推移るとあるけれども、先生の思想に變化を來たしたのは、必ずしも世と推移ると云ふばかりではない。そも、先生の議論の方法たるや、一の問題を捉へれば、四方八面より之を觀察し、分析的に批評して、その利害の關係を淵底まで極めなければ止まない性質である。されば、その判断は寧ろ遅々たる觀がある。大學の評議會などに於ても、種々の方面から議論を始めて、遂に先生の議論は、敵方であるか味方であるか、他人には、分らぬやうになることさへもある。かくの如く、綿密に研究しての上であるからして、一たび是非善惡の判断點に到着したならば、之を表白し、また之を實行するに當つては、勇往邁進、所謂威武も屈する能はずと云ふやうな概がある。故に、世間に於ても、また貴族院などに於ても、餘り思切つた事を云ふ人である。勝手次第な放言をする人である。と云ふ類の評を受けらるゝことがあつた。この周密なる觀察と、思想の自由とには、何時までも變化は無いのであるけれども、先生も年所を経らるゝに従つて、我邦の古書を讀まるとこと多く、經驗は次第に積まれ、眼界は漸く擴大せられ、之に

加ふるに、世態も追々變化するものであるからして、従つて先生の議論も變化するを免かれないのである。即ち世に所謂曲學阿世と云ふやうな質のものでは毫も無く、寧ろ思想の進歩と云ふべきものである。先生は、これまでが随分急進主義にして或る部分に於ては、在來の事物を打破するを事とする人、ごさへ思はるゝほどであつたからして、思想の進歩するに従うて、保守の分子が、漸く加はつて來たのである。明治三十年に、貴族院に於て先生が古墳墓の保存に關する建議案を提出せられ、詳密にこれが説明をせられたことがある。これに就いても、先生の友の或る一人は、外山君が、かゝる性質の建議をなすとは、不思議であると言つた。驚いたこのことであるが、是れ、思想の變化、否、思想の進歩の一斑を見るに足るべきものである。

こゝに、先生の政治方面に立歸つて、一言せざるを得ぬ場合となつた。明治二十三年始めて帝國議會の開かるゝに當つて、先生はその九月二十五日を以て、勅選によつて貴族院議員に擧げられ、三たび豫算委員に選ばれ、田畑地價特別修正法律案輸入棉花關稅免除法律案等の、特別委員に選ばれて、時々辯論をせられたことであるが、上に述べた古墳墓保存の建議案の如きは、最も人の注意に上ばつた一つである。墳墓のことに就いては、先生はより先き、池上の本門寺に遊んで、木下順庵先生の墓所

が、或る割烹店の臺所口にあつて、見る影もなくなつて居るのを慨歎せられたことがある。また小石川の大家なる室鳩巢先生、及び寛政諸博士の墓に詣でて、一掬の涙を灑がれたこともある。また二十九年の七八月には、その頃大學を卒業せられた建部遯吾君を伴うて、廣く京坂地方を跋渉して、遍く御歴代の山陵を拜し、兼ねて古墳墓を憑吊せられたこともある。先生は各方面に興味を有じ、各方面に同情を有つて居らるゝ人である。况んや明治二十年頃このかた、先生は、頗る本邦の古書を涉獵し、歴史的研究に心を潜むるやうになられたからして、その結果として、「神代の女性」「神代の婚姻及び家族制度」「神代に於ける政治思想及び制度」「大日本智識道徳史等が、二十七八年頃から起稿せられ、中には世に公にせられて居るものもあることを思へば、古墳墓保存建議案を提出せらるゝ如きも、毫も異とすべきでは無い。而して、この思想の進歩は、實に二十七八年頃に至つて、著るしく見はれて居るやうである。されば世人は往々、外山氏は人が大分變つたと言ふ。亦以て、以前には、如何に急進の思想を懷いて居られたかと云ふことが分る。議院内に於ける辯論家としては、先生は、偉大なる體軀、颯爽たる英姿、例の分量のある聲で、抑揚あり、波瀾あり、巧みに修辭法を用ひたる演説をせられたので、聴く者をして、如何にも泰西の雄辯家の辯論を聴くの

想あらしめたのである。三十三年の一月三十一日、高等學校及び大學増設に關する建議案が、貴族院の議に上つた時にも、先生は、貴族院に於ける教育論の「オーソリチー」たることゝて、病氣中であつたにも拘はらず、押して出席して、滔々として質問を試みて、在野教育家に、一大警醒を與へられた。しかし、是れ、實に、先生の氣焰を吐かれたる、最後のものとなつたのである。

かく大學に於ける本務の餘暇に、政治並びに社會萬般の事に、注意をせられて居つた外山先生は、なほ綽々として餘裕があつたのである。即ち、哲學會の生れたときに、その創立者の一人となり、ついでその副會長として、加藤會長を助けて、盡力せられたことである。さうして、その雜誌に、「心像」普通總念の説、「神代の女性」をはじめ多くの論説を掲げられたが、就中、「人生の目的に關する我が信界の一篇の如きは、最も見るべきものである。また同僚の方々と謀つて、興學會と云ふものを組織し、それより出さるゝところの東洋學藝雜誌には、毎々原稿を寄せられた。即ち多くの新體詩並びに上に述べ來つたところの「耶蘇教擴張の新法」加藤弘之氏の東洋の一大問題「を駁す」漢字を廢すべし等の議論は、多くは、この學藝雜誌の上で發表せられたものであつて、右の外にも、「養子論」「演劇改良論私考」なども載つて居る。この外、先生の研

鑽考索の結果は少からぬことであるが、大抵この遺稿に網羅せられて居ることゆゑ、こゝには、その題名書名等をも列擧すまい。既にこれまでにこの小傳中に列記しただけでも、或は、餘計な事では無かつたかと心配するほどである。たゞ一言すべきは、大日本智識道德史の續篇として、稿を起されたる皇位繼承編は、先生獨得の研究になるものであるが、問題が問題である上に、まだ眞に未定稿であるから、遺稿より省くことゝしたことである。今少しく先生が存生せられて、斧削を加へられたならば、立派なるものとなつたであらうにと、口惜しく思ふのである。

これまで述べ來つた如く、先生は學者、批評家、詞藻家としては勿論、その外の諸種の方面に於ても、事蹟の少からぬ人であるが、なほ私立學校の教育に就いても、注意すべき事がある。兼ねて私立豫備校の不完全なることを慨歎し、完全なる正則學校を設立せんと考へて居られたが、神田乃武、元良、勇次郎等の諸君と謀り、富田鐵之助君等の助力を得て、明治二十二年に芝公園の安養院と云ふ寺院を借り受け、正則豫備校を創められた。これが即ち、今の正則中學校の前身である。又この頃からして、大に心を女子教育の上に注いで、伊藤公爵に説かるゝ所があつて、公爵及び伯爵土方久元、男爵澁澤榮一、増島六一郎等の諸君の盡力によつて、朝野の人々から寄附金を得

女子教育獎勵會と云ふものを設立せられた。さてその附屬として、東京女學校と云ふものを設け、外國婦人數名を備つて、教育を始めさせた。これが即ち今日辻新次君の館長となられて居るところの、虎の門なる東京女學館である。是等も先生の事業の中で、注意すべきもので、また先生が、議論を實行せらるゝ精神を見るべき一の材料である。されば先生は、その存命中、正則豫備校に教鞭を執られざりし時代は少く、總長となり、大臣となられてからでも、なほ評議員として、之に注意せられたと云ふことである。

早く明治十四五年の頃であるが、博物學の研究に従事せられて、矢田部、松井、高嶺、松村、小藤等の諸君と共に、植物採集のために、しばしば、近郊へ出掛けられたことがある。十四年の七月には、是等の諸君と富士登山を企てられたことがある。この折にも、植物採集の準備をせられて、富士山より下りて、後名古屋、福井、金澤等の地方へ旅行せられたが、その先々に於ても、植物を採集し、歸京の後は、毎々、矢田部君の植物學研究室に出入して、その分類研究等に従事せられたけれども、是等は皆餘業であつて、一と通りその要領を得られた後は、止められたのである。また音樂を好んで、時々之を聴き、又之に就いて説を立て、繪畫を觀ることを好んで、又これが批評を試みられ

た。かの畫題といへる新體詩は、先生が二十三年の四月に作られたもので、西洋畫は本邦に入つて年既に久しきにもかゝはらず、たゞ、景色、建築、若くは想像の事のみを畫題とせるのを見て、之を慄らすとし、將來は、人事的の畫題を採擇すべきと唱へられたのであるが、その後繪畫界では、果して、頗る先生の希望通りの傾向を現はして來た。先生薨去の前年に當つて、讀賣新聞社で、賞を懸けて、東洋歴史の畫題を募つたことがある。この時、先生が募りに應じて提出せられた素戔鳴尊の畫題が、その選に當つて、賞として、橋本雅邦氏の山水畫一幅を得られたことがある。要するに、先生は、その學識及び趣味の多方面なること、社會よりは常に一步の先頭に立たれしこと、その元氣の旺盛なること等により、改善進歩の眼を以て、諸般の事を批評し、論議して、著々その功を奏せられて居るのである。

第九章 東京帝國大學總長及び文部大臣時代：  
……その薨去

はじめ明治十四年の八月三十一日、先生は、東京大學教授として、大學に於ける諮詢總會の會員に選舉せられ、十九年に、加藤弘之君が總理を罷められて、渡邊洪基君が新たに總長とならるゝまでの間は、先生は、東京大學總理、または總長事務取扱の命を受けられた。又この年以降、評議官又は評議員として、ながく、大學全般のために力を盡されて居つたが、三十年の十一月となつて、時の總長男爵濱尾新君が、内閣に入つて文部大臣とならるゝに及び、その十二月に、先生は、濱尾君の後を襲いで、總長となられた。是れ先生の、名譽として喜ばれたことである。その因縁深き、赤門の統領と云ふことは、先生の、衷心得意であつたことである。然るに、やがて、伊藤内閣の文部大臣たる侯爵西園寺公望君が、病を以て官を去らるゝに當り、先生は、伊藤首相の薦により、その内閣に入つて、文部大臣となられた。實に、明治三十一年四月三十日の事である。さて、その後、直ぐに、菊池大麓君をその後任に推薦せられて、總長とせられた。外山先生の名は、既に世に轟いて居る。その學政に就いての抱負も、また頗る大なる

ことは分つて居るされば、先生が文相の椅子に凭らるゝに及んでは、天下は皆其施設經綸を想望して、期待することが多かつたけれども、先生は、職に就いて間も無く、新たに高等教育會議規則を改正して、建議及び議員選任の範圍を擴むる等、同會議を有効ならしむる手段を實行し、その議員となるべき人の選定、その勸誘、さては直轄學校の巡視などに忙しく、また社會教育に就いての考案などを立て、居らるゝ間に、早くも二ヶ月足らずを經過した。六月の二十八日に、大學の職員一同は、小石川の植物園に於て、舊總長外山先生を送り、新總長菊池大麓君を迎へるために、宴會を開いたけれども、この時は、先生は、既に文相の位置を去らんとして居られたのである。云ふのは、當時の政界の事情は、尙近年の事故更めて言ふまでもないが、簡略にいへば、内閣は、内治外交の必要上より、増稅案を第十二議會に提出したが、衆議院は之を否決したため、遂に解散となつた。是れより先き、伊藤首相は自由黨と提携して居られたが、政見の異同より、その提携は破れる事となつて、一轉して衝突となり、再轉して解散とまでなつたのである。さて、民黨にては、進歩黨も自由黨も各々解黨して、六月二十二日に、新たに憲政黨と稱して、危然たる大民黨を組織し、以て、政府に當らんとする勢を示したからして、内閣に於ても、一時は政府黨を作つて、之に對抗せ

んかとの話もあつたやうなれども、事情あつてそれは行はれず。伊藤首相は内外の形勢に鑑み、徒らに軋轢を事とし、宸襟を煩し奉るの非を悟つて、二十四日に断然上表して、首相の印綬を解かれんことを奏請し、之と同時に、憲政黨の領袖大隈、板垣兩伯に政府組織の勅命あらん事を奏請せられたのである。されば、その翌二十五日には、先生もまた、辞表を提出せられたことであつた。三十日に至つて内閣が更迭して、大隈、板垣兩伯の聯立内閣が成立し、政黨内閣が始めて經驗せらるゝ事となつたので、我が憲政史上の、注意すべき一時期を劃したのである。かく先生は空しく、藩閥内閣の末路に、殉死せられた姿となつたが、この日の午前、先生は、文部省の高等官及び直轄諸學校長等を集めて、告別演説をせられ、それより直ちに去つて、大學の圖書館へ入つて、夕景まで讀書をせられたとであつた。かくの如く職に在ること、僅々二ヶ月のことであるからして、如何に抱負が大きくとも、如何に經綸の策を懐いて居られても、どうすることも出来ない。大臣として、見るべき成績を擧ぐることも出来ず、俄然として去らるゝことになつたのは、實に遺憾の極である。初め伊藤公が、先生の入閣を勧めらるゝや、先生は之を辭謝して、大學總長は名譽の地位で、且つ比較的鞏固なる地位である。今之を棄てゝ文部大臣となるは、榮は即ち榮であるけれども、片

脚を棺の中に投ずるの思ひがあると云はれた。かかるに、伊藤公は先生に向つて、足下も随分古いものである。時機を見て棺の中に入るも、また宜ならずやと言はれたので、先生は、遂に大命を拜せられたといふ話がある。この一場の好諧謔が、餘り早く事實となつてあらはれたことは、實に惜しい次第であつた。

されども、先生は大臣の椅子を去られたと同時に、世の中から忘れらるべき人ではない。先生自身もまた、大臣の地位にのみ、戀々たるやうな人ではない。されば、予はこれより言論の自由を得たりと言はれて、將に大に爲すあらんとするの概を示された。告別演説の後、直ちに大學圖書館裡に去つて、讀書せられたことは、前にも言つたが、その翌日も、午後に新任文部大臣尾崎行雄君に、事務を引繼がるゝまでは、圖書館に在つて讀書して居られた。これより後、先生を圖書館のうちに見掛けない日は、蓋し少かつたのである。先生が圖書館に行かれない日は、大抵諸方に招かれて、忙しく言論に従事して居られたのである。即ちこの年の七月三十日には、仙臺に行き、宮城縣教育會の總集會に於て、「教育に熱心なる國民たれ」と云ふ演説をせられた。八月一日に歸京せられて、その翌日は、茗溪會の總會が、小石川植物園にて開かれたが、その席上で述べられたのが、即ち「大隈内閣と教育」と云ふ大演説であつて、盛んに先生獨



得の反語を用ひて、新内閣の學政に向つて希望を陳べ、首相大隈伯に向つても十分に揶揄して註文を述べられたことであつた。十月の十五日には、福島縣の教育會に赴き、三春町に於て「教育の勝利」と云ふ題で演説せられた。先生既に冠を掛けられたけれども、隠然教育界の雄鎮であるからして、書肆はもとより、教育家また申すに及ばず、種々の方面より、様々のことを云つて、先生を勧誘に来る。即ち、新字の主唱、日本帽の制定、遙拜式の制定、博覽會殘品の處分、銀行の設立、機關雜誌の發行等、引切りもない程である。先生この事を記して、勸誘に来る者は、多くは熱心であり、篤志であるは明かである。されども、一々之を賛成し、之を承諾するときには、我は皆無となる、されば、謝絶するより外はないといはれて居る。實に外山式の斷り方と云つて宜しいのである。されども、政治上のこと、特に教育社會のことといへば、最も熱心に注意せられ、また一方には、圖書館に於て、論語、孟子の精讀、草雙紙の研究などをして居らるゝ、その淡如として餘裕のある状態は、實に面白い。草雙紙などは、その書物の短評をしるし、何々の書は何の特長あり、何々の書は卑猥なり、家庭に存すべからずなどの注意を書いて居らるゝのである。

かくて、その年も暮れ、明くれば三十二年となつて、先生の意氣最も昂り、活動最も顯

著なる年であつたが、餘りの活動が、幾分か健康を損せらるゝ原因ともなり、遂に薨去せらるゝやうになつたかと思ふと、實に残念に堪へない次第である。この春、議會も既に閉ぢられ、諸方の學校は、新たな學年の授業を開始すると云ふに當つて、先生は諸所よりの依頼に應じて、演説に出掛けられた。即ち四月一日には、先づ三重、大阪、兵庫、岡山等の諸府縣に向つて出發せられた。此間、三重縣の議事堂にての「戦争と教育」、神戸の神港俱樂部にての「將來の商人」、姫路市教育會にての「文と武」の演説を始めとし、京都、大阪、岡山等に於ても、それ／＼演説をして、十一日に歸京せられた。このとき大阪にての演説は、學士會の第四回學術講談會の爲めであつて、その第二回が去る二十三年に名古屋で開かれたとき、ついでその第三回が、二十五年に、仙臺で開かれたとき、先生はそのいづれにも出席せられたのである。さて、同月二十三日に更に京都に赴き、府會議事堂に於て演説をせられ、また高等學校、西本願寺文學寮、眞宗大學、平安女學院等に演説して、二十九日に歸京せられ、五月七日には前橋に赴きて、群馬縣教育會のために、同じく二十八日には、宇都宮に赴きて、栃木縣教育會のために、六月の十七日には、長野に赴きて、信濃教育會のために、いづれも、その所の議事堂にて演説し、また長野中學校、高等女學校、師範學校等にて、それ／＼演説あり、轉じて

新潟に行き、縣教育會のために議事堂にて演説し、尋いで、高田の郡立中學校第二師範學校等にて演説し、八月五日にはまた、高松に赴き、香川縣教育會のために中學校にて演説し、更に、高等女學校師範學校にての講習會、丸龜中學校等に演説し、歸路名古屋に立寄り、中學校にて演説し、九月二日濱松に赴き、中學校にて演説し、その三日には、半込教育會にて演説せられた。右のごとく、頻繁に各地に旅行せられたことであるが、いたるところ送迎の叮嚀を極め、款待を盡し、外山先生の説を聞かんとて、演説は何處とも盛況であつた。而して先生の演説は、多くはその地方の人士に向つて、教育に熱心なるべきを説かれたので、聴者は皆、少からず感動したものである。信濃教育會の演説の如きは、午前十時半より、午後二時半に亘れる長演説であつて、新潟縣教育會、京都府教育會に於ての演説もまた、各々三時間に亘つたものであると云ふことである。十月の二十二日にもまた、京橋區の教育會のため、演説の約束ありしが、先生は九月の末頃より、流行感冒に罹られ、假初めのことと思はれて居つたが、漸う肺炎を續發し、また中耳炎をも併發した。もとより、その道々の専門醫師にも、それ／＼診察を受け、注意を加へられたけれども、どうも捗々しく癒えない。しかしその年も暮れて、翌三十三年の一月下旬に至り、一旦頗る輕快に向はれた。然るに、前に

も云へる如く、恰も、大學及び高等學校増設建議案や、學制調査會設置に關する建議案が、貴族院の議に上ることゝて、先生は一月三十一日に、病を押して登院し、一場の質問演説をして、大學増設には賛成であるが、高等學校の方は、有力なる府縣の、自ら經營するに任せたいものである。山口、鹿兒嶋などの地方にのみ増設するは宜しくないとの趣意を述べられた。之がために、在野の教育家は、大なる教を受けたのであるが、先生には、これが重大なる打撃であつて、それより病勢またよろこからず。二月の十三日に至り、遂に大學の第一醫院に入り、療養せらるゝ事となつた。參次は、前年の秋、先生が病中に著された、瀧岡の將來の一本を賜はつて、之を批評せよとの命を受けた事があつたから、妄言を綴つて、史學雜誌に掲げ、その壹部を先生の病床に持參して、教を乞うた事がある。たしか二月の十五日頃と思ふ。其時先生は、なほ例の通り、元氣よく話されたのである。然るに中耳炎の治療のために、この月の二十日を第一回として、三回まで、後頭部なる耳の後のところを穿開して、膿を排泄せしむると云ふ大手術を受けられたが、其結果が思ふやうでなく、腦症を發せられて、終に三月八日といふに、溘焉薨去せられた。その前日、即ち七日附にて、特旨を以て從二位に進められ、勳二等に叙せられて、瑞寶章を賜はり、更に勅旨に依つて、東京帝國大學名

譽教授の稱號を受けられたことである。親族故舊等の悲哀の中に、遺骸を柩に納め、覺了院殿嚴淨正一大居士と法諡し、越えて十一日の午後、谷中齋場に於て、佛葬の式を行はれた。當代の學者、縉紳、名士、學生の來會する者が、無慮二千餘名であつて、その送葬の列にある者は、皆徒歩して、さすがに、途中に於て喫煙したり、哄笑したりするやうな、不謹慎、不體裁なことは、少しも無かつた。儀仗兵の吹奏する哀の喇叭は、聴く者をして暗涙を催さしめ、道途に立つて傍觀する者もまた、錦旗を見て、外山先生逝けりと云つて、悲むものが多かつた。式終つて、直ちに日暮里の火葬場に於て茶毘に附し、遺骨は、谷中齋場に近接せる、亡父節翁君などの墓域に葬られたことである。是に於て、先生の温容も、また、永劫に見ることが出来ない。入閣の時、伊藤公の戯れられた片脚を棺中に投ずると云ふ言葉が、偶々識をなして、今度は、その本當の意義に於てあらはれることになつたのは、實に悲哀の極である。

嗚呼、我が東京帝國大學は、適當なる一の代表者を失つた。先生が我が大學に關係せられたのは、明治九年のことであるけれども、大學の前身なる蕃書調所、東京開成學校時代に溯れば、實に四十年近い深く久しい縁故である。世人が、大學と云へば、直ちに赤門を聯想し、また赤門といへば、直ちに外山先生を聯想すると云ふの

も、蓋し偶然でないのである。大學の關係者としての長老は、加藤、濱尾、菊池等の方々をはじめとして、少くはないけれども、就中、外山先生は、強健な、元氣な、賑やかな人であつた故に、先生のこの世を去られたことは、一段人々をして、秋ならざるに寂寥を感せしめたのである。その後、何か事が起り、集會でも催さるゝ折には、外山先生在らましかばと、人々をして追想せしめることが、毎々あるのである。我が大學が、一の適當なる代表者を失つたのは、即ち單に大學のためのみならず、學問のため、教育のため、痛恨すべきことである。邦家のために長大息すべきことである。古の人は、他人の墓に對し亦巾を沾すといつて居るが、我々は先生の墓を拜して、無限の感慨を禁ずる能はぬのである。

## 第十章 一二三の逸事 結尾

これまでは、簡單に、外山先生の履歷を述べたのである。その中にも、先生の最も多方面の人なること、進歩主義の人なること、公平と勤勉とは類の少いこと、その觀察の周密にして批評の銳利なること、主我にして毅然たる志操はあれども、尙他に對しては圓滿なること、豪放にして細心、尊大にして謙遜、罵倒好きにして深切、言行往

々意表に出でて、一種のヌネたる人物たること等は、髮髻として認められたことと信ずる。これからは、尙右に述べ遺した所の逸事の二三を録して補遺とし、以てこの小傳の結尾としやうと思ふ。悲しいことには才疎にして、先生を拙き出して、紙上に躍如たらしむることの出来ない點である。

先生が辯論に長せらるゝことは、前にも述べたが、集會の場合或は食卓の上などに於ても、談論風生、時としては氣焰萬丈にして、當るべからざることがあり、また時としては、嘲諷を逞うし、漫罵せらるゝともあり、或は、間々單刀直入に攻撃を試みらるゝことさへある。而も原來竹を割つたやうな氣象の方で、些の悪意なく、一點の邪氣もない。先生の特質たる深切と公平さが、自から總べての事に現はれて居るからして、嘲けらるゝ者、罵らるゝ者、攻撃せらるゝ者も、愠らず、憤らず、却つて、之を聞くを樂むと云ふやうな様子である。これは實に、先生獨得の徳であり、妙所であつて、他人が眞似やうとしても、眞似らるゝことではない。先生の大演説に於ても、反語、嘲諷、揶揄等は毎々用ひらるゝのである。但し先生は、剛直で、その頭腦は冷靜であつて、自由に思想感情を發表せらるゝが故に、先生を熟知せざる者は、動もすれば、豪放粗笨の人とも、傲慢無禮の人とも見るのであるけれども、それ等の人も、しばしば先生に接し、

先生を熟知するに及んでは、大抵その真相が分つて、當初の誤解を悔ゆるのである。先生は、常に豪放粗笨でないのみならず、孰れかと云へば、寧ろ細心周密な人である。諸方面に亘つての學識があり、且つ、事物の多側面から觀察せらるゝの常であるからして、自ら綿密なる性質となられたことであらうと思ふ。晩年に至るに従うて、特にそのやうに思はれる。邊幅を修する類のことは、無論嫌ひで、行儀作法などのことも、さほど拘泥せらるゝ方ではないけれども、守るべき禮儀は固く之を守り、盡すべき社會的義務は、之を盡すに注意せられたのである。就中、知人、若くはその家族の人の死去などの場合には、吊問會葬を怠らず、十分に同情を表せられた。下僚の死去などにも、かゝる禮節はよく守られたやうである。萬事に清潔を好まれて、その注意の周密なることは、實に驚くべきもので、旅行の際には、夜具、蒲團を覆はんがために、必ず敷布を用意せらるゝことは、勿論箸、ナイフ、フォークの如きも、必ず之を洗滌し、若くは拂拭してからでなければ、決して使用せられないのである。食卓に於て「ナイフ」を以て、角砂糖の表皮を削り去り、而して後用ひらるゝなどは、他人には餘り見受けぬことである。先生の頭髮は、いつも五分刈であつて、三分にもならなければ、七分にも伸びない、平素餘ほど注意しなければ、おれだけに、頭髮の平調を保つとは出来ま

いこの評のあるほどである。果して、先生は頭髪のためには、比較的費用を吝まれなかつた。これも、先生の衛生上の注意から来るのであらうが、先生が豪放無頓着なる様子に見受けられながら、どうかすると、甚く或る事物を氣にかけらるゝ癖をあらはして居るのである。

先生の深切にして友情に篤きことに就いて、同僚も、學士も、學生も、多く之に感服して居ることは前にも述べたが、先生の少壯時代の友の一人が、一時大に落魄した折、先生は昔の外山捨八を以て之を慰められ、その人の甚く感激した話がある。先生は、舊幕府出身で、その榮進者であるからして、舊幕士の失意の人の之に頼つて來るものが少くない。先生は、よく之を扶助せらるゝけれども、其人を扶助せらるゝに當つても、之を濫りにすることはせられぬ、必ず、これが方法を立てられて居るのであつたのである。或る人に、多年の間、月々の手當を給して、太平記や平家物語など、多くの國書の索引を作らしめられたことがある。是れ先生は、常に古書に索引のなきを嘆いて居られたから、この人を扶助するに當つて、この仕事を課せられたのである。その索引は、今は東京帝國大學の圖書館に保管せられて居る。平生質素儉約を旨とせ

らるゝけれども、意に適した時には、思ひきつて、俗に云ふ氣前を見せらるゝこともある。羅馬字會に少からざる寄附金をせられた當座、大學講義室に於ける或る演説の節に、無益なる寄附金は馬鹿氣たれども、有益なる事業に、纏まりたる寄附金をもなし得ざる蓄財家は憫むべきものであると罵倒して、意氣軒昂たられしより、先生の平生を誤解したりし人々に、一驚を吃せしめられたことがある。また深切の上からは、随分思ひ切つたこともせられ、義侠的の舉動をも見受けるのである。人の金子借用を先生に願うたとき、先生は之を承諾し、さて返濟の時期を豫約しながら、之に背くときは、君の信用に關するのである。されば、返濟の事は豫め云はざるがよからう。と誠められたことがある。

先生は、大に西洋主義を鼓吹せられたにも拘はらず、孝は百行の基と云ふことは、夙に服膺せられて居る言葉であつた。母君には早く別れられたによつて、父の節翁君には、最も孝養を盡されて、終始一日のごとく、少しも其意に忤ふようなどはせられなかつた。家庭には、令夫人房子の君との間に、長男岑作君、次男高一君、三男賢三君及び山子、靜子、隆子、久子の四女子を擧げられた。長女山子の君のみは夭死せられたけれども、他はいづれも健全に成長せられて、岑作君は今、京都帝國大學の工科に、高一

君は東京帝國大學の文科に在學して居らるゝ。この賑はしき家庭の主人としての先生は、夫人兒女に接するにも、嚴格なる中に、又和氣藹然たるところがあつて、家庭には、春風が吹渡つて居つた。かつて男兒を伴うて、鯉釣りなどに出かけられた事もある。男兒に游泳を教ふるために、大森へ出掛られたことは、毎度である。婢僕を遇するにも、亦例の通り温顔を以てして、之を叱責せらるゝ様なことは、極めて稀で、特に彼等に對して、何事に就いても、著るしく上下の差別を立つることはせられなかつた。先生の宅に雇はれて居たところの一車夫がある。既に十幾年を経て、よほど年も更けたけれども、先生は取替へることをせられぬ。また彼れの苦むほど疾走することを好まれぬ。されば、健脚なる車夫を雇ひ、疾驅して先生の車を、砲兵本廠前の邊りて追抜く者などは、毎度恐縮して居たのである。

讀書談論の外に、先生には、著しい嗜好といふものはない。酒は好まれない。たゞひ盃を手にせられても、少量を用ひらるゝに過ぎない。煙草は之を嫌はれた。けれども、最も嫌はれたのは、彼の矯飾偽善の風である。某顯人が或る式場に於て、演説を請はれ、始めは用意なしとて固辭しながら、やがて壇に立つに及んでは、草稿を取出して、滔々演説せられたることの如きは、先生が毎々嘲笑の種とせられたことである。矯

飾偽善の爲めには、往々人を面責せられたこともあるのである。

かく先生の性行を列べ來れば、偉大にして剛健、よく其精神を表示し、そして心と共に寛濶としたる洋服に包まれたる先生の體軀圓滿にして愛嬌あり、しかも一種の威嚴のある先生の容貌が、髣髴として眼に遮るやうな心地がする。引き締つた分量のある聲が、かすかに耳に聞えるやうに覺える。されども、先生は長へに谷中の墓域に眠つて居られる。その痛ましき薨去、その哀しき葬儀も、既に八年の昔となつて居るのである。嗚呼。

明治四十一年八月

三上參次謹んで識す

研  
究  
及  
批  
評

# 日本知識道德史

神の御形

## 神の御形

古來邦人の崇拜する神は或る外國の神の如くに若くは支那の天の如くに茫々漠々たる物の謂には非らず、歴然有形の物にして實體的に存在し給ふ物なり。本居は云へり、凡て迦微とは古の御典等に見えたる天地の諸の神々を始め、其を祀れる社に坐す御靈をも申し、又人は更にも云はず、鳥獸、木草のたぐひ、海人山など、其餘何にまれ尋常ならず優れたる徳のありて可畏き物を迦微とは云ふなり（祀傳三。人の形を有する神は果して人なりしか、鳥獸の形を有せし神は果して鳥獸なりしかは知り難しと雖も、兎に角本邦の神には其形の全く人の如き者ありたり、全く鳥獸の如き者ありたり、全く本草の如き者ありたり。）

人の如き神の御形

## 人の如き御形の神

神代に於ける神々の中に人の形を有し給ひし者ありし證據は大略次の如し。  
天神諸命以ちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱の神に、是の多陀用幣流之國を修理固



成せと詔りごちて天沼矛を賜ひて言依賜ひしかば故二柱の神天浮橋に立たして、其沼矛を指下ろして畫き給へば鹽許袁呂許袁呂邇畫き鳴して引き上げ給ふ時に、其矛の末より垂落る鹽累積りて島と成る(記傳四)と云ふ(史傳二)書紀一矛を以て攪き探り杯する爲めには人類の如くに手杯の具はり居ること必要なれば是二柱の神は最初より人類の如くに御手杯おはし坐しゝならん於能基呂島に天降坐して天の御柱を見立て八尋殿を見立て賜ひし等に依て見るに(史傳二)(記傳四)此時代の神々には人類の如き御手杯のおはし坐しゝことは彌々明かなり此の二柱の神が互に言語を交へ賜ひしことに依て見るに人類の如き御口御舌御咽喉等もおはし坐しゝことと思はるゝなり伊邪那岐命には成而成餘處一處在伊邪那美命には成而成不成處一處在て其成餘處を其不成合處に刺し塞きて國を生み賜ひしこと(記傳四)(史傳二)伊邪那岐命には人類の男子の如くに陽部おはし坐し伊邪那美命には人類の女子の如くに隱部おはし坐しゝことを證するに足らむ實に書記には「唯元之處雄元之處」とあり(書紀一)波邇夜須毘古神及び波邇夜須毘賣神は伊邪那美命の尿に成りまし彌都波能賣神及び和久產巢日神は其の尿に成りませること(記傳五)に由て觀るに(記傳五)大小便の道杯も人類の如くにおはし坐しゝことならん而

して伊邪那美神は火神を生み坐せるに因りて遂に神避坐ければ(記傳五)(史傳四)(書紀二)伊邪那岐命の御愁傷は一方ならず其御枕方に匍匐ひ其の御足方に匍匐ひて哭き賜ひて御涙を流し賜ひしことに由て觀るに(記傳五)(史傳四)(書紀二)神にも御頭御足杯おはされし而已ならず涙の穴の如き處まで人類の如く具はり給ひしと見ゆるなり關淤加美神及び關御津羽神は御刀之手上血自手俣漏出所成神なりしを以て見れば(記傳五)(書紀二)御指も人類の如くにおはし坐しゝこと明なり。迦具土神には人類の如くに頭おはされしと見えて所殺其頭に正鹿山津見神成り坐し人類の如くに御胸おはし坐しゝと見えて其御胸に淤摩山津見神成り坐し人類の如くに御腹おはし坐しゝと見えて御陰に關山津見神成り坐し人類の如くに御陰おはし坐しゝと見えて御陰に關山津見神成り坐し人類の如くに左右の手おはし坐しゝと見えて左の御手に志藝山津見神成りまし右の御手に羽山津見神成りまし人類の如くに左右御足おはし坐しゝと見えて左の御足に原山津見神成り坐し右の御足に戸山津見神成り坐したり(記傳五)(史傳四)又伊邪那美命にも人類の如くに御頭御胸御腹御陰左右の御手左右の御足おはし坐しゝことは黃泉國に於て御身體腐爛して宇士多加禮斗呂岐豆於頭者大雷居於胸者火雷居於腹者黑雷居

於陰者拆雷居於左手者若雷居於右手者土雷居於左足者鳴雷居於右足者伏電居(傳記)

六の) 給ひしことによりて明なり。

伊邪那岐命の人類の如き御形なりしことは其の御服装及御飾装等に就て考ふるも亦明なるが如し。彼の黒御鬘たり、湯津津間櫛たり、人類の頭髪(記傳六)の如き頭髪のおはし坐ししが故に斯る物を用ひ給ひしにてありしならん(記傳六)、(史傳五)の(書記一)又竺紫日向の櫛の小門の阿波岐原に到り坐して、禊祓ひ給ひし時に投げ棄ち給ひし品々は、如何にと云ふに、先第一には御杖第二には御帶第三には御裳第四には御衣第五には御櫛第六には御冠第七には御手の手纏等なり(記傳六)、(史傳六)の(書記一)斯かるものは一々人類の身に著くる所の物なり。斯かる物を人類の如くに用ひ給ひし神の御形は必ず人類の形の如くにておはし坐ししならん。又御頸珠杯も掛け居給ひて後之を天照大神に授け賜ひしことに依て考ふるに、御頸も人類の如くにて御坐されしと思はるゝなり(記傳七)、殊に左右の御手に手纏を著け給ひしことに由て觀るに、人類の手の如くに左右に御手を具へ給ひしことも明なり(記傳六)、(史傳六)の(書記一)御目鼻等も人類の目鼻と同一の數にて、御目は二個、御鼻は一個にておはし坐ししと見えて、先づ左の御目を洗ひ給ひ、次に右の御目を洗ひ給ひ、次に御鼻を洗ひ給

ひしなり(記傳六)、(史傳六)の(書記一)即ち左右の御目を洗ひ給ひしことに由て二個なりしことを知るに足らん。御鼻に關しては唯一回御鼻を洗ひ給ひし時とあるを以て其一個なりしことを知るを得べし。

速須佐之男命の天に上り坐しし時に立ち向はれん爲めに、天照大御神が御仕度を爲し給ふに當て御髪を解かせられたり(記傳七)、(史傳七)の(書記一)抑も髪を結び髪を解く等のことは畢竟人類の如くに御頭髪杯のおはし坐して且つ之を人類の如くに調整へ給ひしが故なるべし。而して又乃於左右御美豆羅亦於御鬘亦於左右御手各纏持八尺勾璉之五百津之美須麻流之珠而云々(記傳七)、(史傳七)の(書記一)とあるを以て見れば、天照大神にも人類の如くに左右の御耳左右の御手のおはし坐ししこと明なるか如し。又曾毘良彌者負千入之鞆附吾入之鞆亦所取佩伊都之竹鞆而弓腹振立而堅庭者於向股踏那豆美、如沫雪駭散而伊都之勇建踏建而待問云々(記傳七)、(史傳七)の(書記一)とあるに由て觀るに、御身體の御結構は御手たり御足たり御背たり御股たり、一々人類の如くにて御坐ししと思はるゝなり。

速須佐之男命か離天照大御神之營田之阿埋其溝給ひしことに由て觀るに(記傳八)、(史傳九)、(書記一)、高天原にも人類の如き神おはし坐して、人類の如き御手足具はり

て、農業杯に従事し給ひしと思はるゝなり。又天照大御神が服屋に於て神御衣織らしめられたる天衣織女の如きも(記傳八)(史傳九)(書紀一)(書紀七)全く人類中の女性の如き御身體の結構なりしと思はるゝなり。

速須佐之男命の御身體の如きに至りても、天照大御神の於開食大嘗之殿屎麻理散(記傳八)(史傳九)(書紀一)給ひし御手たり、逆刺天斑馬刺(記傳八)(史傳九)(書紀一)給ひし御手たり、全く人類社會一醉漢の手と全く同一の御手なりしならん。鏡を作り給ひし伊斯許理度賣命八尺勾璉之五百津之御須麻流之珠を作り給ひし玉祖命(史傳九)(書紀一)の如きも、全く人類の如き御手を以て斯る物品を製作し給ひしことならん。手次繫天香山之日影而爲鬘天之眞折而手草結天香山之小竹草而於天之石屋戸伏汗氣而踏登抒呂許志爲神縣而掛出竹乳裳緒忍垂於番登給ひし天宇受賣命(史傳四十二)(記傳八)(書紀一)全く人類社會の婦人と同一の御形なりしと思はるゝなり。

速須佐之男命を高天原より神夜良比夜良比賜ひし時に、御鬚を切り御手足の爪を抜かしめしられたり(記傳九)(史傳十二)(書紀一)されば速須佐之男命には人類の如くに御鬚あり御手足ありし而已ならず、御爪などに至るまでも人類の如くに具へ

給ひしと見ゆるなり。

大宜津比賣命が人類の如くに御頭を具へ二つの御目二つの御耳御鼻御陰御尻等を具へ給ひしことは、速須佐之男の爲めに殺され給ひし時の御事情に依て明なり

(記傳九)(史傳一)。

八千矛神が高志國の沼河比賣をよはひに幸行し時に、沼河比賣の御歌に、多久豆怒能斯路岐多陀牟岐阿和由岐能和加夜流牟泥遠曾陀多岐多岐麻那賀理麻多麻傳多麻傳佐斯麻岐毛毛那賀爾伊波那佐牟遠云々(記傳十一)(史傳十九)とあるを見れば、此二柱の神の御形の人類の如くにおはし坐ししことも明かなるが如し。又八千矛神が出雲より倭國に上り坐さんとし給ひて、片御手は御馬の鞍に繋げ、片御足は其御笠に踏み入れ給ひしに、須勢理毘賣命が大御酒を取らして立依り指擧げて、歌ひ給ひ、歌はれ給ひて、互に飲み交はし給ひし段の如きは(記傳十一)(史傳三)是等神々の人類の如き御形なりしことの觀念を最も明かに爲すものならん。彼の少那毘古那神の如きは實に短小なる御身體の神にておはし坐ししと雖も、其御形に至りては人類の如くにおはし坐ししこと疑ひなきが如し。而して其の御祖命の神産巢日神は最も初發に出來給ひし神なれども、矢張り人類の如き御形にて御口も

御手御指杯も具へ給へし神にておはし坐しと見え、種々のことを云ひ給ひし而已ならず、少名毘古那神は自我手俣久岐斯子也(記傳十)(史傳八)と曰ひしなり。建御雷神も人の形の神にておはし坐しと坐しは此の二柱の神の御力競への段に由て明なり(記傳二十四)(史傳二十)。

櫛八玉神が、栲繩之千尋繩打延爲釣海人大口之尾翼鱸佐和佐和邇控依騰而云々(記傳五十四)のと禰白をされしことに由て見るに、神代の當時に於て早く既に漁獵を専務とせる海人杯ありしこと明なるが、當時は尙神代のことなりしが故に、當時の海人等は是も亦神なりしこと明なり、而して此の海人なりし神達は固より人類社會の海人と同一の御形なりしならん。

本邦の神は概して人類の如き御形にておはし坐しとが、神代の當時に於て一つの神が他の神を稱して人と云ひ給ひしことさへありしなり、即ち速須佐之男命が所避退而降出雲國之肥河上在鳥髮地坐しと、此時嘗從其河流下、於是須佐之男命以爲人有其河上(史傳十六)(記傳九)(書紀一)と、而して箸を用ひられし程の神ならば、其御手たり御指たり固より人類の手指の如きものにておはし坐しとならん。又須佐之男命が箸の流れ來れるを見給ひて必ず其河上に人あらんと所定を下し給

へることに依て察するに、箸を用ふことは當時既に神の社會に於て一般に行はれし處なりと思はるゝなり。

火遠理命が海神の御門の傍の井の上の湯津香木の上に登りて坐しと、水酌まむ爲めに出來りし海神の御女豐玉毘賣の從婢井に光あるによりて仰き見たれば麗壯夫ありたり、甚だ異奇と思ひて豐玉毘賣命に有人坐我井上香木之上云々と告げ申しと、かば豐玉毘賣命出見乃見感目合而白其父曰吾門有麗人(記傳十)(書紀二)。又火照命爲汝命之晝夜守護人而仕奉(記傳十七)(書紀四)と白し給ひて御自身をば人と稱し給ひしなり。是等の例に由て觀るに、神代の當時に於て神達が我をば人なりと認められて、他をも我をも人と稱し給ひし場合のありしことは疑なきことなるが、其當時人にておはし坐しと神達の御形は後世人代の人の形と異なり給ふ所は少くもおはし坐さざりしが如し。

由是觀之に、本邦人の崇拜する高等の神は極最初のものよりして、人でおはし坐して、其大體の御形全く後世の人類と同一におはし坐しと而已ならず、御手足御五官御髮御鬚御指御爪御生殖器御臍に至るまで(書紀一)都て外部の御構造より内部の御構造も全く人類の如くにおはし坐し、特に其御言葉御動措に由て間接に知り得

べき而已ならず、又多數神達の御身體に關する事項及び往々其御自在に徴するに、直接にも亦明白に知り得べき所なり、而して斯く其身體の御結構の全く人類の如くにておはし坐し、上は其生理上の御性質も必ず人類の如くにおはし坐し、ならんと思はるゝは當然のことならんが、數多神達に關する生理的事項に徴して察するに、本邦人の崇拜する神々は生理上に於ても全く人類の如くにおはし坐し、こと疑ひなきが如し、其の證明は大略次の如し。

### 神の生理的御性質

本邦人の崇拜する高等なる神等の御身體の御構造は、外部と内部とを問はず全く後世人代に於ける人類の如くにおはし坐し、ことは既に前段に於て證明せし如くなるが、斯く神等の解剖的御性質の人類の如くにおはし坐し、結果として、其生理的御性質の如きも全く人類と同一におはし坐し、と思はるゝなり、其證明は大略次の如し。

#### (第一)呼吸及び飲食の必要

神が人類の如く呼吸を要し給ひしか否ざりしかと云ふ問題に關しては、確たる證據は無き如くなれども、茲に稍參考とも成るべきは書紀一書に「伊弉諾尊與伊弉册

尊共生大八州國、然後伊弉諾尊曰、我所生之國、唯有朝霧而薰滿之哉、乃吹撥之氣化爲神、號曰級長戶邊命、亦曰級長津彥命、是風神也。」(書紀一)とあることなり、即ち吹撥之氣とは御呼吸の作用として吹き撥ひ給ひし御氣なり、と思はるゝなり、又神が人類の如くに言語を使用し給ひしことに由て察するも、人類の如くに呼吸を爲し給ひしことは疑ひ無きが如し、次に御飲食のことに至ては、速須佐之男命が高天原に於て「離天照大御神之營、田之阿理其溝給ひしこと、由て觀るに。」(記傳八) (史傳九) (書紀七) (高天原に於てさへも食物の必要ありて、穀類を作らしめ給ひしと思はるゝなり、實に既に大嘗開食殿杯もありしなり、速須佐之男命の狼藉を觀給ひて、天照大御神が「如尿醉而吐散登許曾云々」と告げ給ひしは、當時既に神々の御間に酒杯もありて、而已ならず神も人類同様に過度に之を飲み給ふ時は、嘔吐杯し給ふことのおはし坐し、ことを證するに足らん、(記傳八) (史傳九) (書紀七) (高天原より神夜良比やはれ給ひし時に、大氣津比賣神に食物を乞ひ給ひしに、大氣津比賣が種々作り具へて進られしことに由て觀るに、當時既に食物ありし而已ならず種々の料理法杯もありて、之を擔當せらるゝ神さへおはし坐し、ことを知り得べし、(記傳九) (速須佐之男命が肥の河の河上より箸の流れ來れるを觀給ひしこ

とに由て觀給ひて、必ず河上に人こそ居らめと思し召されて尋ね上り給ひしこと  
に由て觀るに、神が物を食し給ひし而已ならず既に箸をさへ用ひ給ひしこと明か  
なり(記傳九の十傳十六)當時既に酒のありしことは、前陳せし(記傳九の十傳十六)醉而吐散云々との天照  
大御神の御語に由て明かなるが、速須佐之男命が足名椎をして入鹽折之酒を醸さ  
しめ、之を八俣大蛇に飲ましめ、飲み酔ひて伏し寝さしめ給ひしこと、に由て觀るに、  
當時既に酒の行はれし而已ならず其酒は人畜を酔はしむる如き物なりしことは  
彌々疑ひなきことなり(記傳九の十傳十六)又八千矛神が將に倭國に上ら  
ん爲めに立ち出でんとし給ひし時、其嫡后須勢理毘賣命が大御酒杯を取らして立  
ち依り指擧げて、御互に歌ひて蓋結ひし給ひしこと、に由て觀るに、當時既に別れの  
酒杯誓ひの酒杯杯云ふことまでも行はれしこと明かなり(記傳九の十傳十六)當時御饌とし  
て神に魚を獻るの習慣ありしことは、櫛八玉神が大國主神に天之眞魚昨獻らんと  
白されしことにて知らるゝなり(記傳九の十傳十六)海神が火遠理命を招じて御饌  
を爲し給ひしこと、に由て觀るに、神々の御間にも御饗應杯云ふことさへに行はれ  
しと思はるゝなり(記傳九の十傳十六)されば神は人類の如くに酒を飲み、食物を喰ひ給ひし  
が、又人類の如くに水をも要し給ひしが如し、而して水は人類社會に於けるが如く

井に由て之を得給ひしことは、天忍石の長井(史傳二十八)及海神の御門の傍の井杯  
の例にて疑なきことなり(記傳九の十傳十六)而して豐玉毘賣の從婢が器を以て水  
を酌まん爲めに出で來りし模様は、全く尋常人類社會の事の如くにてありしなら  
んと想像せらるゝなり。且つ書紀一書に、掘天眞名井三處云々(書紀一の二十五)とあるを以  
て觀るに、神代の井も神が故らに掘り給ひしものと思はるゝなり。

(第二) 尿管多具理派大便小便の事

既に飲食のことある者に大便小便の事あるは固より當然の事ならんが、本邦人の  
崇拜する神々には飲食の事の人類の如くおはし坐し、而已ならず大便小便等の  
生理的作用も亦人類の如くにおはし坐し、が如し。伊邪那美命が火之迦具土神を  
生みますに因り美蕃登見彘て病臥在し時に波邇夜須毘古神及び波邇夜須毘賣神  
は尿に成り坐し彌都波能賣神和久産巢日神は尿に成り坐し、事(記傳五の十一傳四)速  
須佐之男命が天照大御神の大伴開食殿に尿管散し給ひしこと(記傳八の十一傳九)  
(書紀一の二十七)等に由て觀るに、初發の神々よりして御大便御小便杯のことも尋常人類  
の如くにおはし坐し、こと疑ひなし。又金山毘古神及び金山毘賣神が伊邪那美命  
の多具理に成り坐し、こと(記傳五の十一傳四)及び速須佐之男命が天照大御神の大伴

開食す殿に尿麻理散し給ひし時に、天照大御神が如尿醉而吐散登許會(記傳八)史傳(一)書紀(一)の(二十七)と告り給ひしに由て觀るに、初發の神々よりして嘔吐杯のこさへおはし坐ししこと明なり。而して神の御嘔吐の原因の如きも人類の嘔吐の原因と同一にして、或は疾病の爲めに或は過度飲酒等の如き原因の爲めにありしなり。又伊邪那美命が神遊り坐ししを憂ひて、伊邪那岐命の哭き給ふ時に御涙に泣澤女神成り坐ししこと(記傳五)史傳(四)書紀(一)の(六十三)又速須佐之男命が御妣の國根之堅洲國に罷むと欲ほして、青山如枯山泣枯河海者悉泣乾と云ふ計りに泣き給ひしこと(記傳七)史傳(七)書紀(一)及び八千矛神が須世理毘賣に、那賀那加佐麻久阿佐阿米能佐疑理邇多多牟叙と曰ひしこと(記傳三十一)史傳(三)等の事實は、神も人類も同様に御涙を流し給ふことのおはし坐しし事を證するに足らん。

第三 光明の必要

人類闇黒の場所に於ては物を視ること能はず、物を視るには日光若くは秉炬等人造的光明の助を借らすんばあらざることなるが、我邦人の信仰する神々は此點に於ても亦人類と同様に於ておはされしなり。黄泉國に於て伊邪那美命の還へり入り坐せる殿の内に伊邪那岐命の入り見坐す時には、即ち御美豆良に刺せる湯津津間

櫛の男柱一つ取り闕きて一つ火燭し給ひしなり(記傳六)史傳(五)書紀(一)書紀(一)に據れば彦火火出見尊が豊玉姫の産屋の内にて御子産み給ふ様を窺見給ひし時にも櫛を以て火を燃し給ひしなり(書紀二)されば神と雖も闇黒の中に於て物を見給ふことは叶はせられざりしと思はるゝなり。天照大御神が天石屋に隠れ給ひし時に、晝夜の別無くなり、常闇となりし爲めに非常の騷動を生せしも、畢竟神々にも人類の如くに光明の御必要なりし故に外ならざるならん。

第四 睡眠の必要

我邦人の崇拜する神々には、人類の如くに飲食呼吸光明等の御必要ありしことは、以上陳述せし如くなりしが、睡眠の如きも亦御必要の一箇條なりしと思はるゝなり。速須佐之男命が寢坐しし時に乗じて、大穴牟遲神が其の大神の御髮を握りて其室の椽毎に結び著けて、五百引石を其室の戸に取り塞へて、其の妻須世理毘賣を負ひて種々の寶物を取り持たして逃げ出で坐ししが如きは(記傳十)史傳(十七)神も眠り給ふことのおはし坐ししことを證するに足らん。而して速須佐之男命が酒を飲ましめて、八俣大蛇を寢さしめ給ひしことに由て觀るに、特り神々に寢給ふことのおはし坐しし而已ならず、寢る「眠る」杯の觀念は既に判然と神々の御心中に存

し居りて、動物の如き迄が眠むることあるを熟認知し居給ひしと見ゆるなり(九傳の二十)史傳三十五(書紀一)。且又速須佐之男命が大穴牟遲神をば最初には蛇の室(九傳の三十九)に給ひしが、須勢理毘賣の授け給ひし蛇の比禮(九傳の四十)の助にて無難におはしよかば、亦來日夜者入吳公與峰室(三十一傳十)の(三十一傳十七)のことに由て考ふるに、蛇の室に寢坐しよは前日の晝にはあらずして夜なりこと思はるゝなり。又沼河日賣の御歌に阿遠夜麻邇比賀迦久良婆云々、毛那賀邇伊波那佐牟遠云々(二十一傳十一)の(五十九傳五)とあり、火遠理命が海神の國に三年住し給ひし後、一夜大きな歎き一つし給ひしが如きは豊玉毘賣と御枕を竝べて寢坐しよ際にておはし坐しよと思はるゝなり(三十七傳)。されば神々は人類の如くに寢坐しよ而已ならず、其寢坐しよは人類の如くに夜中に於てのことにておはされしは疑ひなきが如し。

(第五)生死及び負傷等

第一の三柱の神即ち天之御中主神、高皇產巢日神、神產巢日神に至りては、一説に依れば成り坐せるには非らずして、始め無く御坐しよ神なりとのことなるが(五傳一)の(二)。其以下の神々に至りては皆成り坐せる神にして、且其成り坐せるは實體に因りて成り坐せるなり。宇麻志阿斯訶備比古遲神、天之常立神、國之常立神、豐雲野神

等の如く他の神の生み給ひし神に非らざる神と雖も、葦牙(葦牙)の如き物、浮膏(浮膏)の如き物に因りて生り坐せる杯都(杯都)て實體に因りて生り坐せるなり(九傳一)の(十)、(十三傳一)の(四)、(書紀一)の(二)。而して伊邪那岐神、伊邪那美神よりしての神も、御子を生み給ふ業をし給ひて、神の成り坐せるは他の神の生み坐せるに因りて、生り坐せるにてありしなり。

實體的制限數種

神も人類の如く實體的制限の下に存在し給ひしことは、既に前述せし所に於て略々明白ならんが、其證據の尙ほ擧ぐべきものは、第一には神も空間に居給ひ、若くは足を踏み給ふ所もなしに空間を經過し給ふことは出來能はざりしと見へて、伊邪那岐命、伊邪那美命が沼矛を指し下して晝き給ひし時には、支ふる處なき空間に居給ひしに非らずして、天の浮橋に立ち給ひしなり(四傳一)の(十五)、(書紀一)の(四)。實に本居に依れば、神々が天より降り又天に昇り給ひしは天の浮橋を通ひ給ひしなり(八傳四)の(二)、(十五傳二)。天照大御神の命以て、豐葦原之千秋之長五百秋之水穗國は我御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の所知國と言因し給ひて、天降し給ひし時に、天忍穗耳命は天の浮橋に立たし給ひたり(三傳十)の(一)、(九傳一)の(九)、(三傳三)。天津日子番能邇邇藝命は天降の時、天の浮橋より浮清在平處に立たし給ひしことなり(五傳二)。古事記には、於天浮橋宇



岐士摩理蘇理多多斯豆云々ありて而して(記傳十五)(史傳二十七)篤胤に依れば天  
 浮橋は天と地との間に掛れる物には非ず、また天と地と連ける帯にも非ず、神の御  
 量もて作り出給ひて事ある節々それに乗りて大虚空を乗躡たまふ物にて、此世な  
 る物にては海河を乗る船に等しき物なり、故是の一名を天之磐船とも云へり云  
 々(史傳二十)好しや天の浮橋は橋の如き物に非らずして船の如き物なりしとす  
 るも、神が斯く實體的の物に依りて空中を通ひ給ひし事の事實は、同じく存する所  
 なり、而して伊邪那岐命、伊邪那美命が不良ざる御子を生み給ひしかば、天神の御所  
 に白すべしとて参上り給ひし時にも、天の浮橋に依りて昇り給ひしならん(記傳四の  
 一)(史傳三)速須佐之男命が天照大神に請じて罷りなむと申し給ひて、乃ち天に参上り  
 まし、時にも、天浮橋に依りて昇り給ひしならん(記傳七の)(史傳七の)(書紀二十)其外  
 天菩比神、天若日子、天若日子の父及び父の妻子等の天降りも皆天浮橋に依れるこ  
 とならん(記傳十一)(史傳二)。  
 御足を支へ給ふ所少しも無しに空中を通ひ給ふよりは、水の如き物と雖も之を踏  
 みて往き給ふが、神にも自然に合ひしことにて御坐しと見へて、御毛沼命は波の  
 穂を跳みて常世國に渡り坐しとたり(記傳十七)斯く神が波の穂を跳み給ひしこ

とも御坐しと雖も、然れども海河を往き給ふには船に乗り給ふが常にて御坐し  
 とならん、少名毘古那神は天之羅摩船に乗り給ひたり(記傳十一)(史傳十一)大國主神の和  
 魂の海を照して依り來給へるも、御身を以て浮び來ませるか否らざれば必ず船に  
 乗りて來り給ひしにてありしならん(書紀一)(記傳十六)(史傳十九)又神が取魚し給  
 ふにも人類の如くに船に乗り給ひしことは八重事代主神が御船を踏み傾け給ひ  
 しこと(記傳十)(史傳二十二)(書紀三)又其時熊野諸子船を以て使者稻背脛を載せて遣  
 り給ひしこともあり(書紀二)而して水路を往き給ふ時には船に非ざるも、何か適當  
 なる浮き物を要し給ひしことは、稻羽の素菟は神なりしと雖も、淡岐島より稻羽に  
 渡る爲めには鰐を欺きて列伏さして其上を踏みて渡り給ひしことにて知らる  
 となり(記傳十)(史傳二十)書紀一書に依るに、豐玉毘賣は海神の國より大龜に馭りて來  
 り給ひたり、而して毘賣の御本體は八尋の大鰐にて御坐しとが故に、若し御本體の  
 儘にて來り給ひしならば、固より龜杯に馭り來たり給ふには及び給はざりしなら  
 んが、人類的の神に化り居らるゝ中は矢張り他の神と同一の制限を受け給ひしと  
 思はるゝなり(書紀三)火遠理命は鹽椎神の造りし無間勝間の小船に入りて海神  
 の國に往き給ひしが(記傳十)(書紀三)還へり給ふ時には鰐に乗り給ひしなり(記傳七)

十の三(書紀二二)亦櫛八玉神は鶴に化りて海の底に入り給はん由を白されしが、鶴に化り給ふことの出来給ふ神ならば、本来の御形の儘にて海の底に入り給ふことも出来給はんと思はれんが、神と雖も其れ相當の形になり給はずしては、海の底に入り給ふこと叶ひ給はざりし如き制限を受け給ひしと見ゆるなり(記傳十四(史傳八の四)の八)。

神の受け給ひし實體的制限の一は、飲食を要し給ひしことなり。速須佐之男命高天原に於て、離天照大御神之營田之阿埋其溝給ひしことに依て見るに(記傳八(史傳十)二十七)の(高天原に於てさへ食物の必要の爲めに穀類を作らしめ給ひしとおもはるゝなり。されば大嘗間食殿もありとなり(上)速須佐之男命の痕藉を見給ひて、天照大御神が「如尿醉而吐散登許付云々」と告り給ひしは、當時既に神々の間にも酒杯ありし而已ならず、神も時としては酒を飲み過ごして嘔吐杯し給ふこと御坐ししことを證するに足らん(記傳八(史傳九)の十三)速須佐之男命は八百萬神の爲めに高天原より神夜良比に遭ひ給ひし時に、大氣津比賣神に食物を乞ひ給ひしに、大氣津比賣が種々作り具へて進られしことに依て見るに、當時既に食物ありし而已ならず、亦種々料理の仕方杯もありて之を擔任せらるゝ神さへも御坐しとなり(記傳九(史傳七)の七)速須佐之

男命が肥の河の河上より箸の流れ來れるを見給ひて、必ず河上に人こそ居らめと思召されて尋ね上り給ひしことに依て見るに、神も既に食物を食ひ給ひし而已ならず、既に箸をさへ用ひ給ひしこと明なり(記傳九(史傳十六)の十五)當時既に酒ありしことは前陳醉而吐散云々の天照大御神の御語にて明なるが、速須佐之男命が足名稚をして八鹽折之酒を醸さしめ、之を八俣大蛇に飲ましめて、飲酔ひて、伏寝さしめ給ひしことにて彌々明なり(記傳九(史傳三十三)の三十五)八千矛神が將に倭國に上らん爲めに立出でんとし給ひし時に、其嫡后須勢理毘賣命が大御酒杯を取らして、立依り指舉げて、御互に歌ひ給ひて蓋結し給ひしことに依て見るに、當時神々の間に於て酒を飲み給ひし而已ならず、亦酒を飲み交して誓を爲し給ふ杯のこと迄で既に行はれしこと明なり(記傳十五(史傳四十一)の四十一)當時既に御饌として神に魚を獻るの習慣ありしことは櫛八玉神が大國主神に天之眞魚昨獻らんと白されしことにて知らるゝなり(記傳十四(史傳九)の九)海神が火遠理命を招じて御饗を爲し給ひしことに依て見るに、神々の間にも既に饗應杯云ふことさへありしと思はるゝなり(記傳二十七(史傳五十一)の五十一)斯の如く神も人類の如くに食物を喰ひ給ひし、亦水を要し給ひしことも人類と同様に御坐ししが如し、而して人類社會の如く當時より井さへ早く在りしことは

天忍石の長井(史傳二十五)及び海神の御門の井のこと杯にて疑ひなし(記傳十七)、(紀傳十三)而して豊玉毘賣の從婢が器を以て水を酌まん爲めに出て來り坐し、(紀傳十三)は全く尋常人類社會の如くにてありしと想像せらるゝなり。且つ書紀一書に、(天眞名井三處云々)(書紀一)とあるを以て見るに、神代既に井ありし而已ならず、故らに掘りたる井さへありしこと明なり。亦神も人類の如くに光明の必要なりしことは、天照大御神が天石屋に隠れ給ひし時に起りたる騒動に依て察せらるべきなり。亦神は人類と同様に眠りを要し給ひしなり。神も人類同様御寢坐し、者なる一つの證據は、速須佐之男命の御寢坐し、を窺ひて大穴牟遲神が其須世理毘賣を負ひ種々の寶を取り持ちて逃げ出で給ひし事件に徴して明なり(記傳十四)、(史傳十七)而して速須佐之男命が八俣大蛇に酒を飲まして寢さしめ給ひしことに依て考ふるに、特り神に寢給ふことの御坐し、而已ならず、(記傳九)「眠る」杯の觀念も既に確かに御坐して動物の眠ること迄を能く知り給ひしと思はるゝなり(記傳九)、(史傳十五)、(紀傳十五)亦伊邪那美命が「美菴登見灸而病臥在」時、或は多具理に生りませる神あり、或は尿に生りませる神あり、尿になりませる神ありしことに依て見るに、神にも人類同様に嘔吐及尿尿し給ふ杯の御坐し、なり(記傳五)、(史傳四)、(一)神に尿及び嘔吐杯の

この御坐し、この尙一つの證據は、天照大御神が「如尿醉而吐散登許會云々」と告り給ひしことなり(記傳八)、(史傳九)、(書紀一)、亦神の御身も人類の身體の如くに死せ給ふ時は腐爛せし者なることは伊邪那美命の御身に起りしことにて明なり(記傳六)、(史傳五)、(書紀一)亦神が人類の如くに哭き給ひしことは伊邪那岐命、速須佐之男命、手名稚、足名稚、稻羽の素菴、下照比賣、天津國玉神及び其妻子、火遠理命等の泣き給ひしことにて明なるが、神の泣き給ふ時にも、人類の泣く時の如くに御涙を落し給ひしことは、伊邪那岐命が御涙に泣澤女神の成りませること(記傳五)、(史傳四)、(書紀二)及速須佐之男命の泣き給ふ状は、青山を枯山なす泣からし、河海は悉に泣乾しき等のことにて疑ひなき而已ならず、神の御涙は實に非常なる分量なりしこと知らるゝなり(記傳七)、(史傳七)、(書紀七)八千矛神が須世理毘賣に「那賀那加佐麻久阿佐阿米能佐疑理邇多牟牟叙」と曰ひしが如きも亦一證なりと云ふべし(記傳三十一)、(史傳三十)。

黄泉國も實體的

本居杯の説に依れば、人死する時は「此身はなきがらとなりて、しる人顯國に留在れば、夜見國には魂乃往なるへし」(記傳六)とすることなるが、伊邪那岐命が往き給ひし時の種々の事共に照して考ふるに、黄泉國も顯國の副體の如きものにて、實體的のもの

のなりしと思はるゝなり。例へば伊邪那美命が殿騰戸より出迎へまじふこと、及び其殿内に還へりなりまじふこと等に依て、黄泉國にも家屋杯ありしこと明なり(傳六の三十四)。伊邪那美命が悔哉不速來吾者爲黄泉戸喫云々と曰ひし給ひしに依れば、黄泉國にも食物を煮炊する窠杯もありしこと見ゆるなり(傳一の三十五)。(傳二の三十一)。黄泉國に於ても光明の助なくしては物を見ること能はざりしこと見えて、伊邪那岐命は火燭して殿内に入り給ひたり(傳六の三十五)。而して黄泉國の光明も顯國の光明同一のものなりしこと見えて、伊邪那岐命は刺させる湯津津間櫛の男柱一箇を取り闕きて火を燭し給ひたり(傳六の三十五)。(傳二の三十三)。黄泉國に於ても寢息み給ふ必要御坐ししこと見えて、伊邪那美命は雖然吾當寢息請勿視之と曰ひたり(傳一の十三)。黄泉國に往き給ひし魂も顯國に於ける屍の如く腐爛し給ふこと御坐ししこと見えて、伊邪那美命の御身に膿沸き蛆流り居りたり(傳六の三十五)。之に由て蛆杯迄黄泉國にもありしことを知るに足らん。黄泉國の神も顯國の神同様に物を食ひ給ひし而已ならず、中々意地きたなき質の者も御坐ししこと見えて、豫母都志許賣は伊邪那岐命を追ひ給ふ際に、蒲の子を見れば乃ち是を撫ひ食み、箒を見れば乃亦是を抜き食み給ひたり(傳六の十三)。黄泉國に於て伊邪那岐命が逃げ行き

給ふには、御足を以て走り給ひし而已ならず、黄泉國の神々が追ひ給ふにも亦御足を以て走り給ひしと思はるゝなり。亦顯國の劍は黄泉國の神を防くに有効なりしこと見えて、伊邪那岐命は黄泉國に對して御佩せる十拳の劍を抜きて打振り給ひたり(傳六の十三)。されば黄泉國に於ての争鬪も全く實體的争鬪にてありしなり。而して亦草木及び菓物杯も顯國の如くに在りしこと見えて、伊邪那岐命が黄泉比良坂の坂本に在りたる桃の子を取りて敵を撃ち給ひしことなり(傳六の十八)。或は云ふ伊邪那岐命の大樹に向ひて放尿し給ひしに巨川に化成、泉津日狹女其水を渡らんことせし間に伊邪那岐命は已に泉津平坂に至り給ひしこと(傳一の十三)。されば黄泉國の神も顯國の人類の如くに巨川を渡り給ふことは困難のことなりしこと明なり。亦神も否神の魂も實體の爲めに遮ぎられ給ひしこと、この御坐ししことは、伊邪那岐命が千引石を以て黄泉比良坂の坂路を塞ぎて伊邪那美命を遮ぎり給ひしことに依て證せらるゝなり(傳六の十四)。

大國主神が根堅洲國に參り給ひし時の種々の事共に徴するも、根堅洲國に於ても萬事實體的なりしことは疑なき所なり。第一には須勢理毘賣は根堅洲國の神なりしこと雖も、顯國の神なる大國主神が根堅洲國に於て相婚し給ひし而已ならず、顯國

へ運ひ來り給ひても實存し給ひしなり、都ての事情より案するに、須勢理毘賣は顯國の神同様肉體實在の神にて御坐しと思はるゝなり、又根堅洲國にも蛇あり、吳公あり、鼠あり、將た蜂及び鼠迄在りしが、是等も恐らくは須勢理毘賣同様肉體實在して顯國のものと同様のものなりしならん(三十一傳十の)(三十七傳十の)亦根堅洲國の火は顯國の火と同様に顯國の神の御身を毀傷し進らする力ありしものなりしことは、大國主神が鼠の助に依て辛じて火難をのがれ給ひしことにて明なり(三十三傳十の)(四十七傳十の)牟久木の實杯ありしことに依て見るに、草木等も顯國の如くに在りしと思はるゝなり(四十四傳十の)(四十七傳十の)大國主神が速須佐之男命の生大刀生弓矢天詔琴を取持ちて逃げ來り給ひしことに依て考ふるに、是等のものは何れも顯國に於けると同様に實存し得べき實體物にてありしこと疑なし(四十四傳十の)(四十九傳十の)實に大國主神が八十神を退治し給ひしは此の大刀此の弓矢に依り給ひしなり(四十六傳十の)(六十七傳十の)

### 神の御精神

本邦人の崇拜する神々は有形的のものにておはし坐しゝ而已ならず、高等なる神々の御形は皆人類の形の如くに御坐しゝことは、既に前段に於て證明せし如くな

るが、其御精神の如きも亦種々の點に於て大いに人類の精神に似給ひし處頗る多くおはしまして、其御知能と云ひ、御情緒と云ひ、御道德と云ひ、往々後世人類の知能情緒道德と少しも異なる處おはし坐さざりし如くに見える場合尠ならず、其事情は大略次に述ふる如くにてありしなり。

### 神の情緒

歡喜の情

歡喜の情は神にも人類同様に御坐しゝが如し。其尤も古き一例證伊邪那岐命、伊邪那美命が天の御柱を行廻逢て美斗能麻具波比せむと給ひし時に、伊邪那岐命が「阿那邇夜志愛袁登賣袁」と言ひし時、此の二柱の神の御心情にてありしならん(四傳十)(五十一傳十)當時此の女男二神の御心に感じ給ひし御情は、後世人類社會の少年少女が同様の場合に於て感ずる處の感歎の情と、全く同一のものにて御坐しゝと思はるゝなり。伊邪那岐命は天照大御神、月讀神、建速須佐之男命の三柱の神を生み給ひし時、太く歡喜して「吾者生生子而於生終得三貴子」と詔ひたり(七傳七)(七傳七)の八十九) 儲又人は喜びあれば顔に咲みを表はすが常なるが、本邦の神は或る時は普通人類の如くに御喜ひの情の起り給ひし而已ならず、其場合には御顔に咲みを表はし給ひしと見えて、沼河比賣は御歌の中に「阿佐比能惠美佐迦延岐互杯

云ふ形容をば用ひ給ひしなり(記傳十の(史傳十九)天津日高日子番能邇邇藝能命が木之花之佐久夜毘賣に目合ひせんとし給ひ其父大山津見神に乞ひに遣はし給ひし時に大山津見神は太く歡喜ひ給ひしと(記傳十六)彼の海神の女豐玉毘賣命が御門の傍の井の樹の上に麗壯夫ありと聞きて出見乃感目合し給ひし時には胸中に御喜ひの情は滿ちし事と思はるゝなり(記傳十七)又海神が御門に麗人ありと聞きて自ら出見給ひて天津日高之御子なることを知り給ひし時に非常に御喜びありしことならん。さればにや、やがて内に率入れ奉りて、厚く御饗應ありし而已ならず、其女豐玉毘賣を婚せ給ひしなり(記傳二十七)(日本書紀二十四)是等の事實に由て察するに、人類の心に歡喜の情を催さしむる如き事情の爲めには、神々も人類同様に歡喜の情を感じ給ひしと見ゆるなり。

忿怒の情

本邦人の崇拜する神々は、普通人類の心に忿怒の情を起す如き場合に於ては、矢張同様に忿怒の情を感じ給ひしと思はるゝなり。伊邪那美命が火神を生せるに因て遂に神邇坐し、かば、伊邪那岐命は「愛我那邇妹命乎謂易子之一木乎非常に御愁傷あらせられしが、遂に御佩せる十拳の劔を抜きて其子迦具土神の頸を斬り給ひたり。是れ即ち神が人類の如くに忿怒の情を表はし給ひし最も早き一例なり(記傳五、

六十三)(史傳四の一、五)(日本書紀一の(十九、五)伊邪那岐命が其妹伊邪那美命を相見まく欲して、黄泉國に追往坐し、時に伊邪那美命が「莫我視」と白して、其殿内に還へり入り坐せる間の甚久くて待兼給ひしかば、火を燭して入り見給ひしに、伊邪那美命は「宇士多加禮斗呂呂岐豆御坐し、が、辱を見せ給ひしなりとて大いに怒り、豫母都志許賣をして追はしめ、又八雷神に千五百の黄泉軍を副へて追はしめられし而已ならず、御自身にも黄泉比良坂まで追ひ來まじ、が、千引石の爲めに途を遮きられ給ひしかば、愛我那勢命爲如此者汝國之人草一日絞殺千頭」と言をし給ひき(記傳六、七、二七)(史傳五の三十四、三十五、三)(日本書紀下)此時伊邪那美命の御怒の如きは實に熾なる神怒にてありしなり。人類には忿怒の餘りに仇を爲さん杯と誓言して人をおびやかす如き往々あることなるが、此時伊邪那美命の御おびやかしの如きは即ち其元祖とも云ふべき者なり。伊邪那岐命は建速須佐之男命に詔ひて、汝命者所知海原矣と事依さし給ひしに、御子を生じて生みの終に三貴子を得給ひしことを太く歡ばして、即ち天照大御神は高天原を知らせ、月讀命は夜之食國を知らせ、建速須佐之男命は海原を知らせと、事依さし給ひければ、各々依さし賜へる命のまゝに知しめす中に、速須佐之男命は御妣の國根之堅洲國に罷られんと欲して、命し給へる國を

知らざりしかば、伊邪那岐命は太く忿怒て神夜良比爾夜良比賜ひたり(記傳七の二)  
(二十七以下)日本書紀一。速須佐之男命が天に參上坐して種々暴行を働き給ひしが爲めに、天照大御神は遂に天石屋戸を閉て刺隠ましうが、其何故に斯く隠れ坐しうかと云ふことに就ては、古事記には「見畏」とあれども日本書紀には「發慍」とあり(記傳八の二)日本書紀一。蓋し天照大御神が物具着けて速須佐之男命を待ち給ひし時の御有様及ひ此の神の他の神に勝りて貴く坐しう事情等よりして考ふるに、此時の神隱は見畏み給ひしには非らずして、發慍坐しう故なりしならん。阿遲志貴高日子根神と天若日子との容姿甚能似たりければ、天若日子の父及ひ父の妻は、弔ひに來ませる阿遲志貴高日子根神をば、死せし我子なりと誤認せしに、阿遲志貴高日子根神は太く怒りて、十掬劍を抜きて其喪屋を切り、伏せ足以て蹴離遣り給ひき而して怒るときに面の火照るは人類は常のことなるが、此神は後世人類の如くに此時面火照りて飛去り給ひしなり(記傳五十三)史傳二十一。是に由て之を觀るに神は人類の如くに忿怒の情の起り坐しう而已ならず、斯る感情發表の點に於てまでも、人類に好く似給ひしと思はるゝなり。以上の例に依て考ふるに、本邦の神は慍かに人類の如くに忿怒の情は發し給ひしこと往々御坐されしことありしと思はるゝなり。

愁傷悲歎

愁傷悲歎の情も、本邦人の崇拜する神々は、後世の人類と同様に之を具へ給ひしこと少しも疑ひなきが如し。其例證を擧げんに、先づ第一には伊邪那美命が火神を生みて、遂に隠れ給ひしかば、伊邪那岐命は愛我那邇妹命乎謂易子之一木乎、乃匍匐御枕方匍匐御足方而哭給ひて御涙にむせび給ひしことなり(記傳五の六十三)史傳四の(日本書紀一の十一)。次には速須佐之男命は隠れ給ひし御母神を慕ひ、父神の依さし給へる國を知らさずして、根之堅洲國に罷らんと欲はして、青山如枯山泣枯、河海者悉泣乾し、坏云ふ程に泣き悲み給ひしことなり(記傳七の二十五以下)。又速須佐之男命が出雲國の肥の河上より箸の流れ下るを見て、河上へ尋ね上り給ひしに、老夫與老女二人在而童女置中而泣居たり、而して老夫は足名稚と謂ひ、老女は手名稚と謂ひ、女は櫛名田比賣と謂ひて、何れも國神にて御坐しうなり(記傳九の十六)史傳十五の(書紀一の三十五)。又大穴牟遲神が大石の赤く焼けたるを赤猪なりと思ひ、其の石に焼き著かれて死給てしかば、御祖命刺國若比賣は哭き悲み給ひしことなり(記傳十の十四)史傳十六の(書紀一の八十八)。又八十神が「切伏大樹茹矢打立其木令入其中、即打離其冰目矢而大穴牟遲神をば拷殺しうかば亦其御祖命が哭き給ひたり(記傳十の二十四)史傳二十七。古今東西を論せず女子は兎角泣かねばならぬ者なるが、神代神々の間にも既に斯く定まり居りたりと見

えて、八千矛神は須勢理比賣命に、伊弉古夜能伊毛能美許等牟良登理能賀牟禮伊那婆比氣登理能賀比氣伊那婆那迦士登波那波伊布登母夜麻登能比登母登須岐宇那加夫斯那賀那賀佐麻久阿佐阿米能佐疑理邇多多牟叙と云ひ給ひたり(記傳九、十、三)。されは神と雖とも女性の者は人類社會の女子同様に種々の理由の爲めに泣き給ふことの御坐しとなりんが、就中御夫に永く別れ給ふ折杯に際して、項を垂れて最と哀氣に泣き給ひし様杯は全く人類の如くにて御坐しと思はるゝなり。蓋し此時須勢理比賣が將に御夫に棄てられんとし給ふに當ての御歎の如きは本邦女子の夫に棄らるゝ者の悲歎の元祖にして、實に彼の後世熾に起りし、哀れ杯云ふことは、此時代神々の御間にも既に存せし所なるが如し。人類社會夫婦の情愛として、夫が俄に悲命の死を遂ぐる杯の不幸に遭遇することあらんには、其妻は前後不覺に聲を限りに慟哭するは、固より當然のことなるが、神の社會に於ても斯ることは全く人類社會と同一なりと見えて、天若日子が圖らすも非命の死を遂げられし際、御妻下照比賣の御哭き聲は天にまで到りしと云ふ、御悲歎の程察せらるゝなり(記傳四十三、四十四)。而して、在天矢若日子之父天津國玉神及其妻子聞而降來哭悲給ひしとなり。次に人類の如くに泣き患ひ給ひしは火遠理命なり。命は其兄

愛戀の情

火照命の鈎を失ひ給ひしかは、夥多の鈎を作りて償ひ給ひたれども、火照命は受けすして本の鈎を得んと強ひて云ひ給ひたれば、途方にくれて、海邊に泣き患ひ居まじとなり(記傳七)。又人類は憂苦困窮の爲めには往々歎息杯爲すことある者なるが、神も矢張斯ることの御し坐しと見えて、火遠理命は海神の國に三年留り給ひたり、而して歎息の何物たるは豊玉毘賣も海神も共に熱く知り給ひしなり(記傳十七)。されば神達も人類同様往々歎息杯し給ふことありしは明なり。豊玉毘賣が産み給ひし計りの御子を措きて、海神の國に歸り給ひし時に、太く悲まれしことは亦疑なき所なり(記傳六十三)。以上の事實に由て觀るに、本邦人の崇拜する神々は尋常人類と同様に御愛苦あり、御愁傷あり、御悲歎御歎息まで御坐ししことは毛頭疑なきことなり。

本邦人の崇拜する神々は、男女の戀情の點に於ても亦尋常人類と同様に御坐しとなり。其證據は左の如くなり。

伊那那岐命と伊那那美命が互に阿那邇夜志愛袁登賣袁、阿那邇夜志愛袁登古袁と言ひ給ひし段の如きは、即ち男女戀情の元祖なりしが、神にも尋常人類の如くに死せたる妻に會ひたしと思はせらるゝ御念慮さへ御坐されしかば、伊那那岐命は隱



れ給ひたる伊邪那美命をば、相見んことを欲ほされて、黄泉國にまで往き給ひたり(記傳六)史傳五の(書紀一)。速須佐之男命が足名椎に其女を御所望ありしは、必定其容色をめでられて御戀慕の情起り給ひし故ならん(記傳九)史傳十五(書紀一)の(三十五)。而して彼の夜久毛多都の御歌の如きは實に歌の元祖とも云ふべき者なるが、此の歌は即ち男女の愛情に關する者なり。蓋し大古戀慕けしよの最も著しき一例は大國主神の兄弟八十神が稻羽の八上比賣に婚はんと欲し給ひしことなり(記傳十)史傳十(一)の(七)の(十)。然れども八上比賣は八十神の戀慕をば烈しくはねつけて吾有不聞汝等言將嫁大穴牟遲神と言ひ給ひて、遂に其の如く爲し給ひたり(記傳十)史傳十(一)の(七)の(十)。而して八十神が八上比賣の言を聞き、非常に大穴牟遲神を惡み、種々謀計をめぐらして殺さんと爲し給ひしことに由て觀るに、神代の當時に於て早く既に戀慕けしよの杯のことのありし而已ならず、又戀の遺恨杯云ふことさへに有りしは歴然たり。また大穴牟遲神が御祖命の詔命の隨々須佐之男命の御所に參到りしに、其女須勢理毘賣出見爲目合而相婚坐しけるが、其は毘賣は命を甚麗神なりと思ひ、命は毘賣を麗神なりと思して、互に戀着し給ひし故なること明なり(記傳十)史傳十七(一)の(三十一)の(三十一)。而して其極や遂に毘賣を負ひて命の逃亡し給ふに到れり。是實に後世お半長右衛門の演也

し艶事を全く其趣を一にすることに於て、即ち其元祖とも云ふべきものなり。蓋し此時の艶事は人類社會の艶事に實に能く似たるものにして、眞に艶事らしきものにてありき。伊邪那岐命と櫛名田比賣との艶事、大穴牟遲命と八上比賣との艶事等に比し、大に人情に近く實に大進歩ありしこと云ふべきなり。然るに尙ほ更に一步を進めし艶事とも云ふべきは、八千矛神即ち大穴牟遲命の高志國の沼河比賣を婚ひ給ひしことなり(記傳十一)史傳十九(一)の(五十三)以下(五十三)以下。八千矛神の御口説、沼河比賣の御返答を始めとして其他の事情は、一々人類社會艶事の要素と同一のものなり。即ち第一には、賢女あり美人ありと聞き給ひて、御戀慕の情頻りに起りて、遠き路をも憂しとし給はずして遙々尋ね來給ひしこと。第二には、御口説に女子の心を動かすに足るべき種々巧みなる言を云ひたまひしこと。第三には、或は哀れに夜鳴く鳥のことを咏みて哀を催さしめ、或は夜明を告ぐべき鳥の鳴聲を怨みて御思ひの深きことを示さんと爲し給ひたり。第四には、沼河比賣は直には八千矛神の御戀慕に應じ給はずして、「女の心は浦瀆に立騒く千鳥の如く今こそは騒げども、後には平和になるべければ、戀死杯し給ふな」杯と云ふ意味にてたくみに御返答ありたり。弱きに過ぎず、強きに過ぎず、直に命の御意に従ひ給はざりしも、さりとして無げに御望をば絶たしめ給は

す、最ともやさしくなぐさめ給ひたり。第五には、沼河比賣が阿佐比能惠美佐迦延岐  
豆多久豆怒能斯路岐多陀牟岐阿和由岐能加夜流牟泥遠曾陀多岐多多岐麻那賀  
理麻多麻傳多麻傳佐斯麻岐毛那賀爾伊波那佐牟遠云々云給ひしが如きは、虚  
飾なしに男女同衾の状を表はしたる形容にして、斯の如きは即ち後世人類社會男  
女の場合にそつくり的應せらるべき形容なり。蓋し此の形容たる大に肉體上に過  
ぐることも無しとも云ひ難きものなれども、神々の御愛情は斯る肉體上の點に於て  
迄でも人類間の愛情と全く同一なりしことを知るには頗る裨益ある者と云ふべ  
きなり。又天若日子は天任を負ひて葦原中國に降り給ひたれども、大國主神の女下  
照比賣を娶りて八年になるまで復奏し給はざりき(記傳十三) (史傳二十一) (而して下  
照比賣が幾計り天若日子を愛し給ひしかは、天若日子が射殺され給ひし時、哭き給  
ひし御聲の天に到りし程にてありし事に由て知らるゝならん(記傳十三) (史傳二十一)  
次には天津日高日子番能邇邇藝の命と木花之佐久夜毘賣の御艶事なり(記傳十六)  
人類社會には容色よりこゝろが大切なることを知らずして、醜婦は一概に之れを  
嫌ひ、唯々容色の勝れたる婦人を而已好むが如き男子も間々ある事なるが、神は此  
の點に於ても、亦人類に大に異なる所御坐さざりしと見えて、心の良否等は問ひ給

はずして、唯々顔の醜き故を以て彼を惡み美人なるが故を以て之を愛でんとせら  
るゝ如き、御傾向も随分ありしと見えて、日子番能邇邇藝命は容色の勝れ給ひし故  
を以て木花之佐久夜毘賣を御寵愛ありしに引換へて、御顔の醜きが爲めに其御姉  
の石長比賣は後の御爲を知り給はずして之を返し送り給ひたり。又火遠理命が海  
神の國に往き給ひし時、海神の女豊玉毘賣は一眼見て戀着し給ひしが、是亦偏に命  
の御容色の勝れ給ひし故なりしなり(傳記十七) (十九)  
以上の例證に由て考ふるに、神も男女の情に於ては人類同様に御坐して、或は御戀  
慕のこゝとあり或はけしよの事ありしは全く人類社會に於ける如くなりしが、神  
々の御戀慕も往々御容色の如何に由りし者なり。されば醜婦を嫌ひ美人を愛つる  
杯のこゝとに於てまで神々の御戀情は人類の戀情の如くおはされしなり。  
御親が子を愛しみ給ふことも神々も人類の如くに御坐しゝなり。良き子を生みて  
は歡び給ひ、幸なき女の爲めに太く憂ひ給ひ、女の爲めには良き婿を得んことを願  
ひ給ひ、死せ給へる子の爲めには歎き給ひ、種々御心を挫きて子の御危難を避けん  
と爲し給ふ杯、都て人類社會の父母の慈愛と同様の御慈愛をは神々も御子達に對  
して表はし給ひし實例決して尠なからざるなり。

伊邪那岐命は天照大御神、月讀神、建速須佐之男命三柱の神を生み給ひし時には、良き子を生ひ給ひしこと、非常に歡び給ひて、其々知らせらるへき國をば定め給ひたり(記傳七)の六(書紀一)の八。是れ蓋し親の愛の歴然發表せられたる第一の例ならん。足名稚手名稚には初の女八稚女在りしに、八俣遠呂智年毎に來り喫て、今は唯一の女残り居りしに、其れさへ今は來り喫はるべき時の來りければ、老いたる兩親は女を中に置ゑて途方に暮れて泣き沈めりしなり。神々も雖も子を愛しみ給ふ御心は人類社會に於ると少しも異なる所は御坐さざりき(記傳五)の十三(史傳十七)の十五(書紀一)の三十五。子を愛み、種々御心をくだきて子の危難を救ひ給ひし母神は、大穴牟遲神の御祖命の刺國若比賣にて御坐しけり。大穴牟遲神の燒石に燒著かえて死せ給ひしときは、哭き患ひて天に參上りて神産巢日之命に請ひ給ひたり(記傳十)の十六(史傳十七)の十六。大穴牟遲神木に挾れて拷殺され給ひし時には、哭きつゝ求め其木を拆きて取出し給ひたり(記傳二十)の二十七(史傳十七)の二十七。而して此間に在らば遂に八十神の爲めに滅さるべければとて、木國之大屋毘古神の御所に速き遣り給ひたり。蓋し母親が子を愛み給ふことは、神も後世人類の如くに御坐ししことは、刺國若比賣の例にて最も明なり。天若日子が高木神の矢穴より衝き返へし給ひし矢の爲めに射殺され給ひし時に、其父神天津國玉

怨恨の情

神が妻子共と共に降り來て哭き悲しみ、喪儀を營み給ひしが如きは、其慈愛の深かりしことを徴するに足るものなり(記傳十三)の四十四。是等の例に依て觀るに、神も子を愛み給ふことは全く後世の人類と同様に御坐ししなり。神は人類の如くに忿怒の情御坐ししが、又怨恨の情も人類同様に有ち給ひしなり。例へば伊邪那美命が殊更に「莫不見我」と白をして殿の内に還り入りまじしにも拘らず、伊邪那岐命が火を燭して入り見給ひて辱を見せ給つる爲めには、伊邪那美命は特に御忿怒の情を表はし給ひし而已ならず、御怨恨の情も強く起り給ひしことと思はるゝなり。而して黄泉比良坂に於て千引石を以て追ひ來り給ふを、途を引き塞がれ給ひし時に當ては、御怨恨の情は益熾になり給ひしなり(記傳五)の五(史傳四)の五(書紀一)の八十。八十神が種々謀計をめぐらして、大穴牟遲神を殺さんと爲し給ひしが如き、單に大穴牟遲神は御自分等の戀の邪魔なりし故に之を無き者と爲さんと爲し給ひしには非らずして、八上比賣が「吾者不聞汝等之言將嫁大穴牟遲神」と言ひ給ひし爲に、御怨恨の情強く起り坐しし故なりしならん(記傳十)の十四(史傳十七)の十五。神も人類の如くに怨恨の情の御坐しし者なる事を證する一例は、石長比賣の御事件なり。大山津見神は木花之佐久夜毘賣に副へて其姉石長比賣をも奉りしに、其甚だ醜きに因り

て、日子番能邇邇藝の命は木花之佐久夜毘賣而巳を留めて、石長比賣をば返し給へるに因り、古事記に據れば大山津見神が耻恨み給へる如く(記傳十六)、書紀に據れば石長比賣の耻恨み給へる如く(書紀二)、孰れにしても當時神々が大に怨恨の情を表はし給ひしことは疑なき所なり。又木花之佐久夜毘賣が嫉める由を白をしゝに、日子番能邇邇藝命は之を信じ給はずして、雖復天神何能一夜之間令人有娠乎、汝所懷者必非我子歟と曰ひしかば、木花之佐久夜毘賣は忿り恨み給ひしことなり(書紀二)。次には豊玉姫は御産の時、勿臨と請ひ給ひしに、火火出見命聽かずして入りて、其の八尋大熊鰐なることを見給ひしかば、恨と爲して徑に海郷に歸り給ひしことなり(書紀二)。

慙愧の情

耻辱の情の如きも、神代の神々に後世の人類と同様に存せしなり。例證を擧げて之を證明せんに、先第一には、莫視我と伊邪那美命の白をされしにも係らず、伊邪那岐命が火を燭して殿内に入りて、伊邪那美命の御身に、宇士多加禮斗呂岐豆居りし様を見給ひしかば、伊邪那美命は、令見辱吾と言ひ給ひたり(記傳六)、書紀一(書紀一)、此時伊邪那岐命も亦慙給ひしと云ふ(書紀一)、又日子番能邇邇藝命が木花之佐久夜毘賣而巳を留めて、石長比賣を返し給ひし爲めに、古事記に依れば大山津見神が耻

恨み給ひしとあり、書紀に依れば石長比賣が耻恨み給ひし由なり。次には豊玉毘賣御産の時、妾今以本身爲産願、勿見妾と白をしたまひしにも拘はらず、火遠理命は其方に産み給はんとする様を竊に伺ひて、毘賣の八尋和邇に化りて、匍匐委蛇給ふを見給ひしかば、毘賣は之を知りて、以爲心耻給ひしことなり。實に毘賣は、妾恒通海道欲往來、然伺見吾形、是甚作之白して、即ち海坂を塞きて返り入り給ひしことなり(記傳十七)、書紀二(書紀二)、斯る例に依りて觀るに、神にも人類同様耻辱の情の御坐しとこと疑なし。

恐怖の情

恐怖の情も人類同様神にも亦御坐しとなり。其證據は第一には伊邪那美命の御身に、宇士多加禮斗呂岐豆神々の成居れるを見給ひて、伊邪那岐命は見畏而逃還給ひしことなり(記傳六)。又建速須佐之男命が天に上りて種々亂暴を働き、其極途に天の斑馬を逆剝に剥きて、服屋の項を穿ちて墮入れ給ひし時に、天照大御神の天石屋戸を閉て、刺幽り坐し、書紀に依れば發慍と故なりとすれども、古事記に依れば、天衣織女見驚而於梭衝陰上而死、體杯見畏み給ひし故なり(書紀一)、(記傳八)。次には豊玉毘賣の八尋の和邇と化りて、匍匐委蛇給ひし體を見て、火遠理命は驚畏而逃還給ひしことなり(記傳十七)。されば神にも恐怖の情の御坐しとは亦疑なき所なり。

驚愕の情

驚愕の情も人類同様に神にも御坐しとなり。其證據は第一には、黄泉國に於て伊邪那美命の御身に膿沸き蟲流れるを見給ひし時には、伊邪那岐命は大に驚き給ひて「吾不意到於不須也凶目汗穢之國」と曰ひ給ひたり(書紀一)。第二には、速須佐之男命が天に參上り坐しし時に山川悉く動み國土皆震きしかば、天照大御神聞き驚き給ひしと云ふ(記傳七)、(書紀一)、(四十五)。第三には、速須佐之男命が服屋の項を穿ちて天斑馬を逆剝きに剝ぎて墮入れ給ひし時に、古事記に依れば衣織女が見驚きて於梭衝陰上而死と云ひ(記傳八)、書紀に依れば是の時天照大御神驚動以梭傷身とあり(書紀一)、(史傳九)。第四には、彦火火出見尊が海神の門の前に徒倚彷徨給ひしに、海神の女閨を排きて出て、水を汲まんと爲し給ひし時に、圖らずも彦火火出見尊を視給ひて驚きて還り入り給ひしとなり(書紀二)。第五には、豐玉毘賣入尋の和邇に化りて、匍匐委蛇給ふ様を見て、彦火火出見尊は驚き畏みて遁け退き給ひしとなり(記傳六十三)。見なれぬ物を見れば、何なりやと訝かりて其性質を究めたしと思ひ、聞なれぬ人聲を聞けば、其人は誰なりやと訝かりて其の人を見んと欲する如きは、即ち之を訝奇

訝奇の情

の情と云ふ。今人の小説を好んで多く讀む如きは此情の爲めなること尠なからず。蓋し此情は讀むべからすと云はれたる書面を讀みたく思ひ、見るべからすと云はれたる物を見度思ひ開くべからすと云はれたる所を開けたく思ふ杯の場合に於て、最も強く起るものなり。此情も神々にも人類同様に御坐しものなり。其例證を擧げんに、第一には、伊邪那美命が「莫視我」と白をしたまひしにも係らず、伊邪那岐命が火を燭して陰に入りて見給ひしは即ち訝奇の情の爲めに御坐しとなり(記傳六)、(書紀一)、(史傳五)。第二には、一旦天石屋に隱坐し、天照大御神が又再び出座せるに至り給ひしも亦訝奇の情の爲めに御坐しとなり。天照大御神は其天石屋に隱り坐し、因り高天原も葦原中國も皆開けむと思ひ給ひしに、何を圖らん石屋戸の外にて八百萬神の歡喜咲樂様子に聞えしが爲めに、怪しと以爲て、天石屋戸を細目に開きて、其の理を尋ね給ひたり。是に於て天照大御神の訝奇の情を益々増さん爲めに、天宇受賣は益汝命而貴神座故歡喜咲樂と白をし給ひ、且つ其れと同時に天兒屋命布刀玉命が其鏡を指出して、天照大御神に示せ奉りしかば、天照大御神は御自身の御姿を見給ひて愈々奇と思して、稍々戸より出て臨み坐し、所を隱立てる天手力男神がすかさず其御手を取りて引出し奉りしなり。されば天照大御神が斯く

謀計に陥りて遂に天石屋より引出され給ひしも、職として訝奇の情の爲めに御坐しとなり(記傳八の六十一)、(書紀一の二傳十)第三には、氣多之前に於て苑の痛苦泣伏せるを見られて、大國主神が其理山を苑に尋ね給ひしも亦訝奇の情の爲めに御坐しとなり(記傳十)、第四には大國主神が出雲の御前の御前に坐す時に、自波穗乘天之羅摩船而内剝鵝皮剝爲衣服有歸來神(記傳十)ければ、其名を問ひ給ひしが、其の時大國主神の御心には訝奇の情大いに起り給ひしと思はるゝなり、而して來れる神答へず、且つ御從の神神に問はすれども皆知らずと白をこゝ時には、彌々訝奇の情を感じ給ひしやらん(記傳十)、第五には、豐玉毘賣の從婢は井に光あるに因り、仰ぎ見しに、麗壯夫ありければ、以爲甚異奇となり、即ち訝奇の情大に起りしなり(記傳十七)、又婢有人座我井上香木之上甚麗壯夫也、益我王而貴故其人乞水故奉水者不飲水唾入此瓊是不得離故任入將來而獻と曰をこゝかば、豐玉毘賣命奇と思ほこて出見給ひしとなり、此時豐玉毘賣の御心中には、訝奇の情は中々強く起り給ひしことと思はるゝなり、而して豐玉毘賣の告に依て、海神が自ら出見給ひし時には、其御心中にも亦此情強く御坐しとなり(記傳十七)、第六には、火遠理命は三年海神の許に留り給ひしが、一夜大なる歎き一つし給ひし時には、豐玉毘賣も海神も如何なる故かと其理由を

嫉妬心

知らまく思ほし給ひしなり(記傳十七)、第七には、豐玉毘賣が凡佗國人者臨産時以本國之形産生故妾今以本身爲産願勿見妾と白をこ給ひしかば、日子は其言を奇と思ほして竊に其産み給ふ様を伺み給ひたり、實に神も人類同様に、見る可らずと云はれたる物は、却て見ま欲しく思ほされしこと疑無きが如し(記傳十七)、嫉妬心も亦神に御坐まこゝ一つの情なり、天照大御神神隱の時に八百萬神が天照大御神を天石屋より出し奉らん爲めに企てし計略の趣意たる天照大御神は其の石屋に隠り坐しゝ爲めに、高天原も葦原中國も皆開けむと思ほしつらんが、更に貴き神の御坐せば天照大御神の御隱は憂ふるに足らずとて、却て歡び樂ぶ體に見せ掛けて、天照大御神に嫉妬心を起さしめ奉りて、遂に首尾好く誘き出し奉らんとせしにて、實に嫉妬心をば貴價とせしものなり、貴神坐故歡喜咲樂と聞き給ひし而已ならず、是れと同時に鏡にうつれる御自身の御姿を見給ひし時には、御嫉妬心大に起り給ひしと思はるゝなり(傳記八の六十一)、(書紀一の二傳十)畢竟八百萬神が斯る謀計を用ひたるは、神にも嫉妬心の御坐すこと能く知り居りし故に外ならざるならん、然れども嫉妬心の最も強く御坐しゝ神は須世理毘賣なり、八上比賣は大國主神と共に因幡より出雲に参りて、既に御子をさへ生み給ひしに、之をば木の俣に刺挟みて

貪慾の情

因幡に返り給ひしは即ち其嫡妻須世理毘賣の御嫉妬心を恐れ給ひしが故なりき  
(記傳十六)而して其御嫉妬は尋常のものに非らずして其日子遲神さへが之を和備  
互出雲より倭國に上り坐さんと爲し給ひし程のものにぞありける(記傳二十一)是等  
の事實に依て考ふるに神にも人類同様に嫉妬心の御坐ししことは疑なき所なり。  
加之此の情は人類に在ては殊に女性に強く存するものなるが神に於ても男性の  
ものよりは女性の者に多く御坐ししものと思はるゝなり。  
神に慾心の御坐ししことも其證據決して少きに非らず第一には天若日子は高御  
産巢日神及び天照大御神の重き命を受けて葦原中國に降り給ひしなるに此國に  
到り給ひては即ち大國主神の女下照比賣を娶り亦其國を獲むと慮りて八年に至  
るも復奏をし給はざりき即ち一方に於ては女子の愛に溺れ又一方に於ては慾心  
の爲めに天神の重き命をも忘却し給ひし次第なり(記傳十三)又火照命は海佐知毘  
古として鱈廣物鱈狹物を取り給ひ火遠理命は山佐知毘古として毛織物毛柔物を  
取り給ひしに火遠理命が兄火照命の再三辭し給ふにも係はらず強ひて佐知を易  
へて用ひんと乞ひ給ひしも畢竟火遠理命が本然の佐知而已にては御満足爲し給  
はずして他の佐知をも得給はんとの御慾心に出でしに外ならざるならん(記傳十一)

自慢の情

(書紀二)而して火遠理命の御慾心の決して尋常のものにあらざりしことは命が  
海神の教へ言の如くして其兄を苦めて遂に此の國を取り給ひしことにて明なり  
(記傳七)(書紀二)此の外に神が尙ほ下等なる慾心を表はし給ひし例は大穴牟遲  
神が速須佐之男命の寢まじし中に須世理毘賣を負ひて逃出で給ひし時に大神の  
生大刀生弓矢及び天詔琴迄を取り持たし給ひしことなり(記傳十)  
神にも自慢の情御坐しし事は種々の飾物杯御身に着け給ひしことにて明なり例  
へば伊邪那岐命の御手の手纏(記傳六)(史傳二十六)(書紀二)天照大御神の御頸珠(記傳七)  
(史傳七)左右の御美豆羅にも御鬘にも左右の御手にも纏き持たしたる八尺勾瓊  
の五百津の美須麻流の珠(記傳三十七)(史傳七)等の御飾は固より之を見給ふ他の神の  
御坐して斯る飾を御身に着け給ふ神を見給へば即ち感稱爲し給ふ如きことの御  
坐して觀る者に斯る心を起さしめんとするの主意よりして斯る飾をば神々も着  
け給ひしことならんされば神々も御自慢の情の御坐ししことは疑なきが如し而  
して又神が勝誇り杯し給ひて直接に高慢の情を表はし給ひし例も無きに非らず  
即ち天照大御神と速須佐之男命とが各宇氣比而御生子生み給ひし時に速須佐之男  
命は我心清明故我所生之子得手弱女因此言者自我勝云而勝佐備給ひしことなり(記傳)

一八の(史傳九)是に由て之を觀るに、自負高慢の情の如きまで本邦の神には後世の人類同様に御坐しゝこと明なり。

### 神の御知能

神の御知能

本邦の神には後世人類の情緒と同一なる情緒の御坐しゝことは、前段に於て説明せる如くなるが、其の御知能に至りても後世人類の知能と大差異は御坐さゝりしが如し。第一流の神と雖も、決して萬知の能力は有し給はざりしが如し。見給はず聞給すして事の状態を了知し給ふ杯の事は、中々に出來給はざりしが常の事にて御坐しゝなり。神も後世の人類の如くに欺かれ給ふこと御坐しゝなり。神も後世人類の如くに物を失ひ給ふ杯のこと御坐しゝなり。神も後世人類の如くに到底出來べからざることを爲し遂げんと勉め給ふ如きこと御坐しゝなり。

自若くは第三者の說明に依りて始めて事實を知り給ふ

神が他者の自若くは第三者の說明に依りて始めて能く事實を知り得給ひし例を擧げんに、第一には伊邪那岐命、伊邪那美命は實に第一流の神々にて御坐しゝにも拘はらず、伊邪那岐命は伊邪那美命の如何に成り坐しゝかを御坐しゝにも美命は伊邪那岐命の如何に成り坐しゝかを御坐しゝなり。されば伊邪那岐命は汝身者如何成と伊邪那美命に問ひ給ひたり。而して伊邪那美命の我身成不成合

處一處在と答へ給ひしに依りて、始めて伊邪那岐命は伊邪那美命の如何に成り給ひ

しかを知り、又伊邪那岐命が我身者成而成餘處一處在と詔り給ひしに依りて、其如

何に成り給ひしかを伊邪那美命は知り給ひしと思はるゝなり(肥傳四)(史傳二)(香紀

四)第二には、伊邪那美命先づ阿那邇夜志愛袁登古袁と語り給ひ、後に伊邪那岐命阿

那邇夜志愛袁登賣袁と語り給ひし時に、伊邪那岐命は女人先言不良と知り給ひし

と雖ども、伊邪那美命は斯くと知り給はざりしなり。若し斯くと知り給ひしならば、

最初より男に先ちて語り給ふことは爲し給はざりしならん。又伊邪那岐命に於て

も女人先言は不良とは知り給ひしと雖ども、何故に水蛭子淡島杯御心に叶はぬ御

子を生子給ひしか其の理由とては知り給はざりき(肥傳四の十)(史傳二の五)(香紀一)。

第三には、伊邪那岐命及び伊邪那美命は其生子給ひし御子の不良御坐しゝ理由を

知り給はざりしが故に、最第一流の天神の御所に參上りて其命を請ひ給ひき。然る

に最第一流の天神も最初より其理由を知り給ひしに非らず、布斗麻邇邇ト相て始

めて之を知り給ひしなり(肥傳四の三十七)(史傳三)(香紀一)第四には、還へらぬ旅に往きし者

に還へり呉れよ杯と愚痴を云ふことは尋常人類に在ては珍奇からぬことなるが、

伊邪那美命が火神を生ませるに因りて遂に神避坐しける時に、顯國に還へり得給



ふべき時期は既に過去れりしに伊邪那岐命は少しも斯くとも知り給はずして黄泉國に追往おひつまして還へりまさねと詔り給ひたり(記傳六)(史傳五)(書紀一)(卷十三)第五には、速須佐之男命は伊邪那岐神の依さし賜へる國を知らさずして、八拳須心前やぐらひせまきに至るまで、啼伊佐知なみいさち給ひしが、伊邪那岐神は其の理由を知り給はざりしかば、乃ち速須佐之男命に之を尋ね給ひ、速須佐之男命の御自白に依て始めて御妣おははの國根之堅洲國くにのこたけに罷らんと欲ひ給ふ故なりと知りて、大念怒いたくいかり給ひしなり(記傳七)(史傳七)(書紀一)(卷十五)第六には、天照大御神は實に最高の神の一にて御坐しとなり。然るに速須佐之男命が天に昇りましむ時に當て、速須佐之男命の御心をば確とは知り給はず、必不善心欲かならずしやうしんじやく奪わづら我われ國くに耳みみと唯臆斷的御推察を爲し給ふに過ぎ給はざりき。されば武具着けて待構へて、故に速須佐之男命に其上り來ませる理由を問ひ給ひたり。是に於て速須佐之男命は永く根の國に就つんとせらるるに因て、姊の命に御別を告げん爲めに參上りましむにて、決して異心無しと白をされけるが、天照大御神は其の果して眞實なりや否を知り給はざりしが故に、尙念を推して、然者汝心之清明何以知と詔り給ひ、速須佐之男命の各宇氣比おのゝみやまひ而生子なまはらと白をし給ふに至りて、始めて稍々御安堵坐し坐しと思はるるなり(記傳七)(史傳七)(書紀一)(卷七)第七には、速須佐之男命は足

名椎なづて、手名椎てなづてが櫛名田比賣くしなたひめを中に置きて泣き居るを見給いても、其誰々なるやも知り給はねば、又其の泣き居りし理由とては固より知り給はざりしが、足名椎の自白に依て、始めて之を知り給ひたり。又足名椎も神なりしとは雖も、速須佐之男命の御名さへに覺らざりしなり(記傳九)(史傳十五)(書紀一)(卷八)第八には、裸菟海鹽はだかうさみを浴み高山たかみの尾上おしに伏しければ、其の鹽の乾く隨其の皮悉たがひに風に吹き折かれし故に、痛苦いたみて泣き伏せりしを見給ひても、大穴牟遲神は其の何んの爲めに泣き伏せりしか知り給はざりしかば、之れを其の菟うに問ひ菟の自白に依て始めて之れを知り給ひたり(記傳十)(史傳十)(卷九)第九には、大國主神は申すに及ばず、御從おんまがの者も皆神にて御坐し、少雖すくなくも、少名毘古那神の波の穗より來り給ふを見て、如何なる神にて御坐し、か少しも辨へ給はざりしなり。而して蟾蜍かきの如き動物には却て之を知るの途を知りし者ありて、其教に依て始めて久延毘古神に問ひ給ふに至り、其教に依て大國主其他の神は其波の穗より來ませる神の御素性を始めて知り給ひたり(記傳十)(史傳十)(卷十)第十には、日子番能邇邇藝命は木花之佐久夜毘賣きはなの自ら白をし給ひし迄は、其の誰の女にして、御名は何人と云ひ給ふ神なるや知り給はざりき。又御子孫の御繁昌おんさかには石長比賣の大關係を有し給ひしことを知り給はずして、麗美うら木花之佐久夜毘賣而

已を留めて醜みにくき石長比賣をば返へし送り給ひしが、大山津見神より其の因縁を聞き給ふに至て大に驚き給ひしと思はるゝなり(記傳十六)、(書紀二)第十一には、豊玉毘賣及び其の婢まがたちは火遠理命を見奉りても、其の何れの神なりしか知り給はず、海神の教に依て始めて之れを知り給ひたり。而して海神の之れを知り居給ひしは如何なる理由の故なりしか明ならされども、恐らくは何か特に之を知り給ひし御事情のありし故ならん。而して海神と雖ども火遠理命を見給はざりし時より、門外に御坐し、神は火遠理命なりと知り給ひしに非らずして出で見給ひて始めて火遠理命なることを知り給ひしなり(記傳十七)、(書紀二)第十二には、赤海鯽魚あかうなぎ於喉鯁物不得のどをさぐりてもつか食愁をぢとは、海神は最初は少しも知り給はず、諸魚共の白をすに依て始めて之を知り給ひしなり(記傳十七)、(書紀二)第十三には、天若日子の御父天津國玉神が天若日子の死せ給ひしことを知り給ひしは、下照比賣の哭聲を聞き給ひしが爲めなり(記傳四十三)、(史傳二十一)第十四には、建御雷神は大國主神、八重事代主神、建御名方神等の御自白に依るにあらずしては、是等の神が果して天照大御神の命に従ひて、此國を天神の御子に奉る心なるや否を知るを得給はざりき。又大國主神は八重事代主神、建御名方神等の御自白に依るにあらずしては、是等の神は天神の御子に此國を奉

目撃して  
始めて  
給ふ  
給ふ

る心なるや否を知ることを得給はざりき(記傳十四)、(史傳二十三)第十五には、建御名方神は建御雷神が天より使節として降り給ひしことを知り給はざりし而已ならず、其の御聲を聞き給ひても尙ほ如何なる神が如何なる御話を爲し給ふかを知ることを得給はざるなり(記傳十四)、(史傳二十)第十八には、日子番能邇邇藝命天降の時に際して、天の八衢に居て、上は高天原を光らし、下は葦原中國を光らす神の御坐し、天照大御神も高木神も其の神の如何なる神にて御坐し、か知り給はざりしかば、天宇受賣神を遣はして之を問ひ究はめ給はれたり(記傳十五)、(史傳二十)初め伊邪那岐命、伊邪那美命は合交あひませんと爲し給ひしが、其の術を知り給はざりしかば、如何はせんと思ひ給ひしに、其時に鶴つる鶴つる有り飛び來りて其首尾を搖きたり、二柱の神見して之に學ひて即ち、交道まじりみちを得給ひしとなり(書紀一)、(史傳二)蓋し神が最初には知り給はざりし事實を目撃して始めて能く知り得給ひし實例も決して尠なからざるなり。第一には、伊邪那岐命が伊邪那美命を追ひて黄泉國に往き給ひし時、伊邪那美命は還り給ふべき時期は既に過ぎ去れる事を悔み給ひ、且具まじり與あは黄泉神よみかみ相論あひま莫視あは我われと白をして其殿内に還り入り坐し、殿内にて伊邪那美命は如何爲し居給ひしかを伊邪那岐命は知り得給はざりしが故にこそ、畢竟火を燭して入



之を問ひ究めしめたり(記傳二十五)七(史傳二十四)海神も其他の神も火遠理命の失ひ給ひし鈎かぎの赤海鰯あかあじ魚の喉のどに在りとは露知り給はず諸魚しようぎよの教しんに依て其喉を探り鈎を取り出したる時に於て始めて斯くありしことを知り給ひしなり(記傳三十七)三(史傳三十四)第八には日子番能邇邇藝命は木花之佐久夜毘賣を留めて一宿婚ひとよこひなせ爲けるが毘賣の妊み給ひし御子の果して御自分の御子なるか將た他の神の御子なるかを知り給はざりしが故に遂に火の Ordeal に依て之を究はめ給ひたり(記傳三十六)三(史傳三十七)第九には火遠理命は豊玉毘賣命を妻と爲し給ひ三年間も共に御暮ごましありしと雖も毘賣の御本身の八尋鰐やぶらに御坐されしことは夢にだも知り給はざりし而已ならず毘賣が八尋鰐に化りて匍匐はみ委蛇まよて居給ひし時と雖も之を目撃し給ふ迄では斯ることとは少しも知り給はざりしなり(記傳六十六)三(史傳六十二)本邦の神は下等なる者は申すに及はず第一流の者と雖も後世人類の如くに欺かれ給ふことの御坐し者なり是れ蓋し前段證明せし如く概して見聞し給はずしては事の狀態を知り給ふ事出来給はざりし如き神々に在ては固より怪むに足らざる事なり而して神代に於て神々の欺かれ給ひし實例は決して僅少にあらざるなり第一には伊邪那美命が豫母都志許賣を遣して伊邪那岐命を追はしめ給ひし時

欺むかれ給ふ

に伊邪那岐命が黒御鬘くろみかづらを取りて投げ棄て給ひしかば乃ち蒲子はらふ生り是れ固より豫母都志許賣の撫食ひらむ間に逃行にげまさん爲めの御計略にし給ひしことなりしに其れには露程も心付かずして豫母都志許賣は果して之を撫食ひらみて時を失ひたり然れども猶ほ追ひしかば其の右の御美豆みまめ良に刺させる湯津ゆづ間櫛まぢを引き開きて投げ棄て給へば乃ち葦あし生りしに亦御計略とは知らずして是を抜食ひらむ間に逃行にげましたり(記傳六十六)五(史傳五十二)の三(史傳一)第二には天照大御神隠れの時に思金神の智慧にて石屋戸の外にて歡喜あそび咲樂あそび様を爲し坐しに天照大御神の如き最第一流の神も甘々と欺かれ給ひて石屋戸を細目に開きて窺ひ給ひし而已ならず鏡に摸れる御自身の御像にさへ欺かれ給ひしなり(記傳八)四(史傳十一)三(史傳一)第三には稻羽の素菟すうは神なりしにも係はらず八十神が裸はだかなる菟うに海鹽うみしほを浴あて風かぜに當り伏せられと誨へ給ひしは苦みを増さしむる爲めの欺きなりとは知らずして其教の如くに爲しなり(記傳十)七(史傳十)第四には大穴牟遲神は赤猪あかじなりと見えし物は實は焼けたる石なりし事を知り給はざりき八十神が戀の遺恨の爲に猪いのししに似たる大石を焼きて大穴牟遲神を欺きて赤猪あかじなりと白しゝに大穴牟遲神は見事其の欺に陥りて死せ給ひ(記傳十四)七(史傳十七)然るに神産巢日之命の御助に依りて蘇生し給ひしに亦八十神

の爲に見事欺れ給ひて割れたる木の中に挟まれて拷殺され給ひたり(記傳十の)二十七の)恰も猛獸杯が人類に欺かれて死すると同様の目に合ひて死せ給ひたり亦須佐之男命が鳴鏑を大野の中に射入れて、大穴牟遲神をして其矢を探らしめ給ひしは、其野に入ります時に即ち火を以て焼き廻らして殺さんとの御計略なりしに、大穴牟遲神は少しも斯る事とは知り給はずして野の中に入り給ひたり。若し鼠の助無かりしならば必定死せ給ひしならん(記傳十の)三十九の)第五には、上に述べたる如く、大穴牟遲神は八十神及び須佐之男命に屢々欺かれ給ひしが、須佐之男命も亦容易に欺かれ給ひし神に坐しき。其の一例を擧げんに、須佐之男命が虱なりと偽りて其頭の吳公を大穴牟遲神に取らしめ給ひし時に、大穴牟遲神が其の妻の教に依りて牟久木の實を昨ひ破りて赤土を含みて唾出し給ひしに、須佐之男命は吳公を昨ひ破りて唾出すと以爲して御心に愛思ほして寝ましき。而して其の寝ませる間に、大穴牟遲神が大神の髪を握りて其の室の椽毎に結び着けて、須世理毘賣を負ひて大神の御寶共を取り持ちて逃げ出で坐しに、斯くとは露知らずして寢居坐ししが、大穴牟遲神が持ち出で給ひし天詔琴樹に拂れて、地動鳴けるに聞き驚きて醒め給ひて、始めて事の次第を知り給ひしなり。實に全く凡人の如くにて御坐し

なり(記傳十の)四十九の)第六には、死せし者に好く似たる者を見る時は、嚮きに死せしと思ひし者は其實は未だ死せずして尙ほ此世に存せりと思ひ、或は其の死せし者の蘇生せし者ならんと思ひ、若くは生れ替はりて來りし者ならん杯と思ふことは未開人には往々あることなるが、神も人類同様に斯の如き誤を爲し給ひしなり。阿遲志貴高日子根神が天若日子の妻を弔ふ爲めに來り坐しに、其の能く天若日子に似給ひし爲めに、天若日子の父及び父の妻は天若日子なりと思ひ違へ、我子は死なすてありけりと云ひて、乃ち阿遲志貴高日子根神の御手足に取り懸りて哭き悲み給ひしが、其の斯く過てる所以は此の二種の神の御容姿の甚能似給ひし故に外ならさりしなり。堂々たる神も全く凡人の如くに容姿の似たること杯の爲めに欺かれ給ひしなり(記傳十三の)五十二の)三二。

### 神の御爲能

神の御知能は前段述べし如くなりしが、神の御爲能も尋常人類の爲能と大差異の御坐さざりし如き場合決して尠なからさりしなり。即ち神も人類の如くに生れ給ひ亦死せ給ひしこと坐されし如き者多く御坐しなり。神も人類の如くに負傷し給ふこと御坐しなり。神も人類の如くに實體的の活動を爲し給ふことの必要御

能の御爲

坐しとなり。神も人類の如くに欲せらるることの出来給はさりしこと御坐しとなり例へば下し給へる御命令の御心の随々に行はれざりし如きこと御坐しとなり。神も人類の如くに死せ給ふ時は御身は腐爛し給ひし者なり。神も人類の如くに生存し給ふには飲料及び食料を要し給ひしなり。神も人類の如くに死せ給ふ時は黄泉の國に往き給ひしなり。神も人類の如くに疾病の御坐されしなり。神も人類の如くに日光を必要とせられしなり。去り乍ら神が種々奇徳を顯はして人類杯には思ひも寄らぬ事を爲し給ひし事あるは、今更申すに及ばざる處なるが、爰に二三例を擧ぐれば、伊邪那岐命が放尿し給へば巨川に化成りし如きは其一なり(書紀一)斯る奇徳の神をも避易せしめんとしたる程の千五百の黄泉軍を桃の子三個の力にて能く撃ち却けたるが如き其の二なり(記傳六)書紀一)建御雷神の御手の或は立氷に成り或は劍刃に成りしが如きは其の三なり(記傳十四)史傳二十)天照大御神の御光の事は申す迄でもなきことなるが、猿田毘古神杯が高天原より葦原中國迄を光らし給ひしが如きは其の四なり(記傳十五)史傳二十)豐玉毘賣は本來は八尋罌にて御坐されしに能く人類の神に化成り給ひたるが如きは其五なり(記傳十七)書紀二)其他伊邪那岐命天照大御神、速須佐之男命等が不可思議なる方法を以て種々の御

子達を生み給ひしが如き事實に依りて見るに、神の御爲能と人類の爲能と其性質に於て異なる所ありしは固より疑なきことなるが、亦神の御爲能と人類の爲能と其性質に於ては異同なく、唯々其の分量に於て異なりし如き場合も尠なからざりしなり。例へば黄泉國に於て伊邪那岐命が逃げ給ふにも、亦黄泉國の神達が追ひ給ふにも、共に人類が互に追ひ追はれつ走るが如くに、御足を以て逸散に走り給ひしに過ぎざりしが如し(記傳六)書紀一)伊邪那岐命が黄泉軍を防ぎ給ふには、人類の鬪争者の如くに、或は劔を振り或は物を投ぐる等の外は御術なかりしが如し、亦追ふ者を遮ぎるには大石を以て途を塞ぎ給ふ杯全く人類の爲す如きことを爲し給ひたり(記傳六)書紀一)伊邪那岐命の御上に就て考ふるに、神も人類の如くに穢るることの御坐し而已ならず、穢を穢ひたまふには水を以て洗ふ事の御必要坐しこと見ゆるなり(記傳六)史傳六)書紀一)速須佐之男命が天照大御神に請じて罷りなむと言して、乃ち天に參上り坐し、時に山川悉に動み國土皆震るきは、力ある人類が歩行する時に、地響の爲すと同一にして、唯其の大なるものに過ぎざりしが如し(記傳七)史傳七)書紀一)速須佐之男命が天に上りて亂暴を働き給ひし時に、或は天照大御神の營田の阿を離ち、或は其の溝を埋め、或は服屋の項を穿ちて、天の斑

馬を逆剝に剥きて墮し入れ給ひしが如きも、是亦人類社會の亂暴を大にしたる如きものに過ぎざりしが如し(記傳八の十一、三十九)。建御雷神が建御名方神の手を取りて若輩を取るが如くに搯み批ぎ給ひしが如きも、人類の爲し得べきことを大にしたるに過ぎざりしなり(記傳十四の二十一、二十)。建御名方神が千引石を手末に撃げて來給ひしが如きも亦同様なり(記傳十四の二十一、二十)。されば神は人類よりは能く走り得たまひ、人類よりは能く洗ひ得給ひ、人類よりは能く劔を振ひ給ひ、能く物を投げ得給ひ、人類よりは重き物を持ち行き給ふこと出來給ひしも、或る場合に於ては人類の爲し得べきことと同じ性質のことを、人類よりは優りて爲し得給ひしに過ぎざるなり。

上の如く神は或る事に於ては人類に全く爲し能はざることを爲し得給ひ、亦或る事に於ては人類の爲し得ることを唯々人類よりは更に優りて爲し得給ひしことの御坐し者なるが、亦或る場合に於ては、神と雖も尋常人類に比して少しも優り給ふこと御坐さざりし如くに見え給ひし場合も無きに非らざるなり。二三の實例を擧げんに、伊邪那美命の如き第一流の神と雖も、火之迦具土神を生みますに困り美蕃登炙れ給ひし時には、如何共爲し給ふこと能はせられずして遂に死せ給ひき

(記傳五の五十一、十三)。斯く伊邪那美命の死せ給ふに當て伊邪那岐命も黄泉國に往き給ひ還らぬ旅に往き給ひし者に還へりませね杯と愚痴を云ひ給ふより外には爲す術を知り給はざりき(記傳六の三十四、五)。速須佐之男命が天照大御神の服屋の項を穿ちて逆剝きに剥きたる斑馬を墮し入れられたるを見驚きて椽に陰上を衝きて死せ給ひし天衣織女の如きも、如何にも人間の如き弱き神にて御坐されしなり(記傳八の十一、二十九)。足名椎、手名椎は共に神なりしと雖も、大蛇杯に苦められて如何とも爲す術を知り給はざりき(記傳九の十六、十五)。大穴牟遲神が治療を施して稻羽の素菟に傷を癒し給ひければ、其の菟大穴牟遲神に「此八千神者必不得八上比賣雖負帑汝命獲之」と白し、果して其謂ひし如くに成りしが、是れは唯々將來の成り行きを豫知して白しに止まらず、此の菟の助けにて大穴牟遲神が八上比賣をば得給ひしなりと云ふ(記傳十の十三)。果して然らば此の菟は神にも優りたる能力有りしものと云ふべきが、實は此の菟は神なりしが故に斯かる奇徳の有りしものとも云ふ、即ち菟神と謂はるゝ所以なり。斯の如く奇徳ある神なりしにも拘らず、罽杯の爲めに衣服を剝がれて裸にせられし而已ならず、八十神の欺きに陥りて更に身を傷ひても、唯々泣伏すより外の術を知らざりき。されば或點に於

ては實に無能力なる神にて御坐しとなり(記傳十)。大穴牟遲神の如きは前にも云へる如く、或は火に焼かれ、或は割木に挟まれて屢々死せ給ひし而已ならず、須勢理毘賣の助に依て漸くに蛇蜈蚣(ひび)の難を免れ、鼠の教に依て辛じて最後の大難を免れ給ひし神なり。或は其の鼠も矢張神なりしならんが、丹は兎も角も大穴牟遲神の尋常人類の如くに乏しき御力の神にて御坐しし事は掩ふべからざるなり(記傳十七)。加之大國主神は嫡后(おほきさき)須勢理比賣の甚く嫉妬(うらやま)し給ひし爲めに困却し給ひて、遂に御家出を爲し給はんと迄での御決心ありし神なり(記傳十八)。高御産巢日神及び天照大御神の如き神と雖も、或る時は雉名鳴女の如きものゝ助を借らんとし給ひしこと無きに非らざるなり(記傳二十三)。猿田毘古神は高天原より葦原中國迄を光らす程の光を發して、日子番能邇邇藝命の御前に立ちて仕へ奉りし程の神にて御坐ししにも拘らず、貝杯に手を咋(く)ひ合(あ)はされて海鹽(うみしほ)に沈み溺れ給ひしとは、或る點に於ては實に驚くべく弱き神にて御坐しとなり(記傳十九)。火遠理命は兄火照命の鈎を失ひ給ひて兄に責められ給ひし時には、途方に呉れ給ひて海邊に泣き患ひ居まじとなり(記傳九)。火照命も鹽(しほ)盈(あふ)珠(たま)鹽(しほ)乾(かわ)珠(たま)を以て火遠理命の爲めに惱され給ひし時には大に避易し給ひしなり。

特に神の命令なりし而已ならず、殊に父神の命令し給ふことなりしにも拘はらず、其の行はれさりし事無きに非らず。即ち伊邪那岐命は天照大御神には夜之食國を知らせし事依し給ひ、速須佐之男命には海原を知らせし事依し給ひしに、天照大御神と月讀命とは各々父神の依さし賜へる命のまにまに知しめす中に、速須佐之男命は父神の依さし賜へる國を知し食さずして、却て天に上りて種々亂暴を働き給ひたり(記傳七)。神産巢日神は大國主神と少名毘古那神とに、兄弟に成りて此國を作り堅めよと曰ひしに、少名毘古那神は未だ此國出來上からざる中に、大國主神を棄て、常世國に渡り給ひしなり(記傳十)。高産巢日神及び天照大御神の如き最高等の神の御命令と雖も、往々行はれざりしことありたり。即ち此の二柱の神は思金神の説に従ひ、葦原中國の騷擾鎮撫の爲めに天菩比神を下し給ひしが、此の神は大國主神に媚び附きて三年に至るも復奏し給はざりしなり(記傳二十)。是に於て又思金神の教に従ひて天若日子を遣はし給ひしが、此國に到り給ひしや否、大國主神の御女大照比賣を娶り給ひて八年に至るも復奏し給はざりしなり(記傳十三)。是に於て天若日子が斯く久く留り給ふ所由を問はしめ給ふ爲めに、思金神の説に依て更に雉名鳴女を遣はされしに、雉名鳴女は却



て天若日子の爲めに射殺され給ひたり(記傳十三の史傳二十一)書紀二

### 神の御行爲及び御道徳

神の御行爲及び御道徳も人類の業爲及び道徳と大同小異にして神も大概人類の爲す如き事を爲し給ひ神の御道徳も人類の道徳と彷彿たるものにて御坐しゝが如し之を事實に就て徴するに善行も悪行も神に御坐しゝものは人類にもあり人類にあるものは神にも御坐しゝが如し其證明は次の如し。

殺傷は人類社會には往々起ることにして然かもはなはだ忌むべきことなるが斯く人類社會に於てさへはなはだ忌むところなる殺傷は神の社會に於ても屢々起りたる事件なりき伊邪那岐命が水蛭子を葦船に入れて流し去て給ひしが如きは其の御意志と結果とより申せばあるひは謀殺の一種なりしならんが是れは其の結果判然せざるが故に姑く措き更に判然たる殺傷の例を擧げん其の最も古き例は伊邪那岐命が迦具土神を斬り殺し給ひしことなり(記傳五の史傳五)書紀二是れ實に判然たる殺傷の始めなり而して特に殺傷の始めなりし而已ならず亦子殺の始めなりき實に殺傷は子殺を以て始りしなり伊邪那岐命が迦具土神を斬り殺し給ひしは迦具土神を生み給ひたる爲に伊邪那美命が死せ給ひしを忿り給ひし故

殺傷

行爲

なるが斯る故を以て子を殺す事は開化せる人類社會に於ては決して是認せられざるどころなり若し斯る事を爲す親のあらんには彼は國家の罪人たるを免れざるなり野蠻社會には産後母の死する場合には其の生みたる幼兒を殺すが如きは往々行はるゝことなるが是れは其養育の途なきが爲めなり敢て母の死の原因なりとて其子を悪むが故には非らざるなり然るに伊邪那岐命が迦具土神を斬り殺し給ひしが如きは其の御養育の御困難に坐し坐しゝ杯の故には非ずして全く深く愛し給ひし伊邪那美命の死せ給ひしを恨み給ひて忿り給ひ惡み給ひし故なりしが如し伊邪那岐命が恨み給ひて唯以一兒替我愛之妹者乎と曰ひしこと及び迦具土神を斬りて或は三段に爲し給ひしと云ひ或は五段に爲し給ひしと云ふことに據りて察するに此の時の御殺害は慈愛の御心に出でしものに非らずして忿怒の御心に出でしものなること疑なきが如し(書紀十一)伊邪那岐命と伊邪那美命とは男女の眞正なる愛情を以て互に愛し給ひし御中なりしが伊邪那美命が莫視我(記傳六)史傳五の書紀一と申し給ひしにも係はらず伊邪那岐命が火を燭して内に入り視給ひて辱を見せ給ひしことを怒り給ひては伊邪那美命は或は豫母都志許賣をして追はしめ或は八雷神に千五百の黄泉軍を副へて追撃せしめ給ひし而已

ならず、自身にも力を極はめて追ひ來り給ひしは、御怒りの餘りに、曩には此上も無く愛し給ひし御夫に對し殺意を以て逼り給ひしなるならんが、伊邪那岐命が千引石を以て黄泉比良坂の路を塞ぎ給ひしかば伊邪那美命は彌々怒りて、爲如此者汝國之人草一日絞殺頭と言をし給ひしに、遂に將來斯の如くなりしことなり(記傳六の(卷十四)是所謂可愛いさ餘りて悪さが百倍の例なり。人類社會には前には非常に愛せし者に對しても、一旦怨を含む時は仇を爲さん崇を爲さんと誓ふ如きこと婦女子には往々あることなるが、此の時伊邪那美命の御振舞の如きは全く是れと同一の事にて御坐ししが如し、實に夫婦不和の始めなりし而已ならず、怨を含み、仇を爲すの始めなりしなり。其の次の殺傷騒きは、八十神と大穴牟遲神との御事件なり。八十神は始め大穴牟遲神を屢々殺さんとし給ひしが、遂に大穴牟遲神の爲に退治せられ給ひたり(記傳十の(史傳十七)御兄弟が斯く互を殺し合ひ給ひることは實に痛歎の至なり。而して其れも何か堂々たる理由の爲めならば兎も角も、八十神の大穴牟遲神を殺さんとし給ひしは全く痴情の爲めに外ならざりしなり、戀の遺恨の意趣霧らしに過ぎざりしなり。又大穴牟遲神が遂に八十神を退治し給ひしは、曩の非道を罰し給ひしとは云ひながら、御兄弟のことなりし故に御勘辨ある可かりしに、左

近親の不  
和

は無くして斷然と復讐し給ひしなり。

右の事實に由て觀るに、殺傷は堂々たる神々の御間にも往々行はれしことなる而已ならず、多くは御近親の間に起りしことなりしは實に痛歎の至りなり。而して御兄弟中の實に言語に斷えたるものなりしは、八十神と大穴牟遲神との御間なりしが、其れとは大に趣を異にしたれども、御兄弟中甚だ面白からざりしものは、火照命と火遠理命との御中なりき。而して此の御兄弟の御不和に關しては三個の點より講究すべきなり。即ち第一には火照命の御心の上より論すべきなり。第二には海神の御心より論すべきなり。第三には火遠理命の御心より論すべきなり。抑も此の御兄弟の御不和の發端は、火遠理命が火照命の再三辭し給ひしにも係らず、強いて幸を互に易へ給ひて火照命の鉤を失ひ給ひしにありたり(記傳十(卷十三)の(火遠理命が火照命の鉤を失ひ給ひしに、火照命が各々幸を返へさむと乞ひしかば、火遠理命は魚一尾をも得ずして遂に鉤を海に失ひ給ひし由を答へ給ひたるに、其の兄強いて乞ひ徴り給ひし故に其の弟御佩の十拳劔を破りて五百鉤を作りて償ひ給ひたれども取らず、亦一千鉤を作りて償ひ給ひたれども受けず、猶ほ其の正木の鉤を得むとぞ云ひける。是に於て其の弟海邊に泣き患ひ居ませしことなり。兄は最初より幸

を取り易へることは再三辭し給ひしには相違なれども、弟が失ひ給ひし物を強いて急責り給へるは誠に御無理なる御難題にして、尋常人類社會に於ても少しく心ある者は、何人に對しても斯る無理なる難題は決して云はざるならん。況してや人の兄たる者其の弟に對して斯る急責を爲すことは決して無きことならん。此の場合に於ける火照命の御行爲の如きは人類以上の者にては決して御坐さざりしが如し。次に議すべきは海神の御行爲なり。海神は火遠理命に其兄火照命を困むる術を誨へ奉りて、且爲然者吾掌水故三年之間必其兄貧窮若恨怨其爲然之事而攻戰者出鹽盈珠而溺若其愁請者出鹽乾珠而治如此會愍苦云云をされたり(記傳十七)紀十九。人類社會に於ては、兄を困むる術を弟に誨へて其事を勸むるが如きは、容易ならざる惡事ならん。殊に我が利害の關係せざる場合に於て斯る事を謀るに非ずして、我俾夫たる者をして其兄の家督を横領せしめん爲に、斯る謀計を教へんとする如き者は、實に大惡人と云ふべき者ならん。然るに海神は少しも耻る色なく誠に當然の事を教ふる如くに教へ給ひたり。實に驚き入りたる次第なりと思はれんが、神々の間の事は一概には是非の判断を下すべからず、唯々尋常の考を以て推さんには、此場合に於ける海神の御行爲の如きも決して人類以上の者に非ざりしと云

ふべきなり。第三に議すべきは火遠理命の御行爲なり。海神が少しも耻給ふ色なく、弟たる者に兄を困むる術を教へ給ひし如くに、火遠理命は御歸國の上、即ち海神の教へし隨々爲して困め給ふの極、兄をば溺らし給ふに至れり。火遠理命が火照命を溺らし給ひしは、火照命が荒き心を起して追め來り給ひし故なりといはんか、其追め來り給ひしは火遠理命が海神の教の如くして、年一年に火照命を貧窮に陥らしめ給ひしが故なり(記傳十七)書紀三。而して火遠理命は首尾好其兄を困しめをふせ給ひて遂に兄をば我が俳人(俳人)と爲し給ふ事を得給ひたり。火遠理命の爲には誠に御目出度事なりしとは雖も、若し之をして尋常人類社會のことならしめば、決して是とせらるるものにあらざるならん。殊に最初火遠理命が幸交換のことを其兄火照命に乞ひ給ひしに火照命は三度迄之を辭み給ひしに、強いて御所望ありしが故に不得止して遂に易へ給ひたるなり。而して火遠理命は兄の最も大切に給ひし物を失ひ給ひしなり。而して火遠理命が何本鉤を作りて償はんとし給ひても、火照命が御承諾なくして失せたる物を急責乞ひ給ひしが如きは、固より無慈悲なる御急責に相違なかりしと雖も、固と其の曲は火遠理命に御坐せしことなれば、其の兄に對して仇をせらるべき理由は毛頭なかりしが如し。海神の助に由りて失せたる鉤

の發見せられたる上は、之を兄に御返却ありて且つ鄭重に詫び給ふべき筈なりしが如し。然るに左は無く兄の大切に爲し給ひし御寶を返へす時、之に對して種々惡口を云ひ給ひし而已ならず、御舅の教へ給ひし儘に兄をば困しめて遂に天下を取りて兄を我が俳人と爲し給ひたり(記傳十七)。斯る行爲は人類社會に於ては甚だ忌み嫌ふべきものならんが、天下の主と成り給ふ程の神が少しも憚る所なく爲し給ひたるに由て考ふるに、他の事に於ては神も人類も同様なること多くありしと雖も、道徳上の考に至りては時に或は大に相違ありて、凡眼を以て見る時は惡事の如く見ゆることも神代に在ては惡事には非らざりしが如し。

人類社會には往々怨恨の爲めに意旨返へしを爲し若くは死したる後に於て其靈魂が祟を爲すと云ふことあるが、斯ることも決して尋常人類の時代に於て始めて起れるものに非らず、神の間に於て早く既に行はれし所なり。即ち前段陳述せる神の社會の殺傷より御近親の御不和に於て見るに、意旨返へし若くは祟り等の爲めに起りしものなきに非らず。伊邪那美命が豫母都志許賣をしてやくこのけりかみ八雷神をして、黄泉軍をして、伊邪那岐命を追はしめ給ひし而已ならず、御自分にも強く追ひ給ひしが如きは、前陳せる如く全く御意旨返へしを爲し給はんが爲めの御目的にてありし

意旨返へし及び祟

ならん。亦黄泉比良坂まで追ひ給ひたる時に、伊邪那岐命が千引石を以て其の路を塞ぎて、其の所より先へは追はしめ給はざりしが故に、即ち怒りてかくしたまはらみましのくにの人草一日絞殺頭ひとくさのかしつかしつこうむと言をし給ひしが如きは、堂々たる神の間にも意旨返へし若くは祟り等のことありしことを歴然證するに足らん(記傳六の(書紀一)の十四)。大穴牟遲神が御兄弟たる八十神を遂に亡ぼし給ひしも、御意旨返へしの御精神に出じものと思はるゝなり(記傳十四の(史傳十七)の十六)。神も人類の如くに慙ることあり恨むことある而已ならず、其の慙や恨を與へたるものを誑て、仇を爲さんとし給ふ如き者なりしことは、石長比賣の返へされ給へるを慙ぢ恨みて、大山津見神が日子番能邇邇藝命の御子孫の御壽は木花の如くに脆く不堅固あれがしと誑給ひしことにて明かなり(記傳二十の(書紀三)の十六)。一説には斯く慙ぢて誑しは石長比賣なりしと云ふ、若し果して然りしならば、女性には斯ること有りがちのことなれば、神と雖も敢て驚くに足らずとするも、若し大山津見神が斯く誑び給ひしとせば、實に驚き入りたる次第なり。何んぞなれば木花之佐久夜毘賣も大山津見神の御女にて御坐されしが故に、日子番能邇邇藝命の御子孫の御壽の長からざらん様にと誑ぶは、取りも直さず我が子の子孫の短命ならん事を誑ぶ者なればなり。火遠理命の火照命を困しめ給ひしは、意旨返へ